

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年五月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」の記載あり
(紙数七三枚)〕

目録

政務大改革ノ御親書

餘田・井坂ノ熊本藩士ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔小松帯刀へ陸軍掛等ヲ命ス〕

福島新二郎書翰

筑前・久留米・薩州・肥前・肥後五藩へ御達

藩政大改革ニ就テ官制名称ヲ改ム

英国公使来ニ就テ達書

伊地知正治ヨリ西郷・吉井等へ書翰

島津大隅守ヨリ尾張大納言へ書翰

折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰

土持佐平太ヨリ黒田・川畑へ藝州ニ於テ探訪ノ報告

〔別冊之一〕

〔別冊之二〕

海軍方設置布達

岩山壮八郎ヨリ柴山良助へ送ル書翰

毛利左京外三名ノ書面

西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

寺院廢合命令

寺院廢合布達

幡島三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

清国福建兵備ノ書牘

筑前へノ返答達五卿筑前前
渡海ニ就テ

〔毛利家処分ニ就テ土州書付〕

道島家記抄共戸等召補
ヘタル始末

薩藩堀某上京筑前太宰府五卿警衛五藩之模様伝聞書

小松帯刀ヨリ桂右衛門へ報告

岩下佐次右衛門へ陸軍掛ヲ命ス

小松帶刀月番御免

御側御用人役名ヲ廢ス

諸郷兵上京予備

五卿五藩へ分預達書

肥後熊本へ御当リ之書付

神事掛ノ職員被設度建言

長州家老中ノ歎訴書

一三〇 政務大改革ノ御親書

一三〇ノ一

家老中江

當時天下之形勢致一變、軍政急務之場ニ立到候処、万国大道之明不明ニ依、国家之盛衰存亡相分候得ハ、イツレ名分ヲ正シ、条理ヲ踏へ候儀、強國之基ニ候間、各誠心ヲ開國是相立候様、忠精ヲ尽呉候処、偏頼存候、右ニ付テハ事多端ニ涉候テハ、其力專一ナラス候故、夫々掛申付候間、苦思焦慮セシメ、事之体用ヲ弁別シ、時態ニ応シテ所置可致候、勿論掛之事件委任不致候テハ、十分之働出来兼候付、事之成否ヲ以褒貶可致候間、屹卜差ハマリ、諸役場振立、職掌相励、国威相立候様

勉勵可有之候事、

寅五月初日

一三〇ノ二 一御国政之儀ニ付、

御別紙之通細々以

御書取被 仰出、誠以不容易

御趣意奉恐入候条、一統謹テ奉承知、

御賢慮之御旨深遵奉仕、其職掌相励候様可尽忠誠候、

此旨向々江不洩様早々可致通達候、

五月朔日 帶刀小松 式部上 刑部新納

一三一 餘田・井坂ノ熊本藩士ヨリ黒田嘉右衛門へ

書翰

此余田・井坂兩人ノ書ハ、筑前在勤中ノ事ニアラス、依テ別ニ記載スヘン(原註)

御清康可被成御起居奉敬賀候、先以過日ハ罷出、火薬製造局拜見之儀奉願候処、願之通被為叶、急ニ拜見仕、千万難有仕合ニ奉存候、惣体此節罷出候ニ付テハ、万端厚御配慮ニ罷成、無残所御製造局モ拜見仕候次第、誠ニ大慶之仕合ニ奉存候、其上長々之滞留ニ相成、御厚情ヲ蒙候儀、深々辱奉存候、随テ塩豚一器之内、誠

ニ輕微之至ニ御座候得共、聊御札之驗迄奉呈厨下申候間、御笑留被下候ハ、辱ク奉存候、然処前条之通、所々拜見モ相濟候ニ付、明後三日ヨリ掃郷仕度存念ニ御座候間、御厚配之御礼、且御暇乞旁明朝參上仕候テ、委細可申上候得共、一先此段マテ得貴意置申度、万緒讓拜顔、草略如是ニ御座候、以上、

五月朔日

餘田三右衛門

兩士肥後熊本藩人

井坂甚左衛門

黒田嘉右衛門様

品添

一三三 〔小松帶刀へ陸軍掛等ヲ命ス〕

陸軍掛 造士館掛 銃菓方掛

甲冑方掛 台場掛

小松帶刀殿

右岩下佐次右衛門殿被罷下迄之間、兼相勤候様被仰付候条、此旨向々へ可通達候、

五月三日

刑部納新

一三三 福島新二郎書翰

一三三ノ一

薩藩福島新二郎帰国ノ序山口へ罷越シ

政府へ対シ存慮申述度トノ事ニ付添書

梅雨之候御座候処、

各位御忠壯被成御精勤奉欣賀候、然ハ結局幕違一件ニ付、御用向申含、長嶺清之進差返シ、高森迄御同局中ヨリ御一人ニテモ、御出浮被成度段申遣シ候ニ付、御承知可被成候、扱又同伴ニ付、黒田了輔事、横道外記一同過ル三日夜中江波ヨリ乗船、上国へ報知旁々罷登リ申候、就テハ薩藩同藩福島新二郎儀、大坂詰居目付役ニ候処、ゲイ州表様子為探索、去月下旬下向之処、追々拙寓へ黒田同様來訪、及懇話候次第ニ御座候、此度結局一条報知旁、国許へ罷歸ル覚悟ニテ、今日ヨリ爰許出帆、歸リ掛ケ御国へ立寄り、木戸其外様へ相對シ、存慮ヲモ申述度ニ付、何卒黒田代リニ罷出度段相頼ミ、懇情切至感服之至御座候、罷出候ハ、黒田同様無内外御厚待可被成下候、委曲ノ儀ハ、此仁口頭ニテ御承知被下度候、右為先究奉修短簡候、其内時下為国御自愛

奉專橋候、匆々頓首謹言、

一三四ノ一 一午前河瀬安四郎高森ヨリ參着致候事、

但前日深江澄蔵ヲ以テ、出藝ノ段申越シ置候、依之參着致候事、

一夜塩水鼎助岩國ヨリ參着候処、御家老一同即刻引取候事、

一御支藩岩國御名代執レモ今夜中引払帰國致シ候事、一今朝薩人福島新二郎寓寺へ入来、国元へ為報知罷帰

候ニ付、山口表へモ立寄、重役相對ニテ存慮振ヲモ吐露致度トノ事ニ付、前断添書相認メ差出置候事、

五月五日

一三四 寅五月八日筑前・久留米・薩州・肥前・肥後

五藩江御達

一三四ノ一

筑前大宰府ニ罷在候三條實美始五人^{政也}之者、今度大坂表

江被召寄候ニ付、筑前表ニ罷在候御目付小林甚六郎江

可被相渡候、且又甚六郎得差図、大坂表迄之護衛可被相心得候、尤宰府出張之家来江ハ甚六郎ヨリ相達候筈

ニ候間、可被得其意候、

五月

一三四ノ一

寅五月末方ヨリ廢寺ノ一件相起リ、当分御座立加治木

ヤシキ、子六月六日坊中馬場八ヶ寺、今日中引取候趣被

仰渡、俄ノ事ニテ大混雜、其内二二ヶ寺被召置候由ニテ、ソコニ諸道具持運ヒ方有之、大騒キニテ候由、奥

山平故同村へ被差越、直見分ニテ被相嘶候事、

六月九日記ス

一三四ノ三

〔朱〕前文欠失

〔朱〕前文欠失

黒田モ相止リ候ハ、宜敷候へ共、罷越候上ハ命ヲ縮候ニ相違無之、仮令命ヲ捨候テモ、迎モ引返候儀無覺

束、唯犬死相成申候、大藩ニモ同人位ノ人傑ハ無之奉存候、全ク尊兄ヨリ死勸之様相当リ可申、弥以差違^{シレカ}

義モ追々相發可申、早速御止被成候方ト尚考申候、武井コソ弥死場所參リ候半、察ニハ同家大夫甚未熟之処

御座候半、大老不出モ全夫故ト察居候、會・越前後之御沙汰今更残念ニ御座候、以上、

五月十日

三四ノ四
遠藤事上京近日内仕候様子、先生之空言正直ニ心得罷
越候テハ、以之外ニ付、セイ〜出立前參候様申遣候、

兼子君

仲邑

御直覽

一三五 藩政大改革ニ就テ官制名称ヲ改ム

一御記録奉行之事、

御文書奉行

一御記録方添役之事、

御文書方添役

一御記録奉行見習之事、

御文書見習

一御役所之事、

御文書方

右之通御役名等、旧名被復候旨被 仰出候条申渡、向
々へ可致通達候、

寅五月十二日

帯刀

一三六 英国公使来ニ就テ達書

英国軍艦、近々長崎ヨリ前之濱へ来着之賦ニ候、右ハ
御両殿様深 思召之訳被為在、於彼ハ重任之者乗組居、
夫々至当之御会釈被為在答候、尤軍艦之儀ハ、何ソ祝
事向等付、祝炮打候万国通例之式礼ニテ、於此御方モ
右仕向ニ応シ發砲相成答ニ付、自然人心動揺騒々敷成
立候テハ、屹ト不相濟候間、一統右之趣明察平易可罷
在候、依時機上陸被差免儀モ可有之候間、万一魚暴之
振舞有之、御難題筋釀出候儀共致到来候テハ、別テ不
容易事態、剩御命令不被為行届場ニ相当リ、万国中へ
ノ御国恥何共奉恐入候間、決テ見物ケ間敷ハ勿論、聊
不勘弁之儀有之間敷候、此旨向々へ申渡、末々之者共
へハ奉行・頭人・主人ヨリ屹ト可申渡候、

寅五月十五日

刑部

一三七 伊地知正治ヨリ西郷・吉井等へ書翰

尚々、上封御海恕可被下候、

暫時は不鳳音候得共、御一同様御揃御連勤之筈奉大慶候、二二野生無事在勤仕居申候間、乍余事御放意可被下候、去ル十三日堀直太郎(為影)着京、筑表之儀巨細承及候処、其後既ニ幕より表通り御達ニも相成居、尤当地之形勢旁之処も御座候段は、自然向々より相通候半欵、仍て私状ニは態と不申上候、

備中之国倉敷一揆之儀ニ付、其時分諸方より承及候事共、先日(采)万年丸(丸魁)便より申上候処、果て其頭取は、長州人立石孫一郎と申ものにて、南郡屯集人数之内にて逆寄セ之企致候、不同意之頭役一人を殺し、官之兵器を盗て出発し、初ハ都合百人位にて出立、彼仕合ニは相成候由、委曲ハ右立石死骸懷中ニ残居候浮沈日記に、相記御座候ニ付、自ラ御高覧ニも触候事と奉存候、其中御見合共可相成儀は、備前より御届之趣とは、天地黑白之違にて、実ハ備前よりは旁致都合呉候上、退帆之節に至り、船手当も世話仕候段、是にて当時之人氣も少しは被察事欵と存候、右一揆人数長へ立帰り候て被誅候由、可惜次第ニ御座候、其後当地至て静にて、近比は外方之評判大ニ宜敷、偏ニ薩周旋ニ仍て、長州無事生民、四海沸乱之苦を免れ

候筈杯と外方にては申居候由、何より能キ人氣ニ赴事ニ御座候、今日海江田出立ニ任せ、不取敢一左右如斯御座候、再拜敬白、

寅五月十五日

伊地知正治

西郷(隆盛)吉之助様

吉井(友実)幸輔様

伊地知(貞繁)壯之丞様

侍史

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

一三八 島津大隅守ヨリ尾張大納言へ書翰

(尾州家藏)

十四日ノ尊翰、謹テ奉拜見候、先以梅雨ノ候御座候処、愈御清安被成御座、欣喜至極奉存候、陳ハ今般愚拙登京仕候段達賢聴、縷々御懇篤ノ尊翰被成下、不肖鄙野ノ愚拙実以恐縮ノ至奉存候、御了解ノ通不容易形勢罷成、御用立候見込モ無御座候得共、臣子ノ分傍觀座視ノ時ニ無之卜存詰候赤心迄ニ上京仕候得共、即今ノ処ニテハ更ニ詮立候尽力モ無御座、唯慨嘆ノ外無他次第ニ御座候、尊体御宿痾少々御快方被為成候ハ、御登

京御座候様奉伏願候、然時ハ無力同体、一層ノ尽力ヲ倍シ候義ト、偏ニ奉仰慕候、先ハ右御礼申上度、奉捧愚札候、誠恐敬白、

五月廿日

再白、不順ノ時季、天下ノ御為御保護御座候様奉希望候、扱御国産ノ品々御惠投被成下、別テ難有拝受仕候、随テ此品篋薄ノ至御座候得共、御礼申上候驗迄奉備高覧候、御笑留被成下候得ハ、本懐ノ至奉存候、恐惶謹言、

島津大隅守

巫相様

尊報

一三九 折田要蔵ヨリ大久保一蔵へ書翰

当日も快晴、益御壯剛被成御座、大慶至極奉賀候、然^{元ノマ}は昔朝ハ奉呈寸志候処、無御扱御所存之趣ニテ、態々為御持御返却ニ相及、如何とも当惑之至、筆紙ニ尽し難恐懼仕候、已ニ其折も奉申上候通、昨年以來縷々配慮、此度聊本懐を相達し候処、無存掛前条之次第、就

ては私事何そ貴意ニ触不可然義候、又ハ賄路を用て進達を求候ものト、被思召て之事ニ御座候哉、近比恐入奉存候得共、御所存之旨被為在、御返却於被下は、此兩様かと誠ニ赤面十方ニ相暮、夜前脇方より罷帰、雷封拜見否万憾千愁、一睡も得不仕、再応不顧失敬奉申上候、扱御存知之通、不明識之私昨年七月被赦幽囚、即日海防之献言 廟堂ニ被相行、未発之燃崎ヲ築立、神瀬ヲ埋、欠典之大砲鑄造を初、随て御上京御供滞京之間、楠公社并ニ攝海武備之愚見識をも献し候処、是又無遺漏御用被下、殊更於二條城閣老中江之舌戦、武門之面目古今ニ秀、世人一世之大功業を数ヶ月間ニ相終候仕合、多は古人ニも恥不申事ニ奉存候、扱右功業は私之功業ニ無御座、私之才識を知得候人之大功と奉存候、尤其成功は天運ニ候得共、創業ハ偏ニ私一人ニ帰候事、左候得は是より外武人之祝義と申すは、決して無御座候、右祝義を表し候ニは、私之才識を知り候人なくて、可仕理更ニ無御座候、仍之呈寸志候、且又今般中將様御下向御供被仰付、已ニ 御安座も慥ニ奉見届、素志も相達申候間、近々上京仕、 公辺江首尾掛之取

始末、并ニ楠公社御造立旁之石材取始末仕申度、仍之近々之内発足日限等も願出申度奉存候、左候得は天下紛乱、割拠之世態、如何様之變難ニ逢候義も難計、於此時私一世之功・不功深味之事件は、尊公様より外御存知之御方無御座、仍之種々肝胆を尽シ、名声ヲ後歳ニ残し申度、龜刀を進呈仕候処、御所存之訳にて御退ケ被下候てハ、近比残懷至極、実ニ今日限りと深恥入申候、是にてハ私心中御見限りとならて不奉存、夫にてハ余り御無極ニ奉存、又々進呈仕候、私心中さそと被思召、御受用可被下、猶又此上ニも御承引無之候てハ、直ニ參向思慮之趣意、細々可奉申上候得共、其内不顧不敬、御封中奉申上候、幾重ニも御受用可被下奉願上候、恐惶誠言、

折田要藏

五月廿二日

大久保一藏様

二白、種々不敬之言論、偏ニ御寛免奉願上候、

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

一四〇 土持佐平太ヨリ黒田・川畑へ藝州ニ於テ

探訪ノ報告

大宰府御出張

藝州滞在

黒田嘉右衛門殿

〔綱幸〕
土持佐平太

川畑伊右衛門殿

長征旁之儀ニ付、当月十七日附を以、及御問合候通ニて、防長家老等去廿一日限致出藝、御達之趣御請書可差出旨、小笠原閣老より御達相成候処、同十九日岩國藩香川源左衛門・飯田四郎兵衛廣島江致參着、復命ニ付ては、来ル廿九日迄被召延度段、別紙写之通歎願書致持參、申出之趣無余儀筋合にて、廿九日迄は御猶予有之、併万一右期限ニ御請書不差出候節は、即御裁許違背ニ付、速ニ問罪之師御差向可被成候ニ付、兼て被仰付置候通、討手之諸侯来ル五日迄ニ出兵可致旨被仰達、既ニ切迫之形勢ニ立至り、然処長国人民等御達之趣、初發より不服にて、仮令五日限ニ出浮候ても、御請難被致趣意、条理を以致言上ニても可有之、然時は幕吏最早謀術失ひ、無為方問罪として入国、兵威を以降伏可為致との決議相成候由にて、関東歩兵並井伊・榊原家等之軍兵、藝・防国境迄追々人数繰出、諸家江も出兵御達相成候ニ就ては、此度は既事破立候勢ひニ同れ、尤討手被仰付候諸藩中、段々藝国江滞留者有之、

留守居名代にて、三監察より御達相成申候処、

此御方様江も、別紙之通拙者江被仰渡候、然共御出兵
難被為成御旨、於浪華御建白相成候由御座候処、此節
拙者江台命之趣致齟齬候廉も有之、將伐長之期限は、
精々致探索、其機会不取失候様、未然ニ早々京師江御
届申上、可然旨福島新二郎致承知罷下、先日致上帆、
其節同人江及示談候処、其後追々彼表より致承達候趣
も有之、然折柄前段之通旦夕ニ差迫候形勢ニ罷成、幕
長情実而已ならず、前文御国様江御達振、彼是書面ニ
て、意味碎兼申候次第等御座候付、不得止浪華表迄致
上帆候賦にて、今日出帆致申候間、可然御聞取可被給
候、尤当時藝国表外ニ相変申程之儀無之、勿論五日期
限之模様、滞藝之幕役、其外九州諸藩等より、自然小
倉表江布告可致事件ニ付、彼表出張別府壮右衛門より
則御届申上にて可有御座、素より拙者儀も可成差急、
来ル五日前後ニは亦々婦藝之心組ニ御座候間、其内旁
可然御合被給度御座候、為御心得此旨御問合申進候、
以上、

但幕長人書附並

御国様江被仰渡候御書付写別冊相添差進申候、以

上、

藝州出張

御軍賦役

五月廿四日

筑前宰府

御出張

御軍賦役

一四一〔別冊之一〕

右同断

写

一 戦地ニ至り、軍目附并附属役々共、自分賄等不都合之
儀も有之候ニ付、其手ニおゐて兵糧焚出之内、梅干・
味噌・香之物等、何品ニても一品相添、秣共配当致シ
賄置候様可致候、尤人員ニ応シ其都度印鑑請取渡方取
計、右代料之儀は、御代官より追て印鑑引替、請取候
積り可相心得候、

五月

一四二〔別冊之二〕

一四二ノ一

一昨廿日相達候通、御討入相成候節、兼て被定置候一
二之順叙、混雜不致様急度相心得可申旨、一之先・二
之見之面々江可被達置候事、

五月

一四二ノ二

一其軍目付江之一封届方可被取計候、尤出張以前二候
ハ、預り置可申候、以上、

五月廿二日

松平修理大夫殿

家来中

〔番号一四〇ノ一四二黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

牧野若狹守〔成行目付〕

一四三 海軍方設置布達

五月廿四日

島津元丸屋敷跡へ、海軍方被 召立候旨、被 仰出候
条、此旨向々へ致通達候、

一四四 岩山壮八郎ヨリ柴山良助へ送ル書翰

〔当時ノ形況一端〕

〔朱〕〔確太郎〕
尚々石川氏へモ御伝言則相達申候、

三月廿九日・四月廿九日ノ貴翰追々相達、忝致拝見候、
薄暑ノ御罷成候得共、先以御清康被為成御奉職奉恐悦
候、於当地貴家御無異、次ニ野生無異事相動候間、御
休意可被下候、爰元何モ無事仕合ノ至御座候、

〔前巻〕
一卷退藏儀叔父方養子罷成云々ノ事ニテ、再罷出候儀、
〔朱〕〔英字通教師〕
御断ノ旨申出候段、委細被仰越無相違相達、早速教授

方始掛御役々ハ勿論、小松家へモ成行直ニ申上置候間、
左様御納得可被下候、表向情合ノ義申立ノ趣、無余義
筋ニハ相見得候得トモ、兼テノ議論ニモ不似合、言語
同断ノ至御座候、最早無是非仕合御座候間、此上ハ尚
以致勉強、不遠十分相開キ、追テ後悔イタサセ候外無
御座候、兼テ貴兄御議論通ニハ恐入候事ニ御座候、
一大野甫立へ相託置候英和对訳字書ノ義、近々出版ノ由
申参候間、最早疾ニ御買入相成候半奉存候、当地ノ義
モ追々必用ニ付、又候今便百五十部申出相成、都合三

百部御買下相成候様、当地御勝手方ヨリ其御地へ御掛合相成候間、何卒可然様御取計被下度、尤モ大野方へ可然被仰付可被下候、尤モ今便聞丸直様致帰帆候間、是非帰帆便ヨリ御差下相成候様、御取計被下度、尚亦貴兄ヨリモ新納氏等へ御願込可被下候、尤モ甫立方へモ別段委細申越置候、於当地原書モ追々西洋へ御調文相成、銘々三百部計ツ、御手当故、英和对訳ノ儀モ、前文ノ通ノ事ニ御座候、

一 此節ハ大夫方御始、大御ハマリニテ、海陸軍局相取立相成、折角御手相付候間、無此上幸事ニ御座候、御歎可被下候、委細ノ義ハ、井上新右衛門殿ヨリ御直話御聞取可被下候、

(采)〔英字通教師〕

一 田中洪蔵義モ、京都ヨリ脇田市郎殿同道相成、去ル十

八日ニ無異着ニテ何レモ大歎、折角御手相付候央ノ事故、殊更大歎ノ事候、御察可被下候、就テハ種々御面動成上奉拝謝候、追々居合ノ儀ハ申上越候様可仕候、一 於当地モ近々英艦二艘来客ノ筈ニテ、賑々敷事ニ御座候、尤モ種々御丁寧御所置有之、此方奥向ミニ一へル調練拝見、跡ニテ彼ノ調練御望ノ筈御座候由、彼是爰元ノ成行井上新右衛門子ヨリ御聞取可被下候、

一 兼テ御約束申上置候米人ブラランノ対訳書一冊、御取

入相成、此節岩下大夫方御頼、御差下被成候

由相達、誠ニ御懇志不淺難有御座候、三拝九拝御厚礼

申上候、未相届不申候間、定テ京都へ滞在候半、一日

モ早ク手ニ取度山々相考居申候、何レ不遠着次第、又

々細事御礼奉申上候様可仕候、当分ハ筆術書并リンニ

一 典義方ニテ、字書ニ込入罷居候折柄実ニ大歎仕候、

一 爰元諸生中絶テ願望ニ付、先達テ二等ノ面々都合九人

出崎被仰付、其内へ田中喜州モ同道出立相成申候、小

生ニハ些存慮ノ儀有之、嵯峨根氏議論ニ從ヒ候テ、来

秋迄ノ内可相成ハ、横濱ノ様差越度、只今ヨリ相考居

申候、夫ト申モ只今ノ内諸方へ奔走イタシ候テモ、遊

半分無益ノ事ニテ、先願クハ一通数学ハ勿論、砲術書

ニテモ為相濟候上、是非西洋軍艦士官ノ者へ相付候方

可然相考申候、只今文法學ニ長崎位へ出、日本人へ相

付、半分ハ遊方ニ相成候様ニテハ、無益ノ事ニ御座候、

何レ追々成行申上候様可仕候、

一 嵯峨根儀、存ノ外學力有之、卷ヨリ精微ニ有之、殊ニ

人柄宜敷、議論モ立居、小松家始皆々余程思召ニ相叶、

当分甚御用立、折角海軍法則翻譯中ニテ、見付出シ者

ニ御座候、弥永々御抱相成筈御内定相成、此節聞丸
歸り便ニ、家内モ被召下筈御座候間、何カ宜様奉願候、
委細ノ義ハ井上新右衛門承知相成申候、申上越度義
モ山々御座候得共、外諸所へ數通手紙相認、少々取込
候付、甚以前後乱文筆ナカラ、鳥渡拜答旁当地成行モ
申上度如斯御座候、宜御推覽可被成下、尚追々細事申
上候様可仕候、追々甚暑可罷成候間、折角御自愛專要
ニ奉存上候、恐々敬白、

五月廿四日

岩山壯八郎

柴山良助大兄

參人々御中

一四五 毛利左京外三名ノ書面

今般家来 御裁許ノ趣、私共ヨリ大膳父子〔元明、慶親孫〕・興丸〔備〕へ可
申達トノ御旨、当国内鎮撫筋尽力仕候様、御地迄差出
シ候名代ノ家老御達被為在候処、全体宗家家老穴戸備〔備〕
後助為其一途差出候得ハ、此者ヘコソ可被仰付之処、
其儀無御座、剩滞在被仰付、驚惑之至ニ奉存候、殊ニ
国内切迫ノ情状ハ、兼テ申上置候通ニ付、右之次第柄

伝承仕、名代家老共ノ帰途ヲ遮リ候故、暫高森駅滞在
仕、僅ニ一先歸邑仕候仕合ニ御座候、就テハ末家中申
入度候得共、彼是隙取期限余日無御座候ニ付、不取敢
監物ヨリ、二十九日迄期限御猶予相願置、鎮撫方ノ儀
ハ、精々談合取掛居候内、願書之趣御容許被遂、難有
仕合ニ奉存候、別テ申合尽力仕候得共、從來士民ニ
オヒテハ、大膳父子奉対 天朝、尽臣分度無他ノ心事
ニ奮勵感激仕居、今般不容易御達書ノ趣有之由、追々
伝聞仕、如何ノ御次第哉ト疑惑、憂憤不一形迫切ノ情
別紙ノ通敷願申出、猶宗家家老共ヨリモ末家中へ願出
候筋、実無余儀情実ニ有之、加之宗家名代穴戸備後助
義御預ニ相成候由、実ニ無余義情実ニ一層ノ怨憤ヲ増、
殊更説諭鎮撫其方便モ絶へ、不得止之次第、於私共モ
難黙止、是非徹上仕候テハ不相叶奉存候、然ニ前段
情態之居ヲ、只管台命服膺而已ニ心付、御威權ヲ仮リ
ニ押付候節ハ、忽国内沸乱ニ立至ルハ必定ニ有之、私
共支封ノ分トシテ、内ハ宗家ヲ始メ沸乱ノ勢ヲ啓キ、
外ハ天下騒擾ノ端ヲ成候テハ、祖先ノ微功不被為棄、
厚キ御趣意ニモ相戻リ、何共不相濟儀ニテ、即国内鎮
撫筋力仕候様トノ御趣意ニ相背キ、弥以奉恐入候義ニ

奉存候、窮厄ノ心事御酌取被仰付、何卒広大ノ御度量
ヲ以テ、上下感服仕候様、御寛大ノ御沙汰被仰出被下
候様奉歎願候、右ノ次第ニ付テハ、私共へ御筋之儀モ、
于今兎角之御請申上候様難仕奉恐入候、此段幕府向宜
様御取成被成下度奉懇禱候、已上、

五月二十五日

毛利左京(元忠)

毛利淡路(元善)

毛利讚岐(元純)

吉川監物(元經)

一四六 西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔第三卷番号六四〇と同文により削除〕

一四七 寺院廃合命令

市來正右衛門 外ニ数名(一四七ノ一)〔広實〕

右ハ、此節寺院合院・廢寺取調方被仰付候ニ付、掛被
仰付候条、別勤ニテ早々取調申出候様、被仰付候旨可
申渡候、

五月廿七日

右衛門

右通御用人川上正十郎取次ヲ以テ、外掛一同被仰付
候、御家老桂右衛門、寺社奉行島津主殿、御勘定奉
行關山糺、御文書奉行橋口與市郎、同添役千田傳一
郎・小森新之丞、同見習上村休之進、郡奉行山口一
次・山口九十郎、寺社方掛市來正右衛門・大脇彌五
右衛門・谷村龍助、御勘定方小頭相良八兵衛・永山
直次郎、其外造士館教授勳後醍院彦次郎、及ヒ書役
等拾余人掛ニテ、島津兵庫宅仮取調所建設、五月廿
七日ヨリ各出勤取調ニ着手候事、手先ニ真言宗大乘
院末寺坊中、其外廢寺之取調方ニテ候事、

一四七ノ一
廢寺ノ顛末

廢寺合院ヲ令セラレタルハ、慶應二年丙寅五月十五日
各拜命ス、而シテ島津兵庫宅へ取調局ヲ仮設セラレタ
リ、拜命ノ人員左ノ如シ、

大目附寺社奉行勤	島津主殿
大目附御勘定奉行	關山糺
御記録奉行	橋口與市郎
同 見習	千田傳一郎
同	小森新之丞

同	上村 環次
郡奉行	山口 一次
同	山口 九十郎
寺社方取次勤	市來 正右衛門
同	谷村 龍助
同	大脇 彌五右衛門
御勘定方小頭	相良 八兵衛
同	永山 直次郎
助教	後醍院 彦次郎
寺社方書役	松田 健四郎
同	横山 直左衛門
同	久永 直助
御勘定所書役、外ニ一人ツ、繰廻シニテ勤ム、	
名前不定、郡方書役	相良 清兵衛
慶應二年丙寅五月十五日右各掛拜命ス、御家老桂右衛門ヨリ達ス、	
桂モ掛ヲ命セラレタリ、同日島津・關山・橋口・千田・大脇・谷村・市來・上村・小森・相良桂宅へ集会、取調所設立其他評議ス、同月十九日ヨリ、島津兵庫宅へ取調所ヲ設ク、	

是ヨリ先キ同月十一日(真注)後醍院ヲ首トシテ、千田・谷村・市來・大脇・相良等時態ヲ以テ論スル旨アリテ、桂へ其議ヲ述フ、桂同意シテ細議シテ、十二日重テ右人数集会シ、手順迄モ審議ス、而シテ御兩殿様へ桂ヨリ言上、即日御許託ニナリテ、十五日ニ発表セラレタリ、先ツ合寺廢院ヲ手初トシ、大乘院支坊十ヶ寺及ニ三門、或ハ神社別当寺御城下中ヲ廢シ、仏具梵鐘ノ類ハ大砲製造用ニ供ヘラレ、寺高ハ御軍役方ニ充ラレ、寺地ハ士族屋敷ニ輕価ヲ以テ払下等ニ充ラレタリ、僧侶ハ本寺ニ引取り、或ハ望ノ者ハ帰俗命セラレ、學識アル者ハ學館ノ師員ヲ命セラレ、給禄アリタリ、御城下中ノ各宗本末合テ三十余寺ヲ初メニ廢シタリ、各寺ノ支坊ハ悉皆廢シ、本寺ノ如キ千眼寺等モ廢シ、住持ハ帰俗、給禄又ハ邸宅ヲ賜リ、學館教員ヲ命セラレタリ、諸郷ノ神社、神仏混淆改メノ為メ、同年九月初旬ヨリ巡回ス、後醍院・橋口・小森・市來、書役松田・横山ノ二名ナリ、重富郷ヨリ東目ノ各郷・國分八幡・霧島神社ノ各所ナリ、十一月末歸府、夫ヨリ別手ノ人員ニテ、御領内各郷大小ノ神社悉ク検査ス、廢寺ノ形況

代々御小姓組、千眼寺・壽國寺兼帯先住隱居月巢、
 右ハ全体御小姓組海老原七兵衛嫡子ニテ候処、親依科
 士族召放、不得止事出家相逐、住職迄モ被仰付置候得
 共、当世態空敷禪家ニ朽果候儀、遺憾之至ニ付、還俗
 成御免被仰付、再ヒ武門ニ立歸リ、奉報 御國恩度内
 意申出趣有之、右通家被召禿候者、元身分ニ被復候儀
 ハ、不容易事候得共、是迄品能着座、門主迄モ昇進被
 仰付置候、旁別段之御取訳ヲ以テ、此節家被召建、右
 之通被仰付、海老原名字相名乗候様被仰付候条、難有
 奉承知、還俗相逐、往々屹ト御奉公方相勤候様被仰付
 候、右御格通可申渡候、

慶應三年丁卯四月二日

右衛門「桂」
(六)

取次西 筑右衛門

一四七ノ三
 千眼寺ハ鹿兒島西田村ニアリ、黄檗禪寺ニテ、寺祿五
 百石ノ大地ナリ、安永ノ頃大信公ノ創建セラレ、尋テ
(朱二重豪公)
 金剛定公(天保)ノ末更ニ土木ヲ興シ、美大ノ禪閣ナリキ、
 茲ニ慶應二年ノ秋ヨリ領分國中寺院廃合ヲ令セラレ、
 手初メニ、真言宗勸願寺経維山大乘院ノ末寺十余ヶ寺
(因カ)
 ヲ廢シ、連々三州中ノ大小寺ヲ廢セラレタリ、其際千眼

寺ハ真先ニ廢セラル賦ナルヲ、関係ノ役人ヨリ内諭シ
 テ、帰俗ヲ願セタル者ナリ、大地ノ廢寺ハ是ヲ叔トス、
 因テ海老原ニハ祿六石ヲ与へ、而シテ造士館訓導ニ登
 用セラレ、祿四石ヲ与へ、邸宅地ヲ武村ニ賜フ、是ヨリ
 シテ各寺競テ帰俗ヲ出願シ、遂ニ明治二三年ニ至テ、
 藩内一掃シテ、一字ノ寺院ナク、一名ノ僧侶ナキニ至
 レリ、実ニ古今未曾有ノ快挙ナリ、此挙ヲ発表セラル
 ヤ、慶應二年夏七月ニシテ、関係ノ国老桂右衛門、
 寺社奉行島津主殿(永吉)、勘定奉行關山胤、記録奉行橋
 口與市、同見習千田傳一郎・小森新之丞・上村休之進、
 郡奉行山口一次、寺社方取次市來正右衛門・大脇矢五
 右衛門・谷村龍助、勘定方取次相良助大夫、学館掛後
 醍院彦次郎等ノ数名奉命ス、各筆者数名ニテ、城下島
 津兵庫宅ヲ仮役所トシ、廃合ノ調査并神仏混漭分離ノ
 論定、各郷巡回シテ精査セリ、此盛挙ノ本旨ハ、世態
 日ニ危殆ニ赴キタルカ故ニ、寺院ノ田祿ヲ以テ軍備ニ
 充、或ハ邸地ハ士族ノ無屋敷ノ輩ニ与へ、或ハ仏法ノ
 国害タルヲ驅除セン等ノ論ニシテ、初メ島津主殿及大
 脇・谷村・市來ト桂ヘ大ニ論スル処アリテ、直ニ採用
 セラレ、関係ヲ命セラレタリ、之ヲ嚆矢トス、

田禄ヲ得ルコト凡ソ六万七千余石、山林・耕地ヲ得ルコト凡ソ八千余丁、僧侶ノ帰俗スルモノ凡ソ三千余名、梵鐘仏具ノ銅器夥多ナルヲ、砲器製造ノ料、或ハ天保錢ノ鑄料ニ充ラレタリ、

此盛挙天下ニ轟キ、佞節ノ徒戰慄シタリ、当時仏法隆盛、貴賤奉信スル病ノ如クナルニ、断然タル実ニ英萃ト謂ハサルヲ得サルナリ、先年水戸ノ藩ニ於テ廢寺ト云フモノ掃ニアラス、廢合ノ一小事ニ止リシト云、予カ細録アリシカ、十年ノ兵燹ニ罹レリ、因テ其概略ヲ記シテ史料ニ供ス〔朱〕〔市来広貫記ス〕

一四八 寺院廢合布達

国老桂右衛門ヨリ達

非常之世態無拠時世相当之御取捨ヲ以、官府役属或合併、或ハ廢興被仰付候ニ付、諸寺院之儀モ、古来由緒無之寺院ハ、右院廢寺被仰付候間、夫々由緒有之寺院ハ、得確証取調被仰付候旨、被仰出候条、此旨可承旨向々へ可申渡候、

五月〔朱〕「廿七日」

右衛門

右通被相達、夫々取調掛被仰付候、

一四九 幡嶋三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔對州内訶〕

謹啓、三月廿九日・四月十五日、兩度自筑地之御細書難有拜誦、先以益御清適被成御起居、欣喜此事ニ御座候、其後闕然御答書も不仕、甚以失敬之至ニ候得共、何分好便も無之、且過日星山君御帰船之節も、生憎小生浅海浦行中ニて行違ニ付、不得止之事情多罪御海涵奉祈候、扱又宰府奉別後、直ニ弊藩江御出被成下、不一方御配慮被仰付、御蔭を以、弥解囚之御返答ニ及候趣、委細御書中被仰越、積年深根之患を一朝御解被下、小生等日夜之苦心も水釈致、雀躍之至不堪罷在候処、其後又姦徒より陰計を廻らし、解囚難叶様手を施し、御約諾を背候趣承、重て驚愕仕候、何分対 尊藩失信義、言語道断不相濟之次第、於小生等無面目義ニ御座候、就て此上御願申上候も、甚強顔之至候得共、右等之義全姦物之謀計、正義をおとし入、寡君之明を蔽候より、無拠信義を失、御違約申候次第ニ立至候義ニ付、

何卒此上御見捨不被下、御大藩之御威徳を以、恢復之処ニ相成候様、幾往も奉懇願度、尤弊藩幽生之死生ハ、一国之存亡ニ関係致居、幽囚生一死候得は、弊藩再興候事ハ迫も出来不申、然処御承知之通、勢ニ随ひ變し易き之藩風にて、既ニ昨年伐長之命下り候節も、弊藩俗論益沸騰、幽囚之士殆被誅戮候勢ニ相成候事も有之、方今天下之形勢朝夕變転弥切迫ニ及、又伐長之論起り、大樹公自ら大兵を卒ひ、上洛有之候趣ニ候得は、弊藩も又姦人得力居候ハ必然之事ニ付、此後時勢ニ従ひ、何時暴挙致候も難計、左候ハ、弊藩ハ夫迄之事ニ御座候、臣子之情寔ニ難堪次第、其刃深く御亮察被成下、姦徒に不先内ニ解囚之処ニ立到候様、御配慮御拮据被仰付被下度、泣血奉伏願候、幾重ニも御垂察被成下候様奉祈候、扱又当藩之義、小生等四月朔着船、夫より追々応接致候処、何分種々之虚説を申張、一向屈撓之色無之、然し是非共姦物を退度苦心罷在候内、五月朔夜藩士三十人許奮発致、勝井股肱之人阿比留喜助・大庭左次右衛門・原田次兵衛三人を暗殺し、直様君前江訴、其より勝井五八郎を被召、割腹被申付候筈之処、勝井ハ兼て殿中江詰切居候事ニ付、其様子を悟

り、抜刀して君前ニ迫候ニ付、近習之士拔連、勝井ニ掛候処、勝井ハ不闘して逃去行先不分、翌夕自宅稲荷堂へ潜匿致居候事相分、多人數にて取囲討取、其殘党も二十人許繼て被刑、先恢復之姿ニ相成候ニ付、五月六日平田大江等一行壹州より帰船せしめ候処、右斬姦之諸士も勝井之党にて、畢竟禍を畏れ反覆致候者多く有之、就て其後姦徒又々得勢、勝井程之暴逆は無之候得共、只今にてハ前狼後虎之患ニ相成、使節等より申入候事も一切不行、且正義之士ハ大ニ被悪、剩此節帰国之士ハ、仇讐之如く忌憚シ、日夜全人等を除くを計候様子にて、既ニ当月十三日夕、君侯調練御覽と申立、士卒を集候ニ付、平田大江・多田莊藏等是を悟り、帰国之士大江宅ニ集居候処、果して多人數にて、多田莊藏・佐野金十郎・小宮延太郎・吉野牧兵衛四士之宅江押掛、切腹も被申付候勢之処、(采女ニ五郎左衛門)、(弥五右衛門)、一方御尽力被成、小生等も隨て周旋致候ニ付、漸右四士詰問ニ相成候処、何之罪状も無之事ニ付、全姦徒之計策ニ御座候得共、先無事ニ此節は事済申候、然処右之次第にて、今日之勢、中々当藩恢復之目途無之、且尊藩御使節等ニ対し、只今にてハ平田大江以下之処も、

先無事ニ有之候得共、諸使節引取之後は、同人等禍ニ罹候事必然之勢之様被察候、当藩も勝井之暴逆にて、正義之士を誅鋤し残居候ハ、此節帰国之士と其他僅ニ兩三人而已ニ相成居、実ニ可憐之事情ニ御座候、染川・大脇御両君ニも、其刃深御苦慮被成居候、然処小生等も折角奉使命罷越候て、此俟引取候も甚不本意之至ニ候得共、何分右申上候通之事情にて、実ニ尽力之術も尽果致方無之、先近日中引取候覚悟ニ御座候、尤同人等救助之道も有之候ハ、又当藩恢復之時も出来可申、其刃何卒御賢慮を被為廻被下度、是又奉懇願候、

先生当藩御越之義も、甚残念之義奉存居候処、御同藩様御渡海ニ相成、不相交御下交被成下、深く御懇切被仰聞、不一方御厄介ニ罷成、御蔭を以万事御教諭を受、寔に難有奉万謝候、右御礼且奉懇願度、草略如此ニ御座候、委細ハ大脇君より御承知可被下、いつれ不遠拜晤万縷拜謝可仕候、再拜謹白、

從對州府中

幡島三郎

(慶應元年カ)

閏五月廿八日

黒田嘉右衛門様

二白、

時下陰霖之候、乍憚千万御自玉奉祈候、猶弊藩之義は、前文之次第、幾重ニも御垂憐御配慮被成下候様奉万祈候、頓首、

一五〇 清国福建兵備ノ書牘 (琉球ヨリ届出)

提督銜福建臺澎等処地方掛印総鎮斐陵、

大清欽加阿巴圖魯劉二品頂戴、按察使司銜福建分

巡臺澎等処地方兵備道兼提督学政吳

為ニ

照会事、本年四月二十四日、抛_ル鳳山_ル鳳山_ル鳳山_ル令、会_{スル}同_{スル}前_{スル}鳳

山_ル鳳山_ル令、南路營凌參_ニ將_ニ会_{スル}稟_{スル}称、窃_ニ卑_ニ職_ニ本_ニ傑_ニ蒙_ニ本_ニ道_ニ憲_ニ札_ニ開_ニ案_ニ准_ニ大_ニ英_ニ國_ニ領_ニ事_ニ賈_ニ函_ニ称_ス、

大_ニ合_ニ衆_ニ國_ニ駐_ニ厦_ニ正_ニ領_ニ事_ニ李_ニ昭_ニ会_ニ、有_ニ鉄_ニ板_ニ船_ニ遭_ニ風_ニ冲_ニ礁_ニ擊_ニ碎_ニ飄_ニ至_ニ龜_ニ仔_ニ角_ニ鼻_ニ山_ニ登_ニ岸_ニ被_ニ該_ニ処_ニ生_ニ蕃_ニ戕_ニ害_ニ、

イ_ニマ_ニム_ニチ_ニシ_ニテ_リ兵_ニ勇_ニ前_ニ往_ニ、嚴_ニ就_ニ該_ニ処_ニ生_ニ蕃_ニ通_ニ事_ニ設_ニ法_ニ、

飭_ニ即_ニ帶_ニ領_ニ兵_ニ勇_ニ前_ニ往_ニ、嚴_ニ就_ニ該_ニ処_ニ生_ニ蕃_ニ通_ニ事_ニ設_ニ法_ニ、

查_ニ擊_ニ兇_ニ犯_ニ悉_ニ獲_ニ解_ニ弁_ニ等_ニ因_ニ卑_ニ職_ニ本_ニ傑_ニ遵_ニ即_ニ会_ニ同_ニ凌_ニ、

參_ニ將_ニ督_ニ帶_ニ兵_ニ勇_ニ飛_ニ詣_ニ旗_ニ後_ニ蒙_ニ丙_ニ將_ニ照_ニ知_ニ、

買_ニ領_ニ事_ニ縁_ニ由_ニ稟_ニ乙_ニ覆_ニ本_ニ泉_ニ道_ニ憲_ニ甲_ニ在_ニ案_ニ、嗣_ニ經_ニ卑_ニ職_ニ等_ニ籌_ニ商_ニ、

庶_ニ稅_ニ司_ニ縁_ニ由_ニ稟_ニ乙_ニ覆_ニ本_ニ泉_ニ道_ニ憲_ニ甲_ニ在_ニ案_ニ、嗣_ニ經_ニ卑_ニ職_ニ等_ニ籌_ニ商_ニ、

先、飭前屯把總潘春輝、帶領卑職本傑、所募屯勇、暨卑職定邦、檄飭水底藤汛弁沈如生、會同該前屯弁、先為嚮導、到地查堪、以便相機進弁、並飭傳水底藤義首王龍虎、細詢形勢、繪具圖說、又經稟呈憲鑒、在案、茲、拋該弁潘春輝、回復面稱、馳赴琅瑤、詢之蕃民、均云、龜仔角地方、去琅瑤、尚有數十里、其地、生蕃、並無通事、水路礁石林立、船筏罕到、陸路則生蕃潛出暗殺、人、其巢穴、徑途、無從偵探、等語、卑職之邦本傑、伏查琅瑤地方、雖屬卑轄、而其地人民稀少、樹木叢雜、每歲、只有通事、帶同匠首、採弁軍料、余、則少有至者、由琅瑤、至龜仔角、尚有數十里之遙、鳥道半腸、菁深林密、尤為險僻之區、該地生蕃穴居、巖處出沒、無從搜捕、卑職定邦、樹奎本傑等、直和約、條款、第十一、十三等款、係指、在岸上海面、被華民、欺侮、騷擾、毀壞物件、毆傷損害、在中國所轄、內洋、被盜、槍劫、地方、文武員弁、一經聞報、即當、嚴拏治罪、今該商被害之、係生蕃界內、并非中國所轄、內洋、其行劫之兇犯、又係生蕃、并非華民、一校、與和約所載、絕不相符、然、可盡力搜捕、亦斷無不設法、相幫、以副我

朝中外和好、至意、無如該處、既未收入、版圖、且為兵力之所、不及、委難設法、弁理、惟有拋、定稟、請察核、俯賜批示、祇遵、定為公便、等情、情、情、以上、與令到、道、拋、此、查、此案、前、據、鳳山、吳、吳、令、等、稟、已經、本司、道、照、覆、查、照、在、案、茲、復、據、會、稟、前、情、本司、道、查、核、均屬、定、在、情形、此、外、生蕃、形、同、禽、獸、似、可、置、不、與、較、以、彰、

貴國寬大之意、合就拋情、照會、為此、照會、貴領事、煩、即、查、照、施行、須、至、照、會、者、
(慶応三年)
同治陸年伍月 初貳日

一五一 筑前へノ返答達

(五卿筑前御渡海ニ就テ)

五卿方御渡海ニ相成候儀ハ、美濃守様為天下厚御合力被為在、薩州之義御周旋有之儀ニテ、御進退ノ事ニ付テハ、御渡海以前美濃守様御約定モ候ヘハ、今更別段不被申入候、且薩州周旋ノ役々西郷吉之助・吉井幸輔等、委細事実相弁居候ニ付、御聞合被下度候事、

一五二 〔毛利家処分ニ就テ土州書付〕

土州様御書付左ノ通

左ノ面々長防為名代、当五月朔日廣島於國泰寺、公辺御役人向五時揃、長防人四時揃、御裁許御申渡候趣、無別条被奉畏候儀御座候、大膳父子永蟄居、拾万石被召上、長門惣領奥丸へ式拾六万石余被下置候トノ事御座候、

萩名代 穴戸備後介
前 着赤川又太郎

小田原藤太郎

徳山 福原式部

今田 靱負

本ノマ、(府中丸)
席中 毛利伊織

清末 二日野郷左衛門

一五三 道嶋家記抄穴戸等召捕へタル始末

一五三ノ一

長藩人

穴戸備後ノ介

右寅五月十九日被召捕候由、子六月朔日夜四ツ時分西澤右衛門所ニ飛脚体ノモノ相見得候間、有馬彦十郎殿返リ掛何事カト相尋候処、去ル廿六日出兵ニテ、筑前ヨリ飛脚ニテ差越、黒田嘉右衛門所へ差越候由、子細ハト相尋候処、土持平八ト申入、去ル廿五日藝州表ヨリ筑前へ差越、去ル十六日廣島へ、長州ノ穴戸備後ノ介被差出、段々応接モ有之候付、十九日又々御用召被為候処、病氣ノ段申出、則ミニヘル組四百余人ニテ、穴戸カ旅宿ヲ取囲、直ニ召取候由、穴戸カ從卒老人モ手向不得、主人被召捕テ手ヲ束ネテ、縛ヲ受ルモ如何ナラント返答イタシ候事、

一五三ノ一

水軍方被召建ニ付、都之城御用地ニ相成重富(本)ノ浜ヤシ

キ鶴江崎ノ地ヲ、都之城へ返地ニ給ヒ、五月末方俄ニ都ノ城ノ地ニ被仰付候由ニテ、子六月五日方ヨリ追々直ニ水兵被仰付、日勤イタシ候由、四石ノ御賄料故、当分ハ無抛二男・三男被仰付候得共、諸座書役助ハ追々水兵方へ被振向トノ評判ニテ候、

但其比ノ説ニ、平佐北郷ヲ都之城へ返地方差上、平

佐ハ荒田ニヤシキ有之、夫へ被引移候由ノ説ニ、

庭木杯ハ人々ニ被呉候処、都ノ城ヨリ平佐ヤシキ
ニト返弁不宜トノ御断ニテ、北郷ノ方ハ見合ニ相
成、見込違ハレ、今時ハ猫ノ目替ニ油断ナラント、
大言被申候儀モ相聞得候、左候テ小松カ都之城ニ
移リ込、小松ヤシキハ陸軍方ノ名目ニテ、岩下氏
移込トノ評判有之候、夫付ニテ不相分候事、寅六
月九日記ス、

一五三ノ三

寅六月七日四ツ過時分、二ノ丸横目座ニテ、縁ノ脇三
四寸計ノナバ菌五ツ生シ、前晚ヨリ生シ候ヤ、人々全
ク氣不相付、皆々出揃ノ時分初テ氣相付、是ハ不思議
ナト驚キ居候処、夫ヲ見ルカ内々漸クト大キクナリ、
忽チ壱尺廻リニナリ、夫ヨリ直ニシホ〜トシナビレ
候由、皆々身ノ毛モヨタツ計ニテ、驚サルモノハナク
候由、六月十八日園田彦兵衛ヨリ咄ニ候〔怪談ノ一〕

一五三ノ四

又七日ノ夜分雷鳴、翌晚二ノ丸御寢間ノ上ニ夜大粧ナ
ル音イタシ候得共、下ハ何事モナク、翌日屋上へ上リ
見候処、瓦段々壁ケ居候由、天狗ドウシ共申程ノ事ニ
テ候、其時分事ニテ候ヤ、番兵ノ者共氣付候、二ノ丸

〔朱〕〔城出〕
上へ何状物音殊ノ外相聞候由、何分ケシカラン珍事ニ
テ候〔朱〕〔怪談ノ二〕

一五四 薩藩掘某(直太郎)五月中旬上京筑前太宰

府五卿警衛五藩之模様伝聞書

五卿大坂江御軛座之儀ニ付、小林甚六郎出筑ニテ拝謁
仕、御説得申出候手筈之処、警衛五藩江拝謁差止メ候
ニ付、無抛五藩江右之趣被申演候処、国元主人江申入
候上、返答可致トノ事ニ付、其後改テ五卿攝坂御軛座、
且護送等之儀御達ニ相成候ニ付、五藩各評議有之内、
薩州ハ上坂不宜説也、猶外藩之模様探索仕候処、久留
米藩ハ御上坂宜ト申説ニテ、筑前ニハ元ヨリ同断之説、
何分大坂御軛座幕命之事ニ候得ハ、御請可有之、五藩
ニテ守衛可仕候得ハ、此地御在住モ御同様警衛嚴重ニ
候得ハ、幕ヨリ何ト欽仕候所モ難相成事、佐賀藩ニハ
多分ニ随フト申事、薩州ニハ御上坂何分ニモ不宜、併
五卿之思召如何哉ト伺候処、仰ニハ攘夷之事件ニ付、
種々心配イタシ候処、去亥八月俄之變動且禍ヲ遁レ候
為メ、同志之藩江脱走イタシ候事也、只今ニテハ攘夷

之御沙汰ハ御廢止ト相成、是迄為 皇国ニ尽力致候攘夷モ、我等一了簡之事ト罷成候儀、無致方候事也、上坂ノミカ仮令上京御立寄之儀共、寸功モ無之、何之面目有之候テ、上方江可罷越哉、決テ出坂可致訳モ無之候ニ付、是非上坂不致候テ不叶候ハ、決心致候ト仰被成候ニ付、薩藩カク迄之思召ニ候ハ、血ニ相成候トモ御守護可仕候、決テ御転座為致申間敷、御安心可被遊ト被申上候也、肥後之藩ニハ、小林甚六郎出筑之節、御上坂可然ト被申候処、只今ニテハ薩説ニ随心上坂不宜ト、専ラ唱ラレ申候、右等之儀ヲ申演之為、國元江ハ宰府出張之黒田嘉右衛門罷下リ、京邸ヘハ堀某上京、諸臣ト評議之上、同藩京詰遠武橋次同道ニテ当節薩下ニ相成候事、

五月

一五五 小松帯刀ヨリ桂右衛門ヘ報告

(四侯登營新將軍ト對話ノ概略)

五月十四日大蔵大輔様・伊豫守様・容堂様御一同御登營被仰上候、大意 御対面志通りノ御挨拶等相濟、大

(松平慶永)

(伊達宗徳)

(山内豊信)

樹公ヨリ国事御見込之次第御尋ニ付、御趣意御伺被成度旨被仰上候処、先將軍御死去以來徳川家御相統、將軍

宣下迄之事情、且兵庫開港等之御手續巨細ニ被仰聞、段々

朝廷江御申立相成候得共、御聞濟不相成、再云々之

御沙汰ニモ相成込入候間、堂上方開港之御納得ニ相成候様、御周旋有之候様被成度トノ御事ニ候由、越公御答ニ初テ夫程之御手續拝承仕候、左様之御次第ナラ、御尤ト奉存候旨被仰上候由、

御前モ同断被仰上、乍併兵庫開港等之義ニ就テモ、御手順可有之段被仰上候処、宇和島侯・土佐侯モ同断被仰上候由、大樹公御答ニ、其手順ハ如何ト御尋之由、

其時幕府之御信義下江貫通不仕、下人氣之所中々折合六ヶ敷、兎角御信義能貫通イタシ候様無之テハ不相濟段、御答ニ相成候処、夫ハ如何可致哉ト之御事之由御答ニ、御前ハ御聡明ニモ被為在候間、其辺之処ハ御明察モ可有之被仰上候由、左候テ兵庫開港之義モ、六ヶ月以前ニ日本御布告之処、暫ク御差留相成候様有之度旨被仰上候処、御答ニ何分外国人頗ニ相迫候間、甚

込入候トノ御事之由、成程夫ハ其通之御事ニモ可有之奉存候得共、夫々御所置ニ御手順モ可有之候間、無御余義御筋合ヲ以、時日遷延之処御談判相成候ハ、随分承知可仕ト被仰上候処、手順之処如何ト之御事ニ候由御答ニ、御手順トハ第一長防御所置之事ニ可有御座、如何之御趣意御尋之処、兎角寛大之所置ニ無之テハ不相濟ト之御答ニ有之候処、成程其通ニモ可有之、当分之処ニテハ、内外之差別モ有之、内之事御所置被召付候テ、其上外国之事ニモ、御手被召付候義ト、御一同被仰上候処、成程夫ニモ可有之、初ハ長防之所置急務ト存候処、其後外国人攝海江参リ、頻ニ申立候間、当分ニテハ外国之所置先ニト相考居候段、左候テ長防之所置如何相心得候哉之旨御尋之由御答ニ、初メ御征伐之節、三大夫之首級モ差出、謝罪之道相立候間、其后ハ無罪心得ニ可有之、此上ハ

朝廷ヨリ之御達ニ無之テハ、逆モ承知仕間敷被仰上候由、御答成程夫ニモ可有之ト之事ニ候由、容堂公被仰上ニハ、長防之御所置御取掛ニ就テハ、小笠原閣老早々御手不被召付候テハ、不相濟ト再三被仰上候処、成程ト之御事ニ有之候由、越公ヨリ過日モ、 撰政家江

御建言之次第被仰上候処、別段御答モ無之、只左様之事ニト有之候由、夫等之御事ニテ、格別之御決議ニモ不相成向故、再三天下ニ御信義之貫通イタシ候様被仰上、尚篤ト申談、決定之処再言上可仕ト之処ニテ御議論畢候由、

右御濟之上御酒御取肴杯被差出、閣老板倉候・淀候・若年寄等モ被召出、緩々御咄、御膳迄モ被差出、夕刻御退殿相成候事、

小松帯刀

桂 右衛門様

貴下要用

別紙

初テ

御登 宮之節之形行、先便ヨリ差上候事トハ相考申候得共、封箱之内ニ入付置候ヲ、此節見当、先便別段ニ認差上候モ事多故取寛不申、自然差上後レヨウモ不被計、為念差上申候間、先便差上置候ハ、御不用ニ被成下度候、

一五六 岩下佐次右衛門へ陸軍掛ヲ命ス

陸軍掛

造士館・演武館・銃薬方・甲冑方・台場掛等兼

岩下佐次右衛門殿

但御勝手方御用人座書役之儀ハ、御用人座書役・御

勝手方掛之名目ニテ、当分詰所へ相勤、御側御用人座書役之儀ハ、追テ何分可被仰付候、

五月

帯刀

一五九 諸郷兵上京予備

一五七 小松帯刀月番御免

小松帯刀

串木野

市來

合一組

右ハ一往京都居付被仰付置候処、御用向有之罷下居

候節ハ、表御勝手方并御軍役方月番御免被仰付、諸掛

等は迄之通相心得候様被仰付候、

物主

有馬勇之助

談合役

谷川八百助

五月

式部

旗預

兵糧方

玉薬方

小荷駄方

旗指

一五八 御側御用人役名ヲ廢ス

御側御用人

右御役名被相廢、御用人座へ合併被仰付候、左候テ御

勝手方掛之儀ハ、当分詰所ニテ御用致取扱候様被仰付

候条申渡、向々へ可致通達候、

右七月十八日出発

伊集院

郡山

慶應2年(1866)

合一組

物主

大野五左衛門

談合役

坂木藤次郎

旗預

兵糧方

玉藥方

小荷駄方

旗指

右七月二十二日出発

國分一組

物主

井上助右衛門

談合役

旗預

兵糧方

玉藥方

小荷駄方

旗指

右七月二十六日出発

伊作

阿多

田布施

合一組

物主

鈴木壮七

談合役

野津七左衛門

兵糧方

玉藥方

小荷駄方

旗指

右七月晦日出発

加世田一組

差引人

前田新次郎

村田平右衛門

野村仲左衛門

右八月四日出発

樋脇一組

蒲生一組

水引一組

隈之城一組

川邊一組

右追々出発

一六〇 五卿五藩へ分預達書

三條實美始御預ヶ分配之儀、左之通之管候、仍御心得
旁相達候事、

筑前

三條實美

肥後

三條西季知

久留米

東久世通禧

薩州

壬生基修

肥前

四條隆詞

右尾州侯ヨリ御達之御書付写、

一六一 肥後熊本へ御当リ之書付

今度三條實美初五人之者共、江戸表へ被召寄候間、銘々相預リ之者、家来共ニ嚴重為致警衛、早々差越候様

可被致候、尤松平美濃守・有馬中務大輔・松平修理大
夫・松平肥前守〔編島軍大〕へ毛同様相達候間可被得其意候事、
〔安濃〕 〔薩州〕 〔島津茂久〕

二月

五卿付添名覺

三條殿御内

森寺大和守

三條西殿御内

御納戸方

三宅左近

安井千代國
宮原主税

太田司馬

東久世殿御内

戸田〔三〕雅楽

伊藤忠雄

杉本〔三〕挺藏

渡邊左衛門

山岡榮之進

今井左司馬

壬生殿御内

長村縫殿

藤田主水

四條殿御内

小西直記

田村豊前

三浦主税

三條殿御守衛

清岡半四郎

島村左傳次

上杉鐵三郎

利岡玄兵衛

黒岩次部之助

楠本文吉郎

山本 忠亮

南部 興夫

淵上 謙三

一六二 神事掛ノ職員被設度建言(藩内)

神事掛

寺社方・御文書方等掛兼、

右ハ今般海軍掛・陸軍掛・御勝手方掛・外国掛・定式

掛ト御家老衆、御銘々御專任被為在候御儀、乍恐無類

之御盛挙、誠ニ以感服有余御事ニ奉存候、然処 皇国

第一題目ニ可仕神事之儀、更ニ御闕典ト申ニハ無之候

得共、定式之内ニ被混置候テハ、敬神之御趣意聊御手薄

形ニ相見得申候間、右通神事掛之名目ヲ諸掛之頭ニ被

相立、当分政府へ御出席有之候公子方之御内ヨリ、御

專任被為在候テハ、何様可有御座哉、左候得ハ、朝廷ニ

於テ、神祇官ヲ百官之頭ニ立置、古來王子・王孫ヲ以

其職ニ被任、以^ラ當官^{クハ}置^ニ諸官之上^ニ是^レ神国^ノ之風儀重^{スル}

天神地祇^ヲ故也ト、古書ニ被記置候意味ニモ相叶、第

一 国体名義之存スル処、華夷尊卑之弁別、凡俗愚民之

目的モ相立、次ニハ方今御手相付居候廢寺等之事件モ

公平被相行、旁以此上猶更、御政体被為行届候儀ニ可

有御座、乍恐奉存候事、

一六三 長州家老中ノ歎訴書

嘉永度外夷ノ御所置ヨリシテ、御国威日々陵夷シ、人心

不服ノ穢有之ニ付、御父子様深御苦慮被為在、幕府へ

叡慮御遵奉禦侮之御所置被在度段、御建白被成候得共、

公武之御間齟齬之趣有之、遂ニ戊午己未異常之變ヲ醸

シ、内憂外患 皇国未曾有之御大事ニ付、傍觀ニ不被

為忍、辛酉之年又々御建言何分ニモ、幕府ニオヒテ、

今一際

叡慮御遵奉御尽力相成、天下ノ疑惑ヲ解キ、上下御一

致禦侮ノ御策被為立度、猶又大樹公御上洛、

勅諭・台命ヲ以、御国是天下へ御布告有之度段ヲモ被仰上候処、御採用之上、

台諭ヲ以テ御上京、

叡慮御伺之処、下田条約於関東相濟候上、言上嘆思召、

勅許ニテハ無之、自関東拒絕堅固御約定、且至當時條約モ御破却、御拒絕被遊度思召候トノ御事、右ハ

皇妹御東下ノ節、五ヶ年乃至七八年ニハ、諸夷尽掃攘可奉安宸襟候トノ御誓書、閣老御連名ニテ被差出候御事、右等ノ御次第ヲ以、

叡慮・台命トモ攘夷御定之段、此時初テ御伺定ニ相成候儀ハ、連々御末家様方へ御通相成候通ニ有之、終ニ大樹公御上洛、君臣神明ト被為誓、

勅諭・台意ヲ以攘夷御布告ニ相成候段ハ、固ヨリ御承知被為在候御事ニ候、御父子様ニオヒテハ、御感激ニ不被為堪、聊藩屏ノ御任御身家ヲ以大難ニ被為当度、攘夷御魁被為成、辱モ御褒

詔賜之処、不計モ幕府ニオヒテハ、御齟齬之御取扱振被仰出、繞テ御差留ニ相成、從來御父子様御心志ヲ被為勞、開鎖ニ途ハ、皇国重大之事ニ付、前件御伺定之通

叡慮御遵奉、台意御承順被為成、曾テ一箇ノ御私見ヲ以テ、御去就不被為成候ハ、顯然之事ニ有之候処、一旦如是御次第ニ相成、下々ニオヒテハ一統疑惑憂憤之余、闕下近ク歎願仕度、不得止之心事ヨリ脱走ノ變ニ

立至、其砌外夷大挙致襲来候処、前段之次第ニ付、奉勅攘夷モ一變シテ、一己私闘之姿ト相成、無余儀一先止戦之御取計ニモ被為及、御慎被仰付候折柄、御官位御称号被召上、東西御屋敷被毀、猶モ只管積年御誠意御徹上被為成度、同列之者已下数人ヲ以、闕下不敬之罪ヲ被謝、尾州督府御陣払可相成候処、又候大樹公御進発ニ相成、大坂表へ同列之罷出候様御達有之、一先大・小監察御下藝、

天朝幕府ノ御耳目トシテ、御尋問之上、一々国情民心落意御承知相成候モ、今日ニ至リ意外之御達被仰出、此度御名衆へ御渡ニ相成候由承知仕、一統驚惑悲歎、人情洶々罷在、別紙之通申出候、別テ私共不肖重役之者トシテ、御父子様斯マテ御免枉被為蒙儀ヲ、不能奉雪候テハ、御先靈様へ申訳無之、下ハ衆人へ鎮撫制馭決テ不相叶、生ヲ天地ノ間ニ容ル、処無之、此上ハ一死ノ外無御座候、実々臣子切迫ノ情不能禁、枉テ奉

慶応2年(1866)

哀号候間、何卒大正至当ノ処ヲ以断然御所置、上ハ御
先靈様ヲ被為安、下ハ二州ノ生民ヲ御救被成候様泣血
奉懇願候、謹白、

丙寅五月

御家老中

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

慶應二年六月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
（紙数八八枚）の記載あり〕

目録

壹岐守ヨリ達書

石川清之助ヨリ黒田・川畑・大山へ長防開戦ノ報

篠原冬一郎・黒田了介ヨリ大久保一蔵へ書翰

金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔宛名差出名不明書翰〕

大山格之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

川畑伊右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

道島家記抄佐幕ノ俗論

伊集院直右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰大島郡乱妨ノ始末

三雲藤一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

一條十郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

中路権右衛門報告小倉領海へ異国船渡来ノ事由

五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰氷製造器等ノ事

島津久光ヨリ伊達宗城へ書翰

道島家記抄京師ノ形勢風説

英国ミニストルハルリハルクス及同国水師提督薩州侯訪

問記

〔千八百六十六年第八月十六日木曜日横濱新聞〕

三雲藤一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

道嶋家記抄

海軍規則

油川鍊三郎ヨリ遠武橋次へ書翰水口藩内証

英国軍艦三艘来麿

〔長州再討拒絶ノ届書〕

諸士祿高重出米課出諭達

道島家記抄

英国軍艦来麿ノ始末

英国軍艦碇泊中ノ説

英艦ニ於テ操練

英国人調練

英艦事件

英人云々

英国軍艦渡來ニ付

軍事心得達書

御親書ヲ以テ天下ノ形勢ヲ示サル

一六四 壹岐守ヨリ達書

〔島津茂久〕
松平修理大夫

〔小笠原長行、老中、唐津藩世子〕
壹岐守事、九州路為指揮、今三日小倉表へ致到着候、

明四日從廣島表、毛利大膳〔慶親〕へ別紙ノ通り相達筈候間、

兼テ達置候期限ヨリ早々討入候様可被致候、

六月三日

右壹岐守ハ、閣老小笠原侯也、

一六五 石川清之助ヨリ黒田・川畑・大山へ長防開

戦ノ報

幸便有之、一翰拜啓仕候、先以諸先生益御勇勝御座可

被成奉大賀候、然ハ先達健之助罷出、彼是御厄介相成

置奉謝候、其後直様帰り申心組ニテ、両度計出掛候処、

何分道筋六ヶ敷、一度ハ若松ヨリ追返サレ候様ノ事モ

有之、尚又此方模様モ相定不申、先滞留仕居候処、昨

日木戸貫治〔孝乙〕ヨリ書翰參、其主意ハ幕府必接手切ニ相成、

戦端相見候ハ、直様報致之儀、御地并ニ御国等へ急速

相達候様、黒田〔清徳〕了助様ヨリモクレ、御申置相成居候

事故、此度之次第〔六戸磯〕備後助幽囚ノ始末、及書面返却・必接

手切之儀等相達呉候様、且又御国ヨリ御周旋ニ相成候

〔卷ノ名ヲ以テ買入レタル風帆船〕
櫻島丸船之儀モ、カ、ル切迫之形勢候間、何卒急々御

差廻シ被下候様、別テクレ、御願申上呉候様、委細

書付等差越ニ相成候ニ付、一先崎陽二船ニテ參リ、彼

地ヨリ御国元へ御報知奉願、其上宰之方へ罷出申合ニ

テ、今日乗船之砌へ御両君相見へ、不取敢談話中申來

候ハ、一昨二日藝州口敵軍ヨリ砲発ニテ、戦端弥相開

候由、急報ヲ得申候、左候へハ艦之儀モ、尚更相急ク

儀ト相考、急速渡海仕度候へ共、連日西風ニテ、何分

着期之寬急難計、幸之儀ニ付、此先生へ相願御報知申

上候間、何卒直様御国元へ御報致奉願候、イツレ近々

拜顔之上、万々御物語可申上相考居申候、尤艦之儀ハ、此両先生へハ不談事ニ御座候間、是亦左様御放意奉願候、取紛中勿々相認、失敬而已御用捨可被給候、恐々謹言、

六月四日

黒田嘉右衛門様

(清應)

川畑伊右衛門様

(寛文)

大山寛之助様

(寛文)

(中岡慎太郎)
石川清之助

一六六 篠原冬一郎・黒田了介ヨリ大久保一蔵へ

書翰

長防事件モ弥手切ニ相成、去ル朔日ノ夕、弥五日ニ御討入ノ旨命諸藩へ布告御座候、閣老小笠原ニモ、二日昼過廣島表蒸気船ヨリ出帆ニテ、小倉表迄罷下リ申候、決テ九州辺出立ノ指揮トシテ罷下ルトノ風説モ御座候、藝州表モ随分五日ニ討入ノ情実ト相見居申候、一先大略御届申上候、委細ノ儀ハ私共御直ニ可申上候、以上、

六月五日

大久保一蔵殿

(利通)

篠原冬一郎

(清應)

黒田了介

一六七 金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

近況如何々々、其以來ハ御無音御包容所希也、形勢モ又々小変致シ候、關宿一件奇妙之事ニテ齟齬致、画餅相成申候、其真ヲ知候人ハ大越公而已也、併此節ハ防州モ關宿覚悟出来候ヲ知候様子ニ御座候、乍然退役ニ相成候上之事故、今更可致様無之、右ニ付又々別所へ可施神州之大策有之候、

(時應)

永井雅楽割腹ニ無相違之由、追々探索致シ其実探出申候、右ニ依テ今日ハ祝心ナカラ枇杷ヲ下物トシ、一杯ト存罷出候折節、御他行迹ニテ残念ニ奉存候、頓首、

六月七日

金子與三郎

黒田嘉右衛門様

一六八 (宛名差出名不明書翰)

尚々幕船ナトモ例ノ暴動同様ニテ、ナニモ不知ル島々ノ漁家民屋へ暴ニ発放ナドイタシ、浮浪ノ暴動ニテモケ様ノ引跡ハ無之候、先日孝助罷上リ候処、到着仕候哉、同人ハ御地ノ用事相濟候ハ、一応速ニ帰国仕候様御申聞ケ可被下候、遠藤首次郎英国ヨリ先日帰申候、暮ヨリ 朝廷へ言上仕、天下ヨリ布告イタシ候ハ大偽譎ニテ、已ニ来卯ノ十二月ニハ於兵庫諸度開港ノ約条イタシ居候由、実ニ可惡ノ甚敷モノニ御座候、此度取急ニ付□□一筆申上候、諸先生ニモ可然御致意奉願候、拜、

弥御清適ニ引ツ、キ御尽力、大賀此事ニ奉存候、サテハ先日黒田先生新港マテ御出ノ由承知仕、不得拜話候(朱)(了介)ハ残念ニ奉存候、頓ニ御帰京ト想像仕居候、藝国近況ハ委曲御直ニ御承知ノ通、何事モ暴レ押付ケ、所詮人心ノ折合思モヨラサル次第不弁、是非ハ不珍様ニテ、終ニ拒絶ト相成候事ニ付、弥々手切ニ立到リ候間、日々砲声ヲノミ相待居候処、已ニ如別紙彼ヨリ及干戈候事ニ付、拳テ進戦ノ覚悟ニ罷居申候、就テハ兼テ御都合ノ趣意御運、是非正邪ニ成丈ケ天下ノ判然致シ候様、成否ハ閣、天下後世ノ為御手ヲ下シ被置候様奉存候、於爰元

ハ一統精々尽力仕候事ニ付、御厄害ニ被預候儀ハ、イカニモ御氣ノ毒ノ詛ニ候得共、暫御滞京ノ方可然カト奉存候、イツレ戦ハ早々ニ片ハ付申間敷ト被相察申候、現場ノ儀ハ黒田先生其外御知己ノ諸君トモ得ト被仰合、往々ノ都合克御決定奉祈念候、先ハ為其不取敢得御意申候、其中時節御自然申モ痴ト奉存候、勿々頓首、
六月十日夜

一六九 大山格之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(開戦ノ報)

去ル朔日之御細翰相達、辱拜見仕候、扱御道中御艱難ニテ無異儀御通行被為在候処、御腫物等御不都合之由、追々ハ御全快奉察上候、今日明日ト日夜待上候処、不得止次第御座候折柄吉井氏参着ニテ、大ニ得幸申候、先日ヨリ小林又七当公へ拜謁被相願候処、美公御逢之(本)(美濃守ヲ云)賦ニテ、例之通其期ニ臨ミスヌキ申候次第、御笑可被下候、扱爰元之儀モ兼テ御談合申上候通御座候処、書付相達候得共、日々勢微ニ相成、委細ハ吉井ヨリ西郷氏へ回致相成候間、御覽可被下候、自然御快氣之上ハ

御氣張可被下候、扱先日八日ヨリ小弟ニモ小倉表迄出張、彼是都合モ宜敷、彼地ヨリ飛脚ヲ以テ、藝州ノ形行西郷氏迄申遣候間、自然御推覽可被成下候筈奉察上候、且又今日又一封西氏(西郷)へ差出申候間、御覽可被下候、既ニ東西切迫之期ニハ相違無御座候、大村・深川ニモ先日帰着相見得、弥去ル二日戦争相開候形行相通シ申候得共、不分明故小弟差越候様内談ニテ、八日ヨリ差越、昨夕方帰リ着申候、何分彼地ニモ、当時格別之場合ト致愚考候間、御案内通先此地之事件穩ニ有之候間、一先此涯彼地へ出掛、万一討入相成候ハ、尚更之事ト奉存候間、乍不及小弟出張候儀、西郷氏等へ御談合被成下間敷哉、諸藩何方モ出張相成居、当分別府何某出張相成居候得共、先日田之浦前ニテ、御国砂糖船難船相成、当分砂糖揚差引多、出張軍勢雲霧之中ニ砂糖揚ニ御座候、夫故小倉之方ハ擾動ニ御座候間、何モ相通シ兼候儀ニ御座候、別府氏モ世間本々上リノ仙骨ト相見得居申候、外ニ御見込モ有之候ハ、尚更仕合之至御座候得共、貴公様迄御伺申上候間、以御賢慮御談合被成下度、伊蔵モ一緒ニ馬關江渡海、今日迄ハ帰着無之候、別紙石川ヨリノ手帖相届キ、二日ヨリノ説ニ御座

候、甚取急キ荒々如此御座候、恐々頓首、

六月十二日

大山格之助

黒田嘉右衛門様

一七〇 川畑伊右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(防長ノ形勢)

自宰府

黒田嘉右衛門様

川畑伊右衛門

平静

尚々、肥後三千人計出兵之義、小倉迄此十六日限出勢之段、御達替相成候段、承得申候、大山格之助候より西郷氏江向委敷被申越候段、承得申候、

去月廿五日并当月六日両度之御細輪相届、難有拝誦仕候、弥御壮健ニて道中筋海陸無御恙、去月十五日御帰着之由、目出度御儀奉存、御祝儀申上候、随て私を初(采)諸人数皆々無恙相動居申候間、乍憚御安意可被下候、御帰着之上直ニ御出殿、宰府表中国辺之形勢御届被下候由、其後土持佐平太殿(綱幸)より応接、其外探索之形行急飛脚川畑嘉藤太差立御届申上置候処、御家老衆江御披露

氏探索之形行巨細御届相成候間、於御座御熟覽可被下候、当月五日小倉より急飛脚到来候ニ付、開封仕候処、別紙土持佐平太殿より藝州表探索之次第御座候、然れとも其節御届申上置候同様之趣にて、飛脚にても差上、申上ル程之儀有之間敷相考、差扣居申候、然処今日田中金兵衛殿足輕者人急飛脚被差立候ニ付、備御覽候間、若哉御用見合とも相成候ハ、宜様御披露被下度奉願候、夜前八ツ半時分、大町日向屋裏通江出火有之候ニ付、直ニ勢揃、御本陣江向け非常之堅メ場江出陣仕申候、各藩も同断にて大騒動御座候、就中薩兵之儀勇敷勢ひ之事ニ御座候、僅一二軒にて間もなく鎮火相成、仕合之事ニ御座候、おもひ出し考出申上候間、（思ひ出しの方言）前後之文面御高免奉願候、先は此等之趣、御安着之御祝儀、且御尊書之御厚札旁、一筆如斯御座候、恐惶謹言、

六月十二日

川畑伊右衛門

篤行

〔大〕
〔天〕

黒田嘉右衛門様

〔黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

一七一 道島家記抄（佐幕ノ俗論）

〔朱〕〔英人ヲ云〕

此節遠客舶来候付、無類ノ御馳走向被仰出、其上御側廻リノ者砲術調練拜見被仰付、彼方砲術迄モ御覽被遊、諸士へモ見物被仰付候旨被仰出、サレバ何様ノ御趣意ニテ、右ノ通御恵積有之候ヤ、從來外夷ノ者共御悪シミ深キ者共ニテ、於京師御建白ハ勿論、生麥一条モ有之、アレ程天下国家ノタメ突立タル御所置、一統感激仕居候処、此節英人被召呼候儀、彼方使節共不相見得、仰出ニ遠客渡来トノ事計ニ御座候得ハ、何等ノ子細ニテ差越候哉、此前ノ御所置トハ格別ノ違ヒ、何レモ下々ノ人ニテハ難奉窺、実ニ狐疑ヲ生シ申候、災ヒハ狐疑ヨリ生スト申儀御座候間、願クハ下々狐疑ヲ生セサル様ニ御制度不被遊候ハ、人心沸騰国家擾乱、御社稷ノ危キニ至リ可申候半ト、日夜心ヲ悩シ、寝食ヲ忘レ申候、何分御所置ノ難解儀ヲ左ニ奉窺候、

一 此節英国ノミニストル舶来ニ付テハ、英国ノ使者ニテ御座候儀、左候得ハ彼方ヨリ使節可差遣トノ案内ノ節、ケ様ノ使節差越筈、兎角御受不被遊候テハ不被為叶候付、公武へモ御窺被成候旨、明白ニ為御知相成候テ安

堵可仕候、万一此御方ヨリ強テ御招キ被成候テハ、以
ノ外ナル御事ニ御座候、一昨年来尊王攘夷ノ仰出ニ齟
齬イタシ、天下国家ニ御申分ケ有御座マシク、人心疑
惑ヲ生シ申候、是不解ノ第一ニ御座候、

一英国ヨリ使者渡来、類ヒナキ御馳走被成下候上、外四
ヶ国等ヨリ使節渡来難計、左候得ハイツレ此節ノ通、
同様ノ御惠釈不被成候ハ、余事ヲ不知醜夷ノ輩ニ御
座候間、決テ承服仕間敷候、ケ様ニ追々大國ノ使節御
引受被成候テ、纔カ七十万石ノ御所帯、(朱付書「限リケル」)限り右ノ財ヲ
以テ無限ノ御物入、何ヲ以御補ヒ可被成候哉、誠ニ危
キ御所置、是不解ノ第二ヶ条ニ奉存候、

一右ノ通使節渡来ノ節ハ、其程々ニ応シ御取扱ヒ可有之
候事ニ候処、何様ノ訳ニ御座候得ハ、右ノ通御惠釈重
々敷被仰付候哉、余事ヲ不知醜夷ノ情態、言事成ス事
信義ヲ相含ミ、ケ様ニ候得共、是ハ外面計ニテ、真実
ハ日本ノ財ヲ貪リ候儀相違無御座候、此等ノ事ハ一昨
年来仰出ニモ相見得、克御存知ノ事ニ候間、右体ノ御
惠釈当然ノ御事ニ、夫ヲ類ヒナキ御馳走向ト、是不解
ノ第三ヶ条ニ御座候、
(卷「安久二年」)
一去ル戌年ノ時分ヨリ 尊王攘夷ノ大道御突立、江東・

京師ノ際ハ勿論、御当地下万民ニ至迄、(卷「貴久・義久」)実ニ三代ノ御
遺風突立候儀ト、深ク感激仕居候処、只今ニ至リテハ、
右ニ引替英夷ト御親ミ、就中開成所トイフ役席迄モ御
建被成候儀、是不解ノ第四ヶ条ニ御座候、

一砲術訓練ハ何ノ為ニ被仰付候哉、蛮夷襲来スル節藩屏
ノ為ニアラズヤ、初テ英人差越候節、彼カ望ミモセサ
ル事ヲ、格別ナル御側廻リノ者共ノ訓練ヲ、軽々敷彼
ニ御見セ被成候事、余リ輕忽ノ儀ニ奉存候、尤彼カ内
情モ難計、定テ此事ハ彼カ人数扱ヒ等御見取ノ為、此
方ヨリ訓練御初メ被成候テ、御初モ辞退ハ不成トノ思
召モ可有之候得共、彼ハ航海砲術ハ自負スル程ノ事ニ
付、決テ辞退ハ不仕、彼カ砲術練熟ヲ直ニ見聞イタシ
候テ、人皆意縮スルノ氣ヲ、却テ此方ノ害ト可罷成、
是不解ノ第五ヶ条ニ御座候、

一昨年方ヨリ英学稽古方ニモ候哉、西洋各国へ余多被
遣、又ハカラハトヤライフ者ヲ御招キ被成候儀、何事
ノ思召ニ候ヤ、彼カ情態ヲ御探リノ為カ、又彼ノ国風
ヲ御慕ヒ被成候ヤ、下々ノ人ニハ、ドフヤラ御親ミヲ
此方ヨリ御開キ被成候ヤニ被察申候、何分戌年已来ノ
御本意トハ雲泥ノ違ヒ、人心疑惑ヲ生シ申候、是不解

ノ第六ヶ条ニ御座候、

一 生麥ニテ英人ヲ殺伐イタシ、彼レヨリ殊ノ外詮義イタシ候得共、義氣堂々ト御立凌キ、殊ニ公辺ヨリモ国家ノ難題ニ可相成候間、程能御取扱被成候様、分テ申諭モ為有之ニ、動キ給サル故、公辺ヘモ止事ヲ不得、既ニ去ル亥年兵端ヲ御開被成候場ニ相成候テモ、其殺人ハ矢張御側廻リニ御召仕被成候程ノ儀ニ付、御領中七八分ハ愕然ト不驚者ハ無之候処、今ヶ様ニ英人ト御親ミヲ御開キ被成候儀、公辺ハ勿論外国ヘ響キ候テモ評判モ可有之、就中其節鉄丸ニ中リテ子孫且ハ焼失ニ逢候者共、今ニ切齒憤激ニ不堪、脇ヨリモ見ニ不被忍有様ニ御座候、是不解ノ第七ヶ条ニ御座候、

一 庚申ノ春井伊カ殺害ニ逢候儀ハ、

井伊直親

蛮夷ト親ミ攘夷ノ道

突立カタキ所ヨリ、憤発シテ大義ノ大道ヲ採行ヒシ故、公辺ニテモ無抛十萬石ヲ廢シ、御当家ニテノ国人相加里シ迄ニテ、何ゾ夫ニ御拘り候程ノ儀ニテモ無之候得共、第一攘夷ノ道御採用ノ折柄、却テ其殺人ヲ御愛シ被成候謀ニ当リ、〔志〕〔全長原善左衛門ヲ云〕諸人モ称誉シテ井伊ハ日本ノ奸賊ノ長タリト、今ニ相惡ミシハ、攘夷ノ道ヲ不相守故ニ御座候、シカレハ大義ト大道ハ天地反覆スルトモ、確乎

トシテ可動儀ニ無之候処、今無故英人トヶ様ニ御親ミ被成候儀、天理ニ御背キ被成候道理ニ当リ、何様ノ御所置ニ御座候哉、井伊ハ今日ノ事ヲ論セス、甲乙何レニカ帰セン、是不解ノ第八ヶ条ニ御座候、

一 去ル亥年英人襲来ノ節焼失ニ逢候輩、イマタ木屋掛同前ニテ、実ニ見ルニ不被忍有様ニ御座候、此輩ハ猶更夷人ヲ視ル事寇讐ノ如クオモイ、今ニ不平ノ氣ヲ懷キ居可申ハ人情ニ御座候、其訳ハ則生麥一条、攘夷ノ道ヨリ事起り候間、少シハ下々ノ情ヲ御汲取、廉恥ノ風ヲ御振興被成候儀当然ノ儀ト奉存候、其上ヶ様ニ諸色沸騰ノ儀モ此弊ニテ、其砌ヨリ礎ト高料ニ罷成、一統困窮イタシ可然モノヲ、却テ御親ミ被成候儀、是不解ノ第九ヶ条ニ御座候、

一 英人渡来ノ節、若年ノ輩、万一不被為行届候場ニ相成候間、彼ノ相慎候様トノ仰出、義理ニ於テハ決テ猥ケ間敷儀ハ露程モ有之マシク、御掛念ニ可及儀ニ無御座候間、道理明白為相知有之候様御所置可被成候、今無故ヶ様ニ英夷ト御親ミ被成候儀、別条仰出何レカ是ナルカ、後年歴史ニ何レカ載可申候ヤラン、是不解ノ第十ヶ条ニ御座候、

- 一 幕府ハ 天朝ヨリ被命シ職分ニ付、諸侯方ハ其旗下ニ御座候付、兎角幕府ノ命ヲ背クヘキ事ニアラス、故ニ天朝ニ対シ、幕府ヲ捨玉フ事義ニ当リ申マシク、万一將軍ノ職掌ニ不叶儀モ候ハ、御建言被成、明ラカニ交リヲ御裁被成候儀当然ノ御事ニテ、天下国家ノ為誰カ是ヲ非義ナリトセン、今無故幕府ヲ御捨英夷ト御親ミ被成候儀、何トモ弁ヘカタク、是不解ノ第十一ヶ条ニ御座候、
- 一 此節〔采〕〔金鏡ノ條付ヲ云〕金ノ太刀等數腰西洋各国へ御渡相成候儀、粗承知仕候、何事ノ為御差渡相成候ヤ、未西洋各国ヨリ使節等為差上儀モ不承候、左候得ハ和親ヲ此御方ヨリ御開被成候儀共ニテハ有御座マシクヤ、是非共ニ御差渡不相成候テ不叶場ニ御座候ハ、公武ヘモ御届申上、可成ハ道理明白為御知ノ上被差渡度、左様無之候ハ、今迄攘夷ノ道突立タル儀ハ、先年ヨリ御書取ニ段々ト被仰出候、殊ニ攘夷ノ 勅書御頂戴ノ儀モ有之候故、右ノ通外国へ御送りノ御所置、下々何レモ疑惑ヲ生シ、是不解ノ第十二ヶ条ニ御座候、
- 一 異国へ〔傳書會ヲ云〕日本市トヤライフヲ相立候儀、専ラ此御方ノ御所置ト申触候、寔ニ有間敷御事ニ御座候、不義ノ財ヲ御貪リ被成候ハ、天理ニ御戻リ可被成道理ニ当リ、殊ニ諸色猶更高料可相成候、此事ハ決テカラハ・ミニストル抔カ奸謀ニ御座候半、假令此御方ノ御益筋ニ相成候共、日本中ノ妨ケニ相成、終ニハ皇國ノ油ヲシホリ、世上一統困窮成立、日本ノ害ヲ此御方ヨリ醸出サレ候場ニ成立可申候半、是不解ノ第十三ヶ条ニ御座候、
- 一 カラハト云者ヨリ過分ノ御借銀有之、此返弁ノ方ニ大島ノ銅山ヲ被相渡候ヤ〔采〕〔風説ニ過キス〕風説承申候、弥其通ノ儀ニ御座候哉、左様ニ不義ノ財ヲ御貪リ御借入被成候儀、曾テ有之マシク、何様ノ訳ニ御座候得ハ、攘夷ノ国ヨリ右次第御借銀ニ相成候ヤ、誠ニ可恥ノ儀、且ハ 勅書御違背ノ道理ニ相当リ可申、孫子ニ利シテ以テ是ヲ誘ヒ、乱シテ以テ是ヲ取ルトイフ事御座候、彼今利ヲ以テ誘フ、闇ニ彼力術中ニ陥リ玉フトイフヘシ、假令如何様成智弁ヲ以テ説クトモ、一人ナリトモ不心付モノハ有之マシク、能ク御勤考可被遊、限り有ノ銅山、夫ヲ取り尽ス時ハ、余事ヲ不知醜夷ノ輩大島ヲ一円仕ルヘシ、夫ニモ不飽喜界島・徳ノ島ヲモ手ニ入レ、終ニ琉球ヲ吞申候儀無疑、是則不時ノ幸ヒアル時ハ不時ノ災ヒ有トハケ様ノ事ニ御座候半、其時何様御後悔ナサル

トモ力不足、御取返ノ期有御座マシク、国家ノ大事ハ衆人ニ議セシメ玉フヘキ事ナリ、是不解ノ第十四ヶ条ニ御座候、

一 御当家ハ御家柄トイヒ高頭トイヒ、殊ニ忠久公已来連綿ト目出度御国ニテ、諸侯方ハ勿論凡日本国中下万民ニ至ル迄、薩州ト申セハ一統尊敬シ奉リシ上、去ル戊午已来猶更勤王ノ御志ヲ立玉フ儀、社稷ヲ継玉フ格別ノ義ヲ以テ御勤メ被成候儀ト、其高義ヲ不慕モノハ無之候処、今俄ニ信義ヲ御失ヒ英夷ト御親ミ被成候儀、其訳ヲ不致納得候得共、下々疑惑ヲ生シ、上ハ 朝廷祖宗ニ対シ御申披キモ有御座マシク、是不解ノ第十五ヶ条ニ御座候、

一 礼楽征伐ハ 天子ヨリ出ルト承ル、今ナニトナク戎衣〔朱〕〔辭服ニ據シタル製也〕ノ姿ニ一變セシメ玉フ事、イマタ天下ノ制度ヲ承不申、衣服ハ上下貴賤ノ差別ヲ極テ、是程大ナル儀ハ有御座マシク、当世態輕便ノタメ被相用トイフトモ、敵俄ニ地ヨリ湧出ルニモアラス、飛テ来ルニモアルヘカラス、国大ナリトイヘトモ、戦ヲ好メハ其国必ス亡ト申儀モ御座候得ハ、猶更人氣不信様ノ御制度アラマ敷ク候、今殿中ニモ戎衣ヲ服スルヲ見レハ、稍蛮夷ノ風俗ヲ好

ミ玉フ様ニ相見得、人心沸騰可仕候、衣服ハ私ニ改メ易ヘ玉フヘキニアラス、殿中ハ国家ノ大礼ヲ執リ行ヒ玉フ大事職掌ノ場ニ御座候間、君臣上下ノ差別ヲ正シ、威儀ヲ以テ国家ヲ治メ玉フヘキヲ、今胡服ヲ用ヒ玉ハ、上下ノ差別モナク、寔ニ見ルニ不被忍次第二御座候、是不解ノ第十六ヶ条ニ御座候、

右ハ去ル戊午御上京、尊 王攘夷ノ御建白諸侯ヘモ御演説被成候処、〔朱〕〔公光公指シテ〕公ノ尊慮諸侯肯テ間然スル事不能、於幕府モ拒事不能、稍一洗变革ノ場ニ相成、ノ朝廷ニテモ叡感マシマシテ御委任可被成程ノ事ニテ、攘夷ノ勅命モ相下、 御神劍御頂戴、官位御昇進モ有之候付、マス〜 朝廷ヲ被危、敵然ト攘夷ノ大道可被突立候処、此節ノ御所置前条不解ノ件々、下々疑惑ヲ生シ申候、礼義廉恥ハ国ノ四維、四維不張ハ其国危キト承申候、夫君ハ万民ノ上ニ立玉ヒ国家ノ政事ヲ採行ヒ、下ヲシテ安カラシメ玉フ御職事、第一礼義廉恥ノ道ヲ以テ風俗ヲ正シ玉ヒ、下ハ又上ノ恩惠ヲ蒙リ父母妻子ヲ養フニヨリ、君ノ命ヲ尊奉シ、身命ヲ不惜ハ是臣子ノ職分ナリ、故ニ君ハ天ニ則リ、地ニ応シ、人ニ和シテ国家ヲ制度シ玉ハスンハ、君タルノ任トハ申難シ、殊ニ

御当代(朱)「九州守護職ノ古事」ハ守護職ヲ御受継玉ヒシ義理合モ御座候ハ、猶

更往古ヨリノ御政事ノ綱規ヲ不乱様、大夫有志ノ輩へ

屹ト被命候儀、御職事ノ第一ト奉存候、就中当世帯

勅命ヲ蒙リ給ヒシ故、御身ヲ御責勤メ玉ヒ、大義ノ大

道ヲ以テ諸士ヲ撫育シ玉ハスンハ、杜稷ヲ継玉ヒシ天

理ニ戻リ玉フノ過チアルヘシ、左候得ハ此節英人被召

呼候儀、攘夷ノ

勅書ニ御戻リノ場ニ相当リ、一統恐入罷在候、後年歴史

ニ忠否ノ謀何トカ載セ申サン、講堂史官ノ義論ヲモ御

聞、礼義廉恥ノ道ヲ以テ国家ヲ治メ玉ハスンハ、人心

沸騰可仕候間、何卒前条ノ件々疑惑ヲ解ケ候様有御座

度候也、

丙寅六月十二日書畢

一七二 伊集院直右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(大島郡乱妨ノ始末)

自宰府

黒田嘉右衛門様

伊集院直右衛門

平静

尔来御左右不承候得共、益御壮勇可被成御座奉恐喜候、

随て小夫ニも無異相務居申候間、乍憚御休意可被下候、

扱尊兄ニも又々御出府御拜命之由御座候処、御病氣ニ

て暫時御延引之由、折角御保養、早目御出府之処御待

申上候、鄙生事も又々馬關辺迄為探索方被差遣候処、

此節は実ニ切迫愉快之事情と罷成申候、最早去ル七日

此より幕府蒸氣船を以、防州大島郡之内諸所へ発砲、

及乱妨候由にて、高杉其外(朱)「實作」一兩輩人数三百人位引列、

為応援出発之由、右ニ付ては条理も早是迄にて、藝・

石二州之攻口江も国内より打出候筋ニ致一決、既ニ一

昨十二日馬關ニおひて、井上文太其外(間多)「鑿」(元純)「清永「常士」

申候、同人義ハ石州口先鋒毛利謹岐守参謀にて候由、

何分是よりは追々珍説も可有之ニ付、申上含御座候得

共、早々御出府之処奉待候、此段任便宜荒々如斯御座

候、恐々謹言、

六月十五日

伊集院直右衛門(朱)「兼寛旧名」

黒田嘉右衛門様

一七三 三雲藤一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(幕艦大島郡砲撃ノ概況)

鹿府ニテ

自宰府

黒田嘉右衛門様

三雲藤一郎

平静

〔采〕〔伊右衛門〕

尚々川畑氏よりも宜敷申上越呉候様承申候間、左様

御恩召可被成下候、

去ル十二日立之飛脚便より書状差上置候間、定て相届

申候半、借は馬關辺江探索方として差越居候直右衛門、〔采〕〔伊集院〕

昨日帰旅いたし承合候趣は、幕長応接之儀は、去ル廿

九日限にて手切相成、双方对阵相成居候処、別紙之通

去ル七日より蒸気船を以乱妨相始り候由、就ては追々

陸戦ニも成立候半被相察申候、就中石州路より大将毛

利讃岐守・軍帥井上聞多にて、藝江打て掛る之内謀最

早相始候半、就ては小林之処〔采〕〔窪木郎〕も内実は不被計候間、是

非々々早目ニ御出旅被成下度奉願上候、長之委キ事情

は、此節被罷下候岸長彦七より御聞取可被成下候、恐

々敬白、

六月十五日

藤一郎拜

黒田先生

二伸、昨日石川清之進直右衛門同道にて爰許江罷帰、

別紙

上關より之報知

一過ル七日四ツ時、室津白浦沖より蒸気船老艘、大砲

四發室津瀬戸口漁人家屋根其外江打掛、直様大島郡

安下庄江向ケ出船致候事、

但同九日到来

大島郡より同

一同八日晝六ツ半時頃、蒸気船式艘、大島郡上口のは

し油宇村江大砲四五發暴ニ民家江打込、商船拾艘乗

組之分百五拾人程同所江致揚陸候事、

一大島郡南面中央之村安下庄沖江蒸気船襲来、海岸相

廻り、大砲拾七八發同民家江打込、已之刻上筋江向

致出帆候事、

右六月八日未ノ上刻仕出

一蒸気船四艘・商船數艘、藝州沖より大島郡北面中央

之村久賀村江乗入、式艘より大砲數拾發暴ニ民家江

向發放、同所沖合江致繫船候事、

一右大島郡近辺前島其外江發放繫船、浜人ともを脅候

事、

右同日酉之上刻仕出、十日到来、

(番号一七二・一七三黒田文紀氏所蔵本にて校訂)

一七四 一條十郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

昨年来不得拜面候処、愈御静栄御上京之由奉大賀候、然処武井之言ヲ以承候得ハ、過日路途ニテ御行違申上候由之処、今更何共恐入、紅顔之至候テモ、今日鳥渡昇堂可得拜面心組ニ御座候処、大急之用事出来候ニ付、勿々国許迄道中九日振ヲ以下向候様、唯今家老ヨリ被申付候ニ付、帰国仕候処、残懐之至ニ候へ共、御尋モ不仕、甚以不相濟、汗顔之至ニ御座候、然ト雖マタ々不遠上京仕候間、東都カ皇都之内ニテ、当年中得拜顔候様可相成候間、其節万々昨年来之形勢談仕候様可相成候間、左様御承知被下度、マツ々天下之事一安心仕候、加之貴兄御上京之上ハ、御一策可被為入事ニ候間、未タソノ策ヲ問ストイへ共、僕窃ニ喜居申候、此上何分天下ニ定候様之御周旋奉願上候、ナニモ唯今出立之処心セワシク、紙筆難尽事件而已ニ候間、同藩手塚正左衛門ヨリ私一身ハ勿論、一藩中之義モ御

聞取被下度、マツハ勿々不具、

廿日朝

一條十郎

黒田嘉右衛門様

拝具

一七五 中路権右衛門報告

(小倉領海へ異国船渡来ノ事由)

去ル三日異国形ノ蒸気船一艘、下筋ヨリ罷登リ、長州六連島ト南風泊トノ間ニ繫船仕候ニ付、早速問聞船差立相糺候処、為乗組不申、印等モ相見へ不申、何国ノ船トモ相分リ不申候処、翌四日朝同所出帆、領海門司浦沖ニ致碇入候ニ付、早速前同様致候処、英吉利国ノ旗相建申居候付、猶又船号来意等相糺可申候処、乗組難相成、委細ノ儀相分リ不申候、横文字写可申ト数度乘迫り候テモ、本船ニテ印本字無之、端船ニ左ノ通印御座候、

- イ 同日昼端船一艘異人共乗組長州赤間關江乘渡、下関也
- 乙 彼方ヨリモ小船一艘ニ三四人乗組、兩度迄潛乘
- 寄、マモナク乗帰リ申候、猶又同日夕端舟一艘

B 二異人六七人乗組、右同所へ乗渡、暮ニ至り本
B 船へ引取申候、

△ (以下三行底本名欄)

○ 同十三日昼、右同断、一艘下筋ヨリ罷登リ、領海門司
浦沖へ入碇候ニ付、早速前同様取計候処、日本人三人
乗組罷在、国旗・舟号等相尋候処、英吉利船ニテ昨日

長崎表致出帆、神奈川迄罷越、馬一疋乗組居ニ付、銅
方ニ被相雇船号等ハ存不申段相答申候、尤船ノ懸(懸カ)ニ左
ノ通記御座候、

フ (空欄)

△ 右船翌十三日朝同所出帆、上筋へ向乘行申候、

△ (以下五行底本空欄)

工 万

△

△

一同日夕、右同断、一艘上筋ヨリ乗下リ、領海楠葉村枝郷
(北九州市門司区)
大久保沖へ致繫船候ニ付、早速前同様取計候処、英吉

利船ト相見へ申候、然ル処端船ニ夷人共乗組、赤間關

へ乗渡リ、無程乗帰申候、翌十三日長藩ノ者一兩人小
舟ニ乗組、異舟へ漕参乗込間モナク乗帰申候、同日ヨ
リ端舟一艘ニ異人三人乗組、大久保沖ヨリ致上陸、昨
年夷人致埋葬候場へ罷越、当四月七日致建方候印木ノ
横文字ヲ油墨様物ニテ致潤色、猶又幅二尺余長サ一間
余、砂利敷仕候段浜番ノ者申出候ニ付、早速村役人共
罷越候処、最早仕舞本船ニ引取申候、右船直ニ同所出
帆、下筋へ向ケ乘行申候、

一昨十七日朝、右同断、一艘下筋ヨリ罷登、領海通船仕
候付、早速前同様取計候へ共、舟足早ク追付不申候、
尤和蘭国旗相建居候様相見へ申候、

右之通御座候、手当人数等穩便ニ用意致シ、浦々入
念候様申付置候処、領海相變儀無御座候、此段申上
候、以上、

六月十八日

(愚幹)
小笠原左京大夫

右承知致候付申上候、以上、

(延年)
中路権右衛門

(政風)
内田仲之助様

(友表)
吉井幸輔様

一七六 五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰

(氷製造器等ノ事)

從長崎

右衛門様

五代才助

侍史

一筆啓上仕候、炎暑難凌御座候処、弥以御壮采御連勤
 可被遊御座、珍重恐悦奉存候、然は今般多人數之御珍
 客中ハ、万端御都合克相運〔笑ヲ之也〕ひ、於当崎領事官江面話仕
 申候処、不容易御懇切之御取扱、実以難有奉存候間、
 呉れ々も私より御礼厚奉申上呉候様申事にて、充分
 御趣意貫徹いたし候様相見得、御同慶至極奉存候、天下
 ノ形勢ハ弥以衰態〔悲〕ニ趣キ、長防馬關辺も既ニ兵端相開
 候動静、及幕吏逆謀を企候事件等承得候趣、同席中へ相
 託申上候間、御覽被下度、刑部様江申上置候事件ハ、
 御珍客中ハ御混雜にて、未御披露ハ無之御模様承知仕
 候得共、最早追々御承知被成下候半、何卒速ニ御評議
 被成下候処奉希上候、何分今通にてハ御屋敷向相立不
 申、日々異人共催促而已相受、只々切迫之仕合平ニ御
 汲取被遊被下度奉願候、ガラハニも比日大不平にて、
〔悉〕〔案商人長崎大博士一本松ニ居住ス〕

昨日も大浦江差越申候処、何か御国許にて申立置候間、

此御方之御用向ハ、最早御断申上候段申掛、而三日中

一夜緩々其情合可申聞との趣ニ御座候、定て何か苦情

申立候事致と相考居申候、必竟ハ御金繰不宜より事相

起候儀にて可有御座、ホートウエーン、ヨールト杯も追

々催促、只々困窮相迫、実以苦心罷在申候、汾陽〔悉〕〔彦次郎後次郎右衛門ト改ム〕ニも

不遠出崎之事と日夜三秋罷在申候、私儀も殊之外滞留

延引任心底不申、右預之御用向相捌候上ハ、都て汾陽

氏江引渡罷帰候様仕度段ハ、刑部様〔新繁久傳〕ニも細々御歎願仕

置申候間、自然汾陽〔光遠〕在国中ニ御座候ハ、左様御申達

被置被下度偏ニ奉願候、先は此段奉得尊意度如斯御座

候、恐惶謹言、

六月廿五日

五代才助

右衛門様

侍史中へ

追て、此内粗申上置候氷製機関、此節渡来仕申候間、

進呈仕候、御落手被成下候ハ、難有仕合奉存候、尤

此内も申上置候通、追々御内江被罷出候面々、折節御

地走被成下候ハ、か様なる事迄も人力を以随意ニ

製候処、蒙照之端ニも罷成可申奉存候間、其趣意御汲

取被下候ハ、重々難有仕合奉存候、製造方之儀ハ、
此節飛脚として罷歸候足輕坂本伴次郎相心得居申候
間、御家来共江伝聞いたし候様御申聞被下度、君公
ニは刑部様より御献呈相成、小大夫〔卷〕〔不松帶力〕ニは私より舌ッ
差出置申候、氷製如きものハ可驚ニあらずと申人物
も御座候へ共、ケ様なる儀まで人力を尽候趣意、人
々汲取候様有御座度願ニ御座候、

〔桂久春氏所蔵本にて校訂〕

一七七 島津久光ヨリ伊達宗城へ書翰

季夏十日之芳墨相達辱拜誦仕候、追日秋冷相催候処、
愈御壮栄可被成御座奉恐喜候、実ニ御互ニ御無音打過、
不本意之至ニ御座候、貴国ニも多事之由、弊邑ニも同
前御座候、扱 大樹公当時御滞坂中、防長御処置如何
と、乍余計奉案勞候、結局賢兄之御見留如何ニ候哉、
愚昧管見之所不及ニ御座候、賢兄ニも例之幕疑故、御
傍觀却て御休暇之由、御心事奉恐察候、併於幕疑は、
僕之半ニも至り申間敷と奉存候、僕ニも例之痛所申上、
炎熱ニ被犯臥床勝ニて、世務ニ疎情相成、残念之至ニ
御座候、先は貴答迄以乱毫如此御座候、偏ニ御海容奉

希候、頓首、

孟秋念八

〔卷〕
弄鐮賢兄「宗城公」

貴答

〔卷〕
大簡拜「久光公」

二白、御端書辱奉承知候、蒸艦伝習云々別紙名書委
細奉承知候、以上、

三白、愚名之簡は姦也、御一笑所希ニ候也、

〔字和島伊達事務所蔵本にて校訂〕

一七八 道島家記抄（京師ノ形勢風説）

爰元今暫ハ静ニ御座候得共、今日初り様子モ不相分申、
〔卷〕〔戦争〕
色々心配之砌、段々風説御座候、一橋・會津ヨリ此御
屋敷是非手ヲ付候模様御座候、其訳ハ御屋敷御出入ノ
呉服屋、或ハ御出入之東屋扨ヲ呼寄、御屋シキ内何人位
モ入込候ヤ、又相國寺内何人位之入込候ヤ、又相國寺
内ハ士分候ヤ、可計ニ候哉、色々聞合模様御座候、天
下ハ一橋是非取存念ニ被察申候、何分一・會外ニハ幕
命ヲ重シテ、内ニハ一橋ヲ天下ニ取立、會ハ奥州一円
ニイタス含被察申候、此節會モ必死トハメ付居候由、
〔籍出すの方言〕
決テ左モ候半、外ニハ押出手ニ立ハ、會ヨリ外ニハ有

御座間敷ト、テンノ評判御座候訳ハ、別紙ニモ御座候通、大形国許ヲ捨ハマリ切、上京之模様御座候、幕

ト長征伐毎ナカラ寄手敗北、折々クワシキ説書差上可申候、幕ニモ病氣ノ様子、先日典藥等高品何某下坂ニ

テ候処、病氣ノ起リハ当四月比ヨリ事ニテ、療治方蘭

医ニテ仕クサラカシ、ネツニテ舌ナトクサレ居候ヨシ、

少シハ快方ニモ相成タル様ニモ咄トモ御座候、ナクナ

リタルモ相分リ不申、先夜玉光ノ飛物イタシ、皆々不

審イタシ申候、兎モ角モ六ヶ敷、此世中末ツマランモ

ノニ御座候、
右之通当寅六月末ツカタ京都ヨリ贈リ遣シ候由、桑

畑持參ニテ、八月七日写置也、

右ニ付、將軍ハ当分紀州へ潜居被致候由、折田新八ト申

モノ当分長州山口へ差越居候由、此節ノ戦争ノ事共、

坂元數馬へ申遣候内ニ相見得、此事ヲ坂元數島平兵衛

へ相咄候ヲ承候由ニテ記置候也、

一七九 英国ミニストルハルリ・ハルクス及同國
水師提督薩州侯訪問記

千八百六十六年第七月二十七日(我六月十七日)、英

國蒸氣軍艦プリンセス・ロイヤルニ統テヘセルヘント

及ヒサラミス都合三艘薩州ノ港ニ馳セ入ル、時ニ

日晴空輝キ海面風波ナシ、海陸ノ好景愛スヘシ、昔日嘗

テ暴風激浪、左右ノ台場ヨリ砲彈飛發セシ時、此所ニ

來リシ者數人在リテ、現ニ今此船中ニ在リ、今日ハ我

總督ノ旗章ハ祝砲スルトテ、其用意ヲナセル一個ノ台

場ノミニテ、他所ハ全ク静ナリ、此一ノ台場ニモ、嘗

テ戦争ノ時ハ發砲シタリシカ共、此度ハ松平修理大夫

其家來ヲ長崎へ遣ハシテ、英人ヲ招待シ、親睦ノ訊問

ノ為メ祝砲ヲ發スルトハ、時勢變革シタル事也、

三艘ノ蒸氣船順序ヲ正シ鹿兒島へ入港シテ、午後第一

時各碇泊場ヲ占タリ、錨ヲ投スルヤ否ヤ、城市近キ台

場ヨリ十五砲祝發セリ、其打方遅ケレトモ、驚クヘキ

程正シク打シカ故、暫時ニ終リ、間モナク薩摩ノ大臣

其他役人数名船中ニ來リ、丁寧ニ挨拶ヲ述、此大臣へ

此方ノ意ヲ述、我カ船日本ノ国旗ヲ掲ケ二十發祝砲シ

タリシカ、暫クアリテ上陸ノ応砲セリ、此日ハ更ニ用

向ノ談ナシ、只上陸スル日士官ノ警護トシテ、番兵ヲ

置ントノ趣ヲ述ヘタルノミ、午後第四時ハルリス井水

師提督士官ト共ニ上陸シ、城市ヲ遊歩セシニ、数千ノ日本人路傍ニ立テ見物セリ、其間ハ役人唱道シテ人ヲ制シ、漸ク市ヲ離レテ一寺ニ至リ、此所ニテ菓子・チヤンハン・麦酒等ヲ出シ馳走セリ、同月二十八日我水師提督之ヲ迎フルニ、軍艦ノ法ヲ以テ十九発祝砲ス、侯ニ陪從シテ来レル者ハ、前日来リシ人々及ヒ大臣新納ナリ、此人ハ曾ア堀ト共ニ英國及ヒ西洋ノ諸大國ニ行シ人ナリ、此日午後ミニストル及水師提督数多ノ士官モ共ニ國主ニ返礼ニ行キ、相共ニ宴セリ、此宴ニハ各異ノ皿盤四十種（シヤンベンカ）チヤン・酒・麦酒・日本酒等ヲ馳走シ、凡ソ五時程ニシテ宴ヲ撤セリ、今日午後（本國砲台ヲ云）一ノ台砲ニテ的打ヲナシタリシカ、其中リ甚良シ、同月三十日我六月十九日、國主并其兄弟五人の打ヲ見物ノ為メ船ニテ来レリ、種々ノ良彈ヲ発セシ内二百ポントノ破裂彈、八百ヤールドノ距離ニ在ル大ナルノ内側ニテ破裂シ、其他同砲ヨリ発スル所ノ二個ノ実彈、及ヒ他ノ砲ヨリ発セル二彈共同的ニ中レリ、同月三十日寅六月二十日ノ朝大雷雨、午後第四時甲比丹サルニル、水兵百五十人野戰砲二挺ヲ帥ヒテ、城ニ近キ所ニ上陸セシニ、此所ハ甚能掃除シテ、國主以下ノ為ニ天幕ヲ張り、

暫クシテ國主兄弟年長ノ人一名ト共ニ出張セリ、此人ハ身体小短、顔色穎敏ニシテ凡庸ナラス、即有名ナル松平薩摩守当主ノ父ナリ、次テハルリ・ハルクス等モ到リ、調練ヲ始め、調練終リテ種々馳走アリ、第八月一日寅六月二十一日、諸士官遊獵シテ、多ク獲物アリ、此日國主ノ泉水ヲ見ルニ、美麗ヲ極メタリ、此泉水ニ隣リテ製鉄所アリ、十一日ニハ西洋人ノ手ヲ借ラスシテ、日本人計リニテ大砲実彈及ヒ空彈ヲ鑄造シ、蒸氣ノ仕掛ノトルニンレース（曲ニテハダライバンクク）使用セリ、此局ヲ過テ硝子製造所ニ至テ、硝子器ヲ製スルヲ見ルニ、其ノ巧ナル、日本ニテ今ヨリ後製造物ニ長スルハ、此國ノ人ニ在ルコト明ナリ、当今ニテスラ其製作物ノ（本國博覽會ニモ出セリ）二一八、西洋ノ博覽會ニ出シテ恥シカラヌ程ノ手際ナリ、此遊覽ノ後ニ直ニハルリ・ハルクスハ、サラミス船ニ乗テ鹿兒島ヲ辞シ、此時台場ヨリ送別ノ祝砲ヲ為セリ、此度薩州及ヒ其國民ヨリ尽シタル懇親ハ厚クシテ、此ニ過クヘキ様ナシ、英人ト日本人トノ好意ヲ示シ親睦ヲ厚クスルハ、実ニケ様ニコソ有度コトナリ、第八月二日寅六月二十二日、侯ノ弟プリンセス・ロイヤル船（本國高津國書）ニ来テ、其写真ヲ取り、午後此船モ鹿兒島ヲ出帆ス、

此時陸ニテ十五発祝砲セリ、是ヨリ針路ヲ宇和島ニ取り、前日出帆シタルサラミス船ト共ニ遠江守ヲ訪問スル積リ也、其故ハ此度宇和島侯ヨリ英国ミニストル等へ態々案内ヲ為シタルニ因テナリ、プリンセス・ローヤル船鹿兒島ヲ出帆セシヨリ迅速愉ルノ航海ヲナシ、宇和島ニ至リシニ、同所ニテハ既ニ水先案内ヲ用意為セリ、宇和島ノ港ハ周囲ニ山アリテ樹木青々、此山間ニ船ヲ入テ風波ヲシノクヘシ、其模様略長崎ニ似タリ、其間山水明媚、殊ニ山下ニ城市ノアル処ハ尤絶景ニテ、人ヲ悦ハシム、同月四日寅六月二十四日午後第五時碇泊シ、間モナク伊達遠江守ノ家来数人船中ニ来リ、翌日領主其兄ト共ニ家来六七人召連レテ来レリ、此領主ノ兄ハ元ト領主ナリシカ、大君ニ対シテ聊ノ事件アリシニ因テ、其弟ノ下流ニ立タサルヲ得サルナリ、然レトモ表向ハ弟ノ名ヲ以テ、内実ハ権柄ヲ執ハ此人也、斯クテ兄弟及ヒ人々船中ニ留ルコト凡七時許リニシテ、別レヲ惜ム程ニ其案ヲ尽セリ、此人ハ自國ノ學問ノミナラス、外國ノ書ヲモ能讀、ワートルローノ戰ノ事跡等ヲ談シタリ、感スヘキコト也、同月七日寅六月二十七日朝領主兄弟船ニテ来レリ、依之常例ノ祝砲

ヲ發シ、次テ大砲ノ發砲及ヒ調練ヲナセリ、此日貴キ女中凡三十人程船ノ見物ニ来リ、限りナク楽ミアル様子ナリ、

同日午後軍艦ノ将卒上陸シ、領主ノ前ニテ調練セルヲ見シニ、其所作ノ整正ナルコト感スルニ堪ヘタリ(卷)〔英式〕

最モ楽ミナリシコトハ、ハルリ・ハルクス、水師提督及ヒ諸士官ヲ馳走シタル酒宴ナリ、此馳走ノ種品ハ真ニ日本風ノ料理ニシテ、宇和島侯兄弟及ヒ多クノ女中モ共ニ飲食セリ、此席へ侯ノ父其刀ヲ婦人ニ持セテ出席シ、英國ノ医師サルリス及ヒトムス其病ヲ診定センコトヲ乞ヘリ、然レトモ書(手紙)ニ云コトニハ、別ノ病症ナラス、唯其年齢ノ然ラシムル症也ト、此人ハ当年七十五歳ナルヨシ、

夕刻ニ至リ管絃歌舞樂ヲ極メ、酒宴終テ帰ル時多人數ニ挑燈ヲ携ヘシメテ、我輩ヲ端舟ニテ送りタリ、遠江守ハ外國ニ厚キ好意ヲ示サント欲スルコト甚明ナリ、且其領民モ亦同様ナリ、其故ハ道路通行スル時ハ、余カ輩へ菓物ヲ捧クル等ヲ以テ其情ヲ知ルヘシ、同月十一日寅七月二日兩艘共宇和島ヲ出帆セリ、

一八〇 千八百六十六年第八月十六日 木曜日 横濱

新聞

第七月廿五日^(四)プリンセス・ロアイエル^{船ノ名、英ノ軍艦リニエナリ} 長崎開

帆、同廿七日鹿兒島へ着船、寒暖ノ札相濟ミ、薩侯軍艦ニ

来リミニストルハルリト・ハークスヲ訪フ、水軍操練ト射

的調練ヲ致シ見物ナサシム、ミニストル、アトミラル並

ニ船中ノ士官數輩答札ノ為メ登城致シ候モ、同席ニテ饗

応申候、其馳走ハ西洋風ニシテ、罩七・刀叉ノ類ヲ用ヒ、

酒ハシヤンヘン・葡萄酒・麦酒ナトナリ、其後花^(園也)ニ徘徊

シ、硝子製造所ヲ見物シ、鑄造処へ到リテ、此日目前

ニテ、其重サ五噸^{我千三百六十}ノ銅砲ヲ鑄造セリ、又近来改

正大ナル器械局ヲ見ル、且又士官ニ遊獵ノ饗、猪鹿ノ

得物モ多ク、殊ニ一日ノ快樂ヲ究タリ、第八月二日鹿兒

島ヨリ宇和島へ向ケ開帆、同日宇和島ニ着ス、君侯ヲ始

メ下民ニ至ル迄、殊更大悦ノ由、平常ノ札相濟シテ後、

君侯軍艦ニ来リミニストル、アトミラル並ニ士官ノ面々

上陸答札ス、諸大臣力ヲ尽シ饗応シ、君侯モ殊ニ懇切ニ

会話アリ、君侯ノ奥方婦人モパークスノ婦人ニ接遇シ、
心ヲ用テ親切ノ情ヲ露ハシタリ、普天ノ下ハ何物カ此会
合ノ快樂満足ニ及ハサル者アランヤ、是ニ至テ此一事日
本高位ノ人々ト外國人ノ間ノ交誼益々深フシテ、弥密ナ
ルノ嚆矢タラン事、我輩ノタメ希ガフ所ナリ、

一八一 三雲藤一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

宰府より

黒田嘉右衛門様

三雲藤一郎

平静

尚々、^(朱)真柱翁始皆々様江可然御伝声被成下度奉拝願
候、

去月二十四日・去ル四日両度之御細封難有拝読仕候、

先生御出浮^(符)を日々御待申上居候処、御病氣ニテ御出旅

難被調段被仰聞、実以御残多次第二御座候、^(吉井土先)

達て着相成、先仕合ニテ、如命直ニ取会、是迄之事情

委細申込、議論及申候処、更ニ異論無御座候、依て去

ル八日より大山格衆は^(朱)小倉江、伊集院は^(朱)馬關迄為探索

方被差越、同日より吉井・拙者兩人は博多之様出掛、

〔黒田齊博、筑前藩主〕
美濃守様江拜謁相願申候処、御逢可被成と之事にて奉

殿仕、登城之上例之御不快にて御断相成、〔黒田長知、世子〕下野守様迄

拜謁被仰付、無致方若君江先生江御伝言之御返答并寛

大之御処置ニ御尽力被為在度と之趣、〔音世〕幸輔より申上置

候、其より小林方江差越、同断申入置候、左候て私共

昨夕景爰許江罷帰候、大山氏ニも同刻比被罷帰、小倉

表之形勢承り申候処、肥後・久留米・柳川杯人数は差出

候得共、実は不服之由、委事は御問合之通、長も今度

は弥切迫にて不日ニ相始可申候、左候ハ、直右衛門も

近日ニ引取可申候、先々面白場合ニ御座候間、是非ニ

早目ニ御出旅被成下度、神垣ニ掛奉祈候、昨夜半過よ

り大町日向屋江出火有之、直様五藩共ニ兼て請持之場

所江罷出、暫時は大騒動、無程鎮火相成引取申候、是ハ

不宜事ニ御座候得共、非常之稽古ニ相成候、扱御羽織

縫紋為料金二步被差遣、慥ニ御受取申上候、未出来無

御座候間、追て差上可申候、今日急飛脚被差立候付、

六月十二日

藤一郎拜

黒田先生

二伸、御国許御政事向盛ニ御手被付、海陸軍弥相開

〔采、島津主殿〕
け、其上廢寺一件相起り、永吉初真柱翁ニも掛被命、

いにしへニ立帰る時節ニ相成、天ニも飛立はかり、

あな心よき鴨、

〔黒田文紀氏所藏本にて校訂〕

一八二 道島家記抄

六月十四日ニテ候ヤ、肥後ヨリ使者差越、台輪駕籠ニ

テ差越候間、側廻り之者ナラン、西田会所へ被為召置

候由、西田へハ初テノ由、此方ヨリハ西郷吉兵衛罷出

候由、彼方口上ニ、此節長州征伐ニ付、三千人程出勢

イタシ候付、此御方様ニハ何様可被成ヤ、何分御差込

ヲ得候旨申出、其使者相済候上、御寺之拝見ヨリ、台

場等拝見イタシ度申出候由、其時西郷返答ニ、御出勢

前以此方へ為御知有之候得ハ、御差込ヲ被得候事ニテ

御尤候得共、モハヤ出勢被成候上ナラハ、何ソ此方ヨ

リ可承儀ニテモ無之ト、突切タル返答イタシ候ヨシ、

東郷平衛承候、

但此節ノ事ナラン、西郷肥後ノ使者ト、何力議論起

リシ事ニ相成候儀モ有之、何事ナリヤト町役カ内

々相断之由、又外ヨリモ承候付、決シテ無事ナラ

ント相嘶候、大國ノ使者ヲ恥シムルハヨカラン事

ニテ候、

七月廿六日記ス

一八四 油川鍊三郎ヨリ遠武橋次へ書翰

(水口藩内記)

一八三 海軍規則

海軍急務ノ儀、別紙ノ通 仰出ノ御趣意、一同深

奉汲受、兼テ実地ノ心得可為第一事、

一 非常ノ節御艦被差出、又ハ 御召船ノ節ハ、猶又応御
船兵士被召乗候条、兼テ其心得可有之事、

一 於船中ハ規則嚴重相守、兵士之体不失様可相嗜事、

一 海軍所御軍艦大小砲操練可為英式事、

一 平日調練ノ節迎モ、礼義正敷可相守事、

一 規則ヲ破、又ハ不出精ノ人ハ、不差置可被差免事、

一 号令官以下士官ノ面々、隊中ノ差曳ハ勿論、万事可為
受持事、

右条々堅固可相守モノ也、

六月

小松
帯刀

一八四ノ

此度私存込候次第奉申上、御助力ノ儀乍恐奉懇願候儀

ハ、先年弊藩ノ家老岡田直次郎ヲ始、其徒權勢ヲ挾奸曲
ヲ逞、下情不通黜陟与奪ハ勿論、領分ノ百姓訴訟等ノ

事、賄賂ノ多少ニ随邪曲ノ取計仕、或ハ無尽講ヲ企、民

ノ膏血ヲ尽シテ許多ノ金銀ヲ掠、或ハ千年ノ老狐ヲ幾

丸大明神ト申唱、妖社ヲ建立、國中ノ者尊崇不仕者ハ、

事ニ寄セ相罰シ候ニ付、一藩遂ニ妖狐ノ為ニ誑惑仕リ、

主人ト雖如何共スルコト不能ノ場合ニ立至リ、臣子ノ

分何共悲泣痛憤ノ至ニ不堪切齒罷在候処、一昨年二月

十八日、於京師岡田直次郎天誅ニ伏候ニヨリ、士氣漸

ニ興起仕、同志ノ者共建議ニ依リ妖社ヲ毀テ、奸徒夫

々伏罪ニ及ヒ候ニ付、機會ニ乗シ一藩奮起、国恩万分

ノ一ヲモ奉報効度、壯年ノ者共ヲ鼓舞仕、奸商・悪僧

等ヲ追払、一時振起ノ模様モ御座候処、異論ノ者共申

合、却テ異謀有之ト申触シ、異論ノ徒ヲ集、争鬭ノ勢

ヲナシ、種々申触候付、主人ニハ大ニ心痛被致候テ、

落中ノ儒官中村栗翁(和号栗園)へ鎮撫被命候ニ付、栗翁ヨリ同志ノ者へ申諭候処、何分君師ノ命不得止憤懣ヲ忍、一同大岡寺(深澤)へ集会、盟約書ヲ作り姓名相記、持重相鎮り居候処、動モスレハ岡田ノ徒旧復ノ望ヲ起シ、令色ヲ以重役ニ媚候ニ付、或ハ一時奮発仕候者モ、追々従前因循偷安ノ風習ニ流レ、到今同様ノ姿、実以残憾ニ不堪仕合ニ御座候、右ニ付同盟ノ中鋭確立仕候者共危難ヲ侵シ、財産ヲ破り種々相計候得共、言路硬塞採用ノ義モ難ク御座候、此義ハ嫌疑ト申事言触シ候族御座候ニ付、右ノ仕合ニ御座候、扱嫌疑ト申触候子細ハ、一昨年弊壤ノ産桑田謙二(美稱)ト申者、岡田天誅ノ後為國周旋仕、京地ニ寓居罷在候節、守護職ヨリ為召捕人数差出候義并水府ノ産桑屋元次郎・大久保熊次郎無余義子細ニ依リ、窃ニ潜居為仕置候義、又ハ去年膳所藩中ノ者処置有之候節、弊藩ノ者モ同腹隱謀ト欺申唱、讒言仕候者ト相見へ、頻ニ探索仕候事件、是等ノ儀ハ奸人ノ嫌疑ヨリ、少々ノ事モ大ニ申触候故ト奉存候、当時主人在江戸ニテ、何時帰国ノ暇ヲ暇候トモ難分、既ニ天下ノ形勢擾乱ト見受候ニ付テハ、乍恐

鳳輦動揺等ノ議モ難計、且微力ノ小藩盜賊ノ手ニ陥候

様ノ義御座候テハ、主人ハ元ヨリ臣子ノ恥辱此上モ無御座、一日モ傍觀座視仕候ニ忍ヒ不申ノ事情、何卒御大國ノ御力ヲ拝借仕、一藩合力天下國家ノ為微忠相尽申度、此段偏ニ奉懇祈誠禱候、就テハ愚慮ノ趣別紙ニ申上候間、宜御教導被成下、且御執成ノ程奉願上候、以上、

慶應二年丙寅六月□日(マツ)

水口藩人

油川鍊三郎

信近 勅

遠武橋次様(秀臣)

一八四ノ二
前紙ニ副申

御尊藩ノ御方様弊壤へ御出向被成下、町奉行へ被仰下、重役へ御面会被成下、先年弊藩ヨリ建白仕候主意御尋被成下、且大義ヲ以御教諭被成下候ハ、内同志ノ者共ヨリモ、其機ニ乗シ議論仕候ハ、主人ヲ江戸ヨリ迎候策相立、万一紛乱ノ節ハ、一藩ノ力ヲ以東軍ノ通路ヲ扼シ、京師ヲ奉仰、万一

鳳輦動揺等ノ節ハ、尽身力度奉存候事、

御人数ノ御授ヲ相願、紛擾ノ機ニ投シ、主人ノ実弟房ノ助ヲ擁シ、家老加藤主計ニ迫リ、異論ノ者ヲ誅勅、膳城ニ望、村松父子ノ奸罪ヲ問、正義ノ士ヲ恢復仕、飯道山ニ抛リ通路ヲ拒申度事、

尤信楽ヨリ東ハ鈴鹿ヲ扼、日野八幡等ノ事諸事臨機応変候事、

同志申合一挙ニ膳城ニ望ミ、奸人ヲ誅シ、冤士ノ魂ヲ安シ、器械ヲ借り上京、

御尊邸へ参上仕度、

尤時宜ニ随ヒ、或ハ火ヲ大津ニ放チ、叡獄ニ抛リ可

申義モ可有之候事、

右ノ通愚案ノ趣申上候間、御取捨奉願上候、以上、

一八四ノ三
前紙ニ副申

家老

因 加藤主計

俗因 加藤多門

江戸在勤

奸才 毛利團右衛門

番頭

〔卷〕
以上

○ 岡田助右衛門

○ 用人 佃 極

○ 中村 栗翁

○ 愚 加藤 兵衛

家老

竹田街道在勤

愚 加藤 伊藏

用場見習

○ 菅 清太兵衛

異論 手島作之右衛門

藪 縫之助

△ 市橋次郎右衛門

町奉行

異論 井崎七右衛門

因 關屋 新

一八五 英国軍艦三艘来麿

丙寅六月十五日晴、夜英船三艘谷山北方七島辺へ碇泊、

此方ヨリ迎船ニテモ候哉、夕方ニ着舟ニテ一左右相知候、

但三艘ノ内一艘ハ白壁ノ軍艦ニテ、三段ニ大砲相備、

左右共七十二挺位此船ヘミニストル、アトミラル

乗候、カラハモ乗候儀、(朱)刑部殿長崎ヘ差越被居候

処、此舟ヨリ下人一人被召列被罷帰候、

一八六 〔長州再討拒絶ノ届書〕

慶應二年寅六月、長州御再討ニ付、小倉出張幕府

大監察ヨリ出兵ノ儀御掛合有之、当月浪華ニ於テ

御留守居木場傳内名前ヲ以テ被差出候、即今内外

危急ノ時節、防長御処置ノ儀、其当否ニ依リ皇国

ノ御興廢ニ相拘リ候云々ノ御書面ヘ、御添書ヲ以

テ御届ノ御書付、

別紙家来共ヨリ言上ノ趣、兼テ申聞置候趣意ニ御座候

処、既ニ長州ノ儀御請書不差出候節ハ、一同討入候様

被仰渡候趣承知仕候、御決定ノ上不容易御儀ト恐入候

得共、皇国ノ御大事ニ相拘、且名分条理不相立候テハ、

御請難仕儀兼テ確定ノ旨趣有之、別紙ニモ申上候通テ

大義難相済、不得止御断申上候間、宜敷御聞届被下候様相願候、以上、

寅六月

(朱)「松平修理大夫」

一八七 諸士祿高重出米課出諭達

重出米之儀ハ不容易訳柄ニ付、吃下不被仰付

御内慮之処、近々世態押移切迫之時機、イツレ海陸之御

軍備致宏張候儀、第一之御急務候処、近年京都守衛其外

海岸向御手当旁莫大之御入費ニテ、此期ニ至リ十分之

御宛行難被為務候付、無御抛当秋ヨリ八ヶ年之間、御城

下・外城共、且諸寺院給地高二相掛、定式外三升重出米

被仰付、御役料高之儀モ給地高同様重出米被仰付候、御

役料高被下等之面々ヘ御役料米被成下候向モ三割引被

仰付、其外御役料・御扶持米等ハ三割引之不及沙汰候、

尤諸士持高式拾石三升ツ、諸寺社高ハ都テ三升重ニ

テ、外城衆中持高并与力持高之儀ハ、五石以上重被仰

付候、左候テ右出米高ヲ以海軍兵士御扶持米等ニ被振

向、充分之御手当相整候様被仰付候、曾テ外御用之場

ヘハ、暫時タリ共取替候義無之様可遂吟味旨、分テ御

沙汰被為在候条厚奉汲受、聊等閑之取扱有之間敷候、
右ニ付テハ非常格別之御取縮被仰出候儀ハ、人々承知
之通ニテ、當時諸色無例之高貴ニ相及、難差關御入費
ニ付テモ近比不得止事、別テ御氣之毒ニ被思召候得共、
我々共ヨリ無抛奉願候、乍漸御許容被成下候時宜合、
一同困窮之折柄重出米被仰付テハ、ソレタケ所帯方不
繰合、可相成ハ案中之事候へ共万事省略相加へ、御
先代様ヨリ被仰出置候通、隱居・家督其外祝事等夫々
分限ニ相応シ、聊礼節ニ相叶候丈ケ相調へ、殊ニ御役
替又ハ着出立等之儀ハ、尚又一段手輕ニイタシ、身近
キ親類・朋友之情ヲ尽シ候儀共同断ニテ、此末上下弥
増困窮ニ相成、難立行訳ニ成立候ハ案中ニ候、就中京
都守衛モ多人数被差出、每家失費モ不少候得ハ、離盃
之場迄為相濟万端失費相省キ、當時勢御軍役之儀ハ、
身体ニ応シ、不行届候テハ不相叶事候間、右等之儀ハ
猶一涯嚴重ニ可相心得候、

重出米取納方之儀ハ、先年通之仕向ニ可準事、

右之通被仰出候条、此旨向々へ不洩様可致通達候、

六月

(准入式)
右衛門

道島家記抄

一八八 英国軍艦來麿ノ始末

丙寅六月十六日晴、七ツ時分前ノ濱へ着帆、互ニ空砲
打方有之、是軍艦入津ノ節ハ祝砲迎、互ニ打方礼式ニ
テ候由、

但直ニ六七人上陸イタシ新橋辺歩行、僕一郎ニモ見
候由、磯良英寺へ差越、見晴等別テ宜候間、余程
氣ニ入、其後モ折々差越ノ由、此六七人ハミニス
トル杯上官ノ者共ニテ候由、桂・小松付添ニテ候
由、其後跡ニテ承候得ハ、舟中樽陶敷ニ付、何方
ニテモ入津ノ節ハ互ニ上陸イタシ候由、左モ可有
之候、

一八九 英国軍艦碇泊中ノ説

一八九ノ一
丙寅六月十八日晴、磯ニテ御一門方杯御打寄、此節ハ
異国料理被下候ヤニ相聞得候へトモ、睨ト不相知候、
追テ可記事、

但今晚異舟一艘入津、都合四艘ニ相成候、ヨロツハ
 辺へ戦争相初リ候注進ノ由、是英國ノ属国ナラン、

一八九二

丙寅六月十七日晴、磯へ被招呼候、兼テモ客屋へ上陸
 ノ筈ニ候ヘトモ、夷人ヨリ相断候哉、俄ニ磯ニ相成候
 由、立派ニ手当有之候ヘトモ皆水ニナリ候由、九ツ半
 時分小鷹丸ヨリ西丸共ニ軍艦へ御乗付、対顔ニテ候由、
(采)〔太守公及ヒ久光公ヲ云〕
 御乗付有之ト直ニ大砲打立、凡ニ三十発モ打候半、我
(采)〔城山ヲ云〕
 々共ハ御殿ノ山へノボリ見物イタシ候、夷人惣テ出、
 帆ケタ杯へ乗居候間、不敬ノ事ト存候処、乗組ノ人数
 一人ニテモ隠レ忍フスルガ不敬ニテ、不残出ルカ礼式
 ノ由、暫間モ有之、磯ノ様ニ御出帆、国王ノ礼ヲ行ヒ
 候ト申事ニテ候、跡ヨリハツテーラニテ夷人モ差越、
 夕方罷帰候由、

但席順客居ノ方、通弁官ト小松立迎ヒシナラン、小
 松ハ御床ノ前ヨリ真下シニ通弁官ト立迎ヒシハ、
 其席ノ互ノ挨拶人ナラン、夫ヨリ二丸公・太守様・
 桂・川上・諏訪杯ナラン、カラハハ主居ノ方ニテ、
 主客共ニ二拾參人ニテ候由、給仕人ハ御小姓ニテ
 候由、御側役杯ハ此席へハ不出候由、格別ノ御馳

走ニテ吸物十三通、其外ニノ膳・三ノ膳数限リナ
 ク、日本料理ニテ此様結構成御馳走ニハ、世界ニ
 テ初テナリ、互ニ新聞書ニモ可出候間、献立書相
 望候由、吸物ニテモ何品ニテモ、出ルト直ニ手ヲ
 差込鼻ニテ嗅キ、タベリヤ悪シキモノハ口ニ入テ
 モ、其次ノモノニ吐出シ候由、猿ノ生質ニ能ク似
 テ、梨子其外桃殊ノ外賞翫ニ相見得、ナシハ皮共
 ニ真モ不残タベ候由、

一九〇 英艦ニ於テ操練

丙寅六月十九日晴、四ツ時分 太守様・二丸公并御子
 様方小鷹丸等ヨリ軍艦へ御乗付、大砲打方御覧、標的
 ハ凡一里位ノ見当ナラン、軍艦ヨリ大概百四五十発モ
 打出、段々手数ノ打方ニテ、実ニ砲勢ノ烈シキ、人皆
 感心致候、昨晚差入候舟ヨリ二三十発モ打出候、八ツ
 時分ニ相済候、
 公杯御立舟へ御乗付、直ニ楽ヲ奏シ、其国王ノ楽ヲイ
 タシ候由、楽ノ音声我々共カ耳ニハジヤレフシノ様ニ
 相聞得候、

但拙者共ニハ、同席中四ツ過ヨリ御泊宿へ差越、見物イタシ、後向ニテ能不相分候、帰ニハ御舟丸木ヨリ下町石燈籠下へ上リ、夷人ヲ初テ見候、生大嫌スいの方言カン物共ニテ候、夕方ニハ西田橋辺へ夷人差越居、女モ参リ居候由、ミニストルカ妻ニテ候由、見物人群集ニテ候へトモ、ナニトモオモハン体ニテ候由、川端ヲ通り、二本松馬場へ出候テ帰候由、此女生レ付余程宜、目鼻モ夷人ノ様ニハ無之、決テ日本人ナラントノ評判モ有之候、

一九一 英国人訓練

丙寅六月廿日夕立、今朝六ツ時分ヨリ雨相催雷鳴、五ツ過ヨリ雨降出、四ツ過ニハ雨止ミ候、磯ニテ英人陸軍ノ訓練御望ニ有之、両公七ツ時分小鷹丸ニテ御越、英人トモハハツテラヨリ上陸、両三人ニテ目印ヲ立、戦兵ハ舟ヨリ上ルト直ニ行軍、寔ニ無造作ニ訓練初リ、夜入前迄無間断其内中ニテ一度水ヲ吞泡盛ヲ交候テ被出候由、段々手数モ多ク有之、大砲ニ挺押立、退軍ノ姿モ有之、其節ハ大砲ヲ取クヤシ引取候所作杯、余程見所有之ヲ

ル由、訓練ノ内ニ音楽ヲモ奏シ、此誠ニ面白ク相聞得候由、其規則正シク、人皆感心イタシ候由、

但英人差越ノ噂、五月初方ヨリ申触候、天保山ニテ訓練可有之トテ、殊ノ外丈夫ニ囲杯モ出来、地形モ平面ニ拵方有之、御納戸布屋迄モ、惣テ御作事方へ引渡、折田要蔵掛年透ニテ手当モ有之候処、英人十七八日比石燈籠ヨリ上リ、谷山海道ヨリ砂揚場へ差越、地理ヲ見候由、其節ハ組頭初メ御軍賦役・横目杯、前後ニ多ク付添被差越候処、道法遠ク戦兵可相勞込、俄ニ二隊ニ相成候由、是モ不入物入ニテ、過分ノ入価ニ相成候、

一 英船三艘ハ今晚夜入時分出帆、ミニストル杯帰候半、是ヨロツパ州ノ内へ戦争相初リシ注進ノ故ナラン、白壁一艘残り候事、

一九二 英艦事件

丙寅六月廿二日晴、今日七ツ時分白壁舟ニ帆来候、廿六日迄ハ滞在ノ筈候処、俄ニ引取候事、イヨク戦争ノ故ナランカ、委クハ不相分候、何分夷人ノ形勢不相

分候事、

一九三 英人云々

去ル十七日英人 大中公ノ御庭前迄差越候由、此朝南

林寺中路ノ右側ノ松ノ枝、風ノ吹ヌニユツサリ、柳
キ、松モ殊ノ外高ク、下ヲ通ル人氣相付程ノ事ニテ、
是ハ不思議ナリト菓丸(地名)殿小路ノ〔マ〕吾等通りカ、リ見
ラレ、帰リニハ松ノ枝折レ落チ、墓中ニ候エトモ、ハ
カハ格別不痛、廿三日ニ拙者ニモ序ナカラ態々見ニ差
越候、梢ヨリニ番目ノ枝ニテ相成太キ枝、何トモ不
思議ナル事ニ候、

但又ノ説ニハ 大中公へ可差越ト夷人申事ニテ、案
内ノモノ列越候処、遙ニ 大中公ヲ見候処、何カ
不審カシク立帰り候付、最早ソコナリサ行カフト
申候得ハ、中々先へ不被行立帰り候テ不差越由、
左モ可有之候半ト相考候、

一九三ノ一
ミニストル前以ヨリ挨拶ニ 太守公へ対顔不致内ニ
ハ、何ヲ給候テモ頂戴不致、是礼式ナリト堅ク申入候

由、夫等ノ事ニテ、モハヤ十六日ノ夜半迄家老衆ミニ
ストルト演説被致候へトモ、中々承引不致、兎角御対
顔不致内ニハ、甚失礼ニ相成候故ト申募候付、無致方
彼カ舟中ニ御差越、御対顔被成候筋ニ相成候由、ケ様
ノ儀ハ前以ヨリ公論可有之筈候処、差掛此事ニ相成候
テハ彼カ術中ニ陥リ、機節ヲ失フ場ニ相成、皆切齒ヲ
含居候、

但拙者右様ノ儀ヲ承候付、〔巻〕二丸公ナラハ可被宜ト申
入候得ハ、其事ハ氣カ付タル由ニ候へトモ、二丸
公ニテハ合点不致候由、是ニテ猶又彼カ心術オモ
イ当リ候、磯ニテ御対顔ナラハ、何ノ訳モ有之マ
シク候へトモ、夷舟へ御差越被成候テノ御対顔ハ、
未練ノ至、天下ノ議論ニ可相成候半、

一九三ノ三
去ル亥年戦争復和儀相成候得共、本式和睦ノ式不相行
候間、此節和睦ノ礼式ニ差越トノ噂ニテ候事、

但左様ナラハ、猶更御対顔ノ儀重キ事ニ付、天下ノ
議論ニ不相成様ノ御所置第一ニ候、磯ニテ御対顔
相成候テ天下ノ議論ニモ相成マシク、夷舟へ御越
御対顔ニ付テハ、闇ニ彼カ術中ニ陥リ玉ヒ候半カ、

勿論英夷ノ旗印ヲ此方ヘ送り候儀、和降ヲ差免候

彼カ心術モ又シルヘカラス、

一九三ノ四

一昨年攝海開港稍相片付、諸侯方一円合点イタシ候処、

此御方鎖港ノ御建白ニ付、終ニ商館ヲ建ル事不能、此事ハ其時分ヨリ噂有之、合衆国ノ者共殊ノ外立腹イタシ、薩州何故鎖港イタシ候哉、兵舟ヲ可遣抔ト色々評判有之、此事ハ幕府彼ニ相洩シ、可惡ノ至ナリト申入モ段々有之候得共、幕府ハ左様成後難可相成事ハ、決テ洩シマシク候得ハ、蘭学者共忌テ、彼カ問ニ相成居候者共多カラン、此モノ共カ洩シタルニテ可有之、然ル此節何様ノ訳ニテ鎖港ノ御建白被成候ヤト、ミニストルヨリ頻ニ相尋候処、小松・西郷眞サニ申分ケイタシ候得共、一円不聞入、段々ト理屈ヲ詰候テ、一言モ不出来体ヲ見受モノ、夫ナレハヨシト手ニテ背ヲ撫テ、夫ヨリ殊ノ外平和ニ相成、夫レハ威儀嚴然タルノ由、此所深く聞様アルヘシ、

但ケ様成事ハ国家ノ大事ニ付、一兩人ニテ事ヲ図ル

ヘカラス、イカナル国辱ヲ受ルモ知ルヘカラス、

此応接実以其通ノ事ナラハ、決テ新聞書ニ可出、

其時明白ニ可相分候、

又一説ニ、此事ヲミニストル西郷ヘ相尋候処、一々明弁イタシ候処、聞度ニ左様ニ候ヤ、イツレ一方ノ言計承候テハ疑惑モ難解、兎角応接不致候テハ、理非ハ難分ト、何事モ納得イタシ、此上ハ疑ヒ無之ト、余程感心イタシ候由トイフ人アリ、予曰、夫モ尤ナリ、鎖港ノ儀モ、此方ヘ道理アリテコソ建白モ為有之筈ニ付、其処ヲ能弁セラレ候ハ、彼モ何分納得可致、シカシミニストル一人ニテ相決スル訳ハ如何可有之哉、其方鎖港ノ一条モ尤ナレトモ、各国ヘ能申諭候上、何分可申遣旨申入候筋当然タルヘシ、兎角ケ様ノ会盟ハ一人ニテ議スヘカラス、夫々後來ノ龜鑑トモナルヘシ、故ニ此一事トモ実事ニテハオモハサルナリ、

一磯ニテミニストル二丸公ヘ向ヒ、此節征府ト長州ト喧嘩相初リ候由、イツレカ勝利ヲ得ルト被思候哉ト相尋候処、其御方ハ何ト可被致ヤト被答候処、マツ其御方ノ思召ヲ承度ト申候得共、是程ニ其御方ノ考ヲト被申候付、私カ考ニハ、双方共ニ勝負ハ有御座マシク、日本ノ小国ニテ勝負カ付クハ相濟申マシクト申候得ハ、

二丸公何共不被申笑ヒ被居候由、

但予是ヲオモフニ、英人カ視ル所ニ異ナリ、如何ト

ナレハ、幕・長ノ争ヒ双方共ニ無名ノ争ヒナレド

モ、兎角 勅命ヲ蒙リシ將軍ナレハ、幕府ノ命ヲ

受ケサルノ理ナシ、左候得ハ長州無名ニシテ違勅

トモイフヘシ、天理ニ戻ルノ人情、終ニ滅亡スベ

シ、仮令一旦ノ鋒先ハ強クトモ、天何ソ是ヲ罰セ

ン、悉ヨク長州終ニ滅スベシ、

一此方ヨリ被下品、前以ヨリ御数寄屋等ノ器物取出、段

々見分有之候処、寔ニ結構ノ品々ニテ、金屏風・料紙

箱・草階盆・硯石箱等数品ノ由、委クハ不相分候、イ

ツレモ金銀ヲチリハメタル結構ノ品々ニテ候由、

一諸家ヨリノ進上物ハ何モ不相分候、跡ヨリ進上可致ト

ノ事ニ延置候ヤニ評判有之候、又一説ニ、此御礼ニ其

節差越候舟一艘、何モ居付候似可差上トノ評判モ有之

候、

(島津忠鑑)(島津久徳)

一重富・宮之城兩人モ、鉄砲一挺ヲ十七日調練ニテ差上

候ヤニ相見得候由、

一此節掛ノ三有司松崎一郎ヘ文面モ、大夫ヘ三百両モ差送候

ヤニ評判有之候、

一西洋ノ器物数限りナク、下ノ浜大夫有志ノ立宿ヘ夷舟

ヨリ相運候由、其内殊ノ外重キ品モ有之、定テ込ナラ

ント為申候由、夜中故格別不目立故評判モ無之候、

一此節ノ諸雜費凡三万両位ニモ相及候半ト、松岡存ノ由

前以ヨリノ手当ヲ考レハ、其位ニテハキケマシク候半、

(朱)(魁)
一庭鳥三千羽 一玉子五万余 一豚三十疋位

一ナシ 一桃類 一山桃

右前以ヨリ御春屋ヘ手当有之、庭鳥并玉子ハ、諸郷ヨ

リ寄物ニ付、殊ノ外ノ物入ナラン、

但五月末方ヨリノ手当ニ付、多クハクサレ落鳥等ニ

相成候半、山桃杯ハ皆相痛候、惣テ損失ニ相成候

由、松岡直八ヨリ承候付、夫ハ売上人ノ損ナラン

ヤト申候ヘトモ、其山桃ノ損所ニテハ無之、此節

ノ売出人殊ノ外難有候由申事ニテ候、

七月廿五六日方庭鳥千羽入札為有之由、一羽七百

四十八文ニテ落札ニ相成、惣テ下町人入札イタシ

候ヤニ承候事、

一初テ逢候挨拶ニテ、互ニ手ト手ヲ取合候事、男女共ニ

同シ礼式ニテ候由、下賤ノモノハ頭ヲ撫ル法ナラン、

但太守公ノ手ヲミニストル取り、公頭ヲ傾ケ玉ヒ

シ体ヲ写真鏡ニテ取候、其図ヲ長崎辺路頭ニ捨有之候ヲ見候由、寔ニ遺憾ノ至ニ候、

一或寄合ノ新妻、良英寺ニ見物ニ被差越居候ヲ夷人見染メ、自分ノ金ノ小ハシ杯ヲ引チキリ差送候ヲ被相売候由、其夷人ノ体ヲ写真鏡ニテ取候由、外ニモ段々取候テ売候人多ク候由、

一英人磯ニテ胡服ヲ着シタル者ヲ視テ、何様ノ訳ニテ西洋ノ服ヲ相用候ヤ、我國ニテハ左様ニ他ノ国ノ服ヲ相用ルトイフ事ハ、決テ無之ト再三為申候由、

一上瀬種ヲ視テ、是ハ何様ノ訳ニテケ様ニ候ヤ、此洋中ニ何ノ位ノ台場ヲ築立候カ、何ノ用ニ立モノカト物笑ヒイタシ候由、

一当分儉約中ノ事ニ候ヘトモ、此節夷人差越候付テハ、別段ノ事ニ候間、町家ノ女共立派ニ粧ヒ立、ケ様前以ヨリ申渡相成候由、勿論石燈爐通ノ辺ハ店杯モフキ立、金屏風杯ニテモ飾立候様被達候由、不入貧者マノキサン立テニアラスヤ、

一九四 〔英国軍艦渡来ニ付〕

此節英国軍艦渡来ニ付テハ、水師提督并公使乗組居、近日ノ内磯御茶屋江モ被召呼候ニ付テハ、

御而殿様深キ 思召之訳被為 在、態々被召呼候儀ニ有之、時宜ニ依リテハ乗組兵隊上陸調練被付

御覽可被遊、又ハ諸所見物ヲモ被差許儀モ可有之候ニ付、若年之者共粗忽之儀共万一有之候テハ、決テ不相濟候條、親兄弟又ハ身近キ親類等ヨリ不行儀共無之様嚴敷申聞、御受書可為差出候、其上ナカラ若不行儀共有之候ハ、其身ハ勿論親兄弟身近キ者迄モ、屹ト可及迷惑候、此旨銘々組頭ヨリ厚ク可申渡候、

但調練之節ハ見物致候儀ハ不苦候、

六月 日 喜入 攝津公高

右書面ヲ以テ各組頭宅へ父兄等召喚演達シ、受書出サシメタリ、斯ク至念ヲ加ヘタルハ、昨年戦争以来士風奮興、再来セハ一撃粉碎セントノ勢ナルカ故、深謀遠慮ハ素ヨリ、外泄スヘキニ非ラサレハ、忿激競起ノ人心鎮静センニハ、国老等甚タ憂慮セリ、

如此英国軍艦来港ノ所以ハ、昨癸亥七月生麥事件ニ付テ戦争ニ及ヒ、数艦ヲ艦ヒ渡来蔑視恐嚇、刺へ我カ汽船ヲ奪ヒタルニ因リ、止ムコトヲ得ス砲発争闘ニ及ヒ

シニ、彼初メノ驕言ニ似ス戦ヲ止メ、倉皇退去シタルハ、敗走ト謂フニ外ナシ、我ハ一挙捷ヲ得、再来セハ粉碎セント上下益々奮興セリ、然リ雖モ^(下脱カ)當時長藩割拠^(ト脱カ)為スコトアラントスルノ際、特ニ

輩下ニ迫ルノ形勢モアリ、或ハ各藩ハ首鼠兩端風候ヲ候ヒ、分崩離折形ニ顯ハレタルカ故、内外一時ノ艱難目前ニ迫レルカ故、先ツ内部ノ禍根ヲ断チ、然シテ後外ヲ治ムル順序ヲ取ランニハ、目下外難ヲ緩メンニ若シト遠ク慮リ玉ヒ、一時ノ捷モ則チ捷ナリ、和シテ而シテ国力ヲ強フシ、機械ヲ精フシテ後大ニ為スヲ良策ト思考セラレ、江戸在邸国老岩下佐次右衛門^方ニ命セラレ、副フルニ高崎猪太郎^{旧名}・重野厚之丞^安及佐土原藩士能勢次郎^(直隸)左衛門等ヲ以テシ、幕役ニ謀リ、調和償金ヲモ我カ藩名ヲ以テ幕府ノ払フ処トナレリ^{詳ニ癸亥十二月第廿三卷ニ}配、然リ而シテ計画ノ如ク内ヲ治ンカ為メ、国父公ハ戦争後国事多端ナルヲモ顧ミ玉ハス、癸亥十二月上洛セラレ、

朝廷へ献言セラル、旨アリ、則チ將軍家上洛ヲ促シ玉ヒ、其他大小侯ヲ會シ公議ヲ尽サレ、与論ノ定ル処ニ拠リ長藩ノ不逞ヲ匡シ、政体帰一、公武合体、上下一

致、尊王ノ道ヲ更立シ、辺防充備ノ策ヲ定メ、武備拡張ノ緒ヲ立ラレタリ、茲ヲ以テ藩内ニ於テハ、昨年来着手セラレタル神瀨砲墩ノ修築、其他大小砲器ノ製造一層力ヲ尽シ玉ヒ、或ハ洋人ニ就テ大小砲銃ヲ誂へ、或ハ軍艦購求等盛ニ手ヲ下サレケルニ、英人此事ヲ聞キ、再ヒ戦端ヲ開クノ準備ト臆度シ、或日江戸ニ於テ英國公使岩下ニ面晤ヲ請ヘリ、岩下ハ躊躇セス面接セシニ^{芝藩邸ニ於テ面晤ス、當時天下ノ形勢擾攘ノ論議々タル際ニシテ、藩邸ニ外人ヲ召喚スルハ是ヲ初メトス、君之ヲ躊躇疑スルトキハ適々謀ル断然召喚セントナン(岩下親啓)}

公使曰ク、昨冬調和ノ後鹿兒島ニ於テハ砲台ヲ築キ、大砲ヲ鑄造シ、或ハ米佛・蘭ニ囑託シテ兵器ヲ購フト、之レ果シテ再ヒ戦ハンノ予備タルヤ、言ヲ俟タス、再ヒ戦ハンニハ其理由何等ノ事ヲ以テスルヤ、岩下曰、砲台ヲ築キ大小砲ヲ製造シ、或ハ外国ニ購求スル、素ヨリ聞ク処ノ如シ、然リト雖モ貴国ト再ヒ戦ハン為ニ非ラス、今ヤ日本外国交際五六ヶ国ニ及ヘリ、此等ノ各国ト交通スルニ於テハ、不慮ノ備左モナクンハアルベカラス、茲ヲ以テ予メ備ルル処タリ、敢テ貴国ト再戦ノ意ニ非ラス、今ヤ貴国ト戦フヘキノ隙ナシ、必ス疑フコト勿レ、公使曰ク、其言ノ如クナレハ理ノ存スル

処ナリ、疑ヲ解クヘシト雖モ、調和ノ後未鹿兒島ニ行キタルコトナシ、親睦ヲ表センカ為メ鹿兒島ニ到リ、君公ニ見ヘテ親ヲ頭ハサン、是レ交際ノ要点ナリ、岩下曰ク、必ス行テ懇親ヲ表セヨ、敢テ妨ナシ、公使曰、然ラハ不日横濱碇泊ノ軍艦一二艘ヲ廻ラスヘシト云テ、稍水解セシカ如シ、此時岩下言下ニ答詞セサルヲ得サルノ機ナルカ故、直チニ行クヘキヲ勸告セリ、其形況不日廻艦ノ勢ナリシヲ以テ、即日這ノ事情ノ報告海陸二途ニ発シタリ、当時鹿兒島ノ人氣大ニ振興、昨夏ノ戦ニ一艦ヲモ撃沈セサリシヲ遺憾トシ、再ヒ来寇セハ粉碎セント、鬪藩競奮ノ時ナルカ故、卒然廻艦セハ必ス大事ニ及ハンコトヲ憂ヒ、次日又重ネテ海陸両途ノ報、及ヒ懇遇アラシキコトヲ勸告セリ、然ルニ英艦モ直チニ発セス、三十余日ノ後ニ廻艦セリ、此時ハ鹿兒島ノ廻答モ来リ、岩下力冀望ノ如ク懇遇 謁見モ允サルヘキニ決セラレ、其準備整ヒタリトノ報ヲ得テ頗ル安ンシタリトナン、此時鹿兒島ニ於テハ、昨夏戦争、尔来砲台ノ修造・器械ノ製造日夜汲々、人心大ニ振起、再来ヲ待ツノ際ナルカ故、大ニ杞憂セラレ、上文ノ如キ諭告ヲ布キ、加之壮年ノ輩ニハ、其父兄ニ就テ輕拳

妄動スルコト勿レト懇諭シ、而シテ父兄ヨリ循奉スヘキ旨ノ受書ヲモ出サシメタリ、然リ而シテ 六月十六日 月 日予期ノ如ク軍艦来港セシカハ、予テ命シタル接待ノ吏員乗艦懇遇シ、客屋ニ上陸セシメ、国老其他大小ノ吏員面接懇待シ、其次日 太守公ハ磯仙巖ノ別邸ニ臨ミ玉ヒ、謁見ヲ允サレタリ、此日英艦ヨリ大小砲銃隊ヲ仙巖邸前ニ上陸セシメ、演習シテ 尊覽ニ備タリ 大小砲銃隊ノ運動 及ヒ奏楽ヲ式食大親視シタル之ヲ初メトス 此日ハ一般從覽ヲモ允サレ、頗ル莊觀ナリ、然ルニ諭達ノ如ク、少年ノ輩モ循守シテ、敢テ異状ナク、穩静ニシテ觀覽セルニハ、英人モ大ニ感賞ノ言ヲ述タリト云フ、国老其他吏員ハ大ニ杞憂シ心ヲ用ヒシニ、豈ニ料ラン静々瀟々タリシニハ、意外ノコトナリシト云フ 從覽允サレタルハ、藩庁ニ於テ厚ク議スル処アリ、若シ之ヲ制止スルトキハ、少壯ノ輩却テ忿ル処アリ、寧ロ允シテ從觀セシメ、而シテ警備ヲ嚴ニセシニ若シトノ議ニ出タリト云フ ○此日彼ノ大小砲隊伍ノ運動、或ハ勝敗進退ノ形様、或ハ砲車解散ノ式、或ハ負傷者看護等、実場ノ形状ヲ為シタルニハ、我カ少壯ノ輩モ頗ル感スル処トナリ、兵制ハ洋法ナラサルヘカラス、器械モ洋式ナラサルヘカラスト覺悟シタリ、是ヨリシテ兵器器械沿革ノ緒ニ就キタリ、実ニ這ノ戦ハ今ニシテ大ニ我ニ益スル処アリ、曰ク、人心奮興、姑息

ノ情ヲ離レ、眼界ヲ張抃セリ、曰ク、器械精シカラサルヘカラス、弘ク宇内ニ求メテ宜キヲ採ラサルヘカラスト、曰ク、外ニ和シ而シテ内ヲ治メ、

皇意ヲ寧セント一致協心、方向定マレリ、茲ヲ以テ大ニ国家ニ益アリ、敢テ損耗ナシト謂フ所以ナリ、然ルヲ況ンヤ彼レ敗走シタルニ於テヲヤ、○又其次日ハ府内各所ノ遊覽ヲモ允サレ、吏員誘導ス、先ツ淨光明寺ノ燒跡ニ至リ、眺望ヲ賞シ、或ハ各所ノ砲台ヲ見テ結構法ニ適ヘルニ驚キ、且昨年ノ戦争互ノ困辛ヲ語ラヒ、或ハ神瀬ノ砲台落成セハ犯スヘカラサルヲ賞シ、或ハ我カ汽船ノ沈没、桅檣ノ水上ニ顯レタルヲ見、慙色ヲ見ハシ、或ハ彼ノ戰没者ヲ悲ム等ノ感アリト云フ、○千七百日ハ磯山中猪鹿ノ狩ヲ允サレ、我カ吏員ト俱ニ山ニ入り、国風ヲ以テ追ヒ、獲収數頭ニ及ヒタリ、此等ノ事ヲ以テ頗ル怡悦、欲待ノ厚キニ感シ、加之上下一般毫モ忿惡怒恨ノ色ナキニハ、最モ感シタリトナン岩下ハ江戶ニ在テ廻艦ノ報ヲ聞キ、少壯ノ輩如何ノノ拳動、ニ及ハント頗ル杞憂シタリトナン、岩下親話、○如此忍耐セラレ、旧惡ヲ想ハレス懇邁ヲ尽サシメ玉フモ、全ク内ヲ治メ皇威ヲ輝、

敕旨ヲ安ンセラレンノ一点ニアリ、是ヨリ闔藩上下ト

ナク方向ヲ一ニシ、速ニ長賊ヲ討征シ、内政整正皇意安泰ヲ竭力スルニ帰シタリ、

一九五 軍事心得達書

御足場左ノ通

一陸軍兵士

右陸軍所へ可相集候、

一海軍兵士

右海軍所へ可相集候、

一產物受物(持丸)ノ面々夫々持場へ可相集候、

一持場無之面々ハ其勤場へ右同断、

一無役ノ面々、下方限り御城下供屋へ、組々不入交様相

集、上方限り種子島彈正屋敷辺へ、前条同断可相集候、

一御兵具方与力ノ儀ハ、御木屋馬場へ可相集候、

一一番早鐘軍粧ノ用意、

一 二番早鐘ニテ早々持場へ、

右相集ベク候、已上、

一九六 御親書ヲ以テ天下ノ形勢ヲ示サル

家老中へ

天下ノ形勢紛々擾々タル姿ニテ立列、慷慨悲歎ニタハ
ス候折柄、当春越前・土州・宇和島三藩へ深ク申談、
朝廷ハ勿論幕府へモ人事限建白仕候得共、御採用ノ儀
無之、唯吞声涕淚ノ外無他候処、豈計ンヤ我等趣意、
勿体ナクモ於京師無名ノ干戈ヲ以テ、討幕ノ挙動相催
候儀ニ心得違ヒ、議論区々末ニ至リテハ有之哉ニ候、
甚以意外千万ノ至ニ、今度又々出兵相違候テハ、長州
末家ノ者浪華迄御召呼被 仰出候付、如何様變動相生
シ候モ難計候間、 禁闕為御警衛右式ニ相及次第候、
万一非常相生候節ハ、 上奉安 叡慮、下万民ノ騷動
ヲ鎮静シ、聊卒尔ノ働無之様、京都詰重役共へモ申聞
置候間、此旨宜シク相心得、諸士へモ右ノ趣意貫徹候
様可取計事、

慶應2年(1866)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年七月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数)一九枚〕の記載あり

目録

- 中路権右衛門報告
- 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 別府壯右衛門届書
- 池尻茂左衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 井上彦一ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
- 道嶋家記抄

当時京都雜報中路権右衛門報告

非常節儉ニ就キ達書

西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰

道島家記抄鹿兒島事情

〔諸藩去就〕

伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

長防士民ノ嘆願書

〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔道島家記抄〕

〔長防士民諸藩へ嘆願〕

長防征討出兵御断最後ノ上申木場伝内

薩藩ヨリ會藩江文通ノ写

伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通外二名へ書翰〕

〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

小倉戦況聞書

治乱ノ政務大改革調

前之濱へ英国船襲来後ノ手当

軍役知行高改革

御建白ノ手続薩州建言

中路權右衛門報告京都及ヒ江戸ノ雜報

茂久・久光ニ公御連署御建言

薩藩出兵御断書へ御付札写

〔大坂出銀ニツイテ一説〕

〔町田等帰国ニツイテ〕

〔西洋学問制度ニ関スル仰出〕

英国公使鹿兒島ニ来ル

島津圖書御家老同様云々達書

薩州建白奉呈ノ手続

〔薩州建言書ニ就キ會津藩照会書写

寅七月薩州侯ヨリ被差出届書写

巷説

禁闕守衛兵差登御賞詞

〔小笠原壹岐長崎差越ニ云々〕

当時京師ノ世説

防長士民ヨリ薩州及ヒ藝州ノ両藩へ差出タル書面

一九七 中路權右衛門報告

筑前侯御直達

此節 公武真之御和合被成御整候段ハ、

皇国永久御安全之御基本、無此上恐悦至極ニ奉存候、

然ルニ近年諸国形勢ニヨリ、浮浪流言離間之説不少、

人心不和ニ乗シ分外之説申立候者ヲ、

皇国ノ御為ト相心得、同氣相集リ、党ヲ結ヒ、出会ニ

至リ、或ハ密々他藩へ通シ主張シ、又ハ流言ヲ以テ衆

人ヲ驚怖為致之類、以之外ニ存候、我等不肖ニ候得共、

御両君様御規則ヲ守、公平正大ヲ以テ国政執行候ニ付、

右様之輩於有之ハ、無用捨嚴重ニ可申付間、此段相心

得、組中入念教導可致事、

此兩人咎メ退役之由、

黒田播磨〔一事〕

矢野相摸〔幸甚〕

齊藤五六郎〔定法〕

衣非茂記〔直正〕

建部武彦〔自強〕

河合茂山〔勝文〕

右咎メ被申付、此外士分十一人以下合四十余人、尚

追々党類出来可申ト之事、

一大坂表ニテモ無異儀、長州ヨリモ(完巻)毛利(經勢)・吉川上坂之儀

モ答無之、依テハ御進發御足揃トシテ、昨廿九日御先

手勢紀州様御城之南手講武所ニテ、御惣督初御勢揃御

座候、凡此人数一万五千、其外供人凡一万人計、旗差
物等誠ニ美々シキ事ニ御座候、

一昨年来大坂之町人長州へ出入致候者、諸商人ニ至ル迄
入牢仕候者多数有之、其外宿下ケニテ町預ケ等ニ相成
候処、此節此者等追放又ハ遠島ニ相成、其外長州賄方
等致候、

鴻喜

加治久

鴻市

高作

尚此外三四軒

追放代リ一軒前ニ四千両・五千両ツ、御用金相掛リ申

候、

七月朔日

右書付伝写致候ニ付入御覽申候、已上、

(延等)
中路権右衛門

(政風)
内田仲之助様

(友巻)
吉井幸輔様

追々入御覽候書面ト齟齬之廉モ相見得候へ共、前後

混雜之次第ト有之俣写取申上候、此段御賢察可被下

候、

一九八 伊地知壮之丞ヨリ大久保一藏へ書翰

大久保一藏殿

(直書)
伊地知壮之丞

尚々、表封殿之字御免可被下候、

御両三君毎日の御心配奉察候、乍不及小子共ニも死力

ヲ以奉尽度奉存事ニ御座候、乍恐

御両殿様之御配慮奉拝察事ニ御座候、偕和戦之儀ニ付

御議論申上候通、最初小子ニハ大小軽重ヲ量ル賦ニテ、

拙考文一盃奉献言候義ニテ、既ニ

御決断相成候上ハ無申迄、

命ニ依必死ニ致周遷候義当然ニテ、毫も遺憾之義有之

訳ニ無御座候、然処一戦以來一言要路辺江致献言候て

も、御聞取相成事すら六ヶ敷、徒ニ愚慮ヲ蓄迄ニテ御

座候、早御一戦相成候上ハ無申迄、如何成御事御座候

ても、英と一和之義別て不宜義ニ御座候間、英賊御誅戮之御策略相立度、然ルニ近日之御達向人心ニ不落事のミにて、一戦之日より諸役場之紛議、諸士之憤言甚敷模様ニ御座候、尤拙者心ニ不落事共多々御座候、右之次第且愚慮申上度十分之存念ニ御座候得共、却て事ヲ害スル迄にて、事ニ無益拜謁ヲ奉願上、御直ニ奉獻言歎、上書いたし候歎、両様之間とも奉存候得共、是迄御両三君江御議論、御直ニ申上候義にて、直様君上ニ奉申上候処心ニ不安、且内場混乱之憂ヲ懼れ、夫とて黙々いたし居候ハ

君臣之分御国家ニ奉対不相濟、熟慮之上貴君迄小子苦情之次第申上候、拙慮御聞取被下候御存慮ニ候ハ、今日中ニも御都合為御知被下度、何分御酬奉待候、以上、

安久三年
亥七月八日

大久保一蔵様

伊地知壯之丞〔貞勝〕

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

一九九 木場傳内ヨリ大久保一蔵へ書翰

一蔵様

傳内木場〔清生〕

用事

唯今町年寄参り候テノ咄ニハ、フランス船二艘ノ由、尤事柄ハ全ク不相分、英人乗込居候儀モ相分リ不申、江戸一揆神奈川横濱へ押寄スルトノ風聞故、右之事ニ参リタルニハ可有之トノ趣ニモ候ヘトモ、下筋ヨリ塚原氏〔本一但馬守〕乗込ニ付テハ、此説ハ余ホド遠ク被考申候、此ヨシ申上候、以上、

七月三日

二〇〇 別府壯右衛門届書

小倉領田之浦・門司浦戦争之次第ハ勿論、藝州口・石州之儀ハ、去月十四日比ヨリ同拾七日比近、〔遠カ〕同断及戦争聞得有之承得候、同廿四日申上置候通、田之浦・門司浦之戦小倉之人数及敗走、大里迄立退、滞陣イタシ居候処、昨四日晝七ツ時分長州勢大里へ押寄及戦争、小倉勢及敗走、同所之儀出火ニテ焼失イタシ候段相聞得、細々聞合候処、一昨三日九ツ時分、長州奇兵隊并報国隊都合三拾人位、小早船ヨリ門司浦ヨリ押渡潜居〔慶〕イタシ、然ニ去月廿七日幕府蒸気船三船、小倉沖へ廻

船相成、右之内富士山ト申軍艦老艘有之、右打崩、其上大里へ責入目論（見九）之由ニテ、昨四日晝七ツ時分、下之關ヨリ小早船へ大砲三挺為乗付、奇兵隊之内六七人位乗組、右軍艦ヨリ七八間位漕寄候処、何方ニテ候哉相咎候由ニテ、筑前石炭積船ト相偽リ、同前乗付有之候大砲三挺一同致砲發候処、右軍艦ヨリモ小銃射掛候由ニテ、大早船ハ其俣乗捨、橋船へ飛乗、彦島へ上陸イタシ、右ヲ相凶ニシテ、同島台場ヨリ大里へ砲發イタシ、双方ヨリ打合候、幕前件通門司浦へ潜居イタシ候処、奇兵隊并報国隊之人数ニ手ニ分レ、一手ハ往還筋ヨリ小銃ヲ以責掛、一手ハ門司浦ヨリ間道ヲ廻リ、大里裏手へ押寄、朝五ツ時分迄及防戦候処、終ニハ小倉勢敗イタシ、半里計リ追討イタシ、大里へハ火ヲ掛、都テ焼払、尤幕府蒸氣船モ大里近辺迄乗來候処、長州蒸氣船式艘彦島山陰へ繫舟為砲發、幕府等モ拾發同断之由候得共、玉壱ツモ船ニ不当、長州蒸氣船ヨリ打出候砲丸四五發位、幕船へ相当候処、夫形小倉ノ方へ乗帰候、海軍ハ夫迄ニテ、陸戦ノ儀（ハ九）ニ稍三時計ニ相及、長州之儀ハ戦死六七人、手負拾壱人之由、小倉勢手負戦死都（見九）三拾人余有之、其上及敗走候故、野戦砲拾挺余

營所故（マ）之由、尤小倉迄是非責入賦之由候得共、右通大里之戦ハ兵士相勞、昨日ハ取止候向ニ相聞得申候、藝州口之儀、井神・榊原其外幕府之人数ハ勿論、紀州并豫州松山・讃州高松之勢押寄、一緒ニ相成、去月九日同廿五日迄之間、追々及戰爭タル由候得共、防戦嚴敷、当分藝州之内四十八坂ヲ中ニシテ、長兵ト国境ヨリ七里計リ有之由、藝州之内小瀧ト申所へ致滞陣、寄手ハ玖波・廿日市・廣島迄屯集イタシ居候由、且石州口之儀ハ益田ト申所迄長兵責入、寄手敗軍之向ニテ、石州濱田之城モ不日ニ責落之勢ヒニ有之由、下之儀ハ前件之通ニテ、決テ近日中ニハ小倉へ押寄及戰爭候由候、無別条候、筑後久留米之人数都合千式三百人位ニテ致出兵居候得共、十分之戦ハ迎モイタシ間敷向ニ取沙汰イタシ候、当分ノ形勢ニテハ、小倉之城モ別テ危キ形相見得申候、

筑前若松滞在

唐物縮横目

寅七月五日

生産方掛

別府壯右衛門

御裁許掛

二〇一 池尻茂左衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

薩州御屋敷

筑後

黒田嘉右衛門様

池尻茂左衛門(弟)

尚々追々御世話被成下諸君へハ、一々別紙不差上、
何分宜様奉願候、善三郎父井上彦一モ、別紙御礼可
申上候得共、猶僕ヨリ厚御礼申上具候様相願申候、
謹啓、雖未接芝眉寸楮拜呈仕候、残暑退兼候得共、愈
御清寧王事ニ可被成御執掌奉敬賀候、扱先年来吾輩解
幽之儀ニ付不輕御周旋、遠路弊邑迄モ御賢勞被成下、
御厚配之段不堪感佩候、畢竟尊藩御蔭ヲ以、去十一月
ヨリ今春二月迄ニ追々不殘解幽ニ至、幽囚輩之殘軀夷
ニ 尊藩之賜ニ御座候、扱又愚姪幡島彈正事、田中善
蔵ト改名候テ、御周旋ヲ以御国許へ罷越、長々寄寓、
其中不図発病之由ニテ、無限之御配意ニ預リ、同人帰
来之節ハ、路資介抱等迄モ御手当被成下、万行届候御
世話、実ニ御蔭ヲ以愚姪事、今春二月十九日無恙帰郷、
官辺モ帰參相済、只今ハ井上善三郎ト本名ニ復シ罷在
候、尊藩御国恩之儀ハ勿論、諸君御懇切ニ御取救之

程、孰モ深く感戴罷在候、同人病氣次第ニ全快仕、唯

々今日ニ至候テハ、残暑等ニテ氣力無之迄ニ御座候、

乍憚何卒御降慮可被成下候、不遠又々上京等モ仕候ハ

、又々不相替御垂青(弟)可被成下候、右早速可奉拜謝処、

各夫不任心失敬打過申候、愚姪ヨリモ、国産ニテモ献

度心得ニ御座候得共、更ニ存付モ無之、国元賤治ニ命、

筑江砂鉄ヲ以鍛ワセ置候短刀、近頃乍輕少奉献候、聊

以表寸志迄ニ御座候、此節木村三郎上京仕候間、相託

差上申候、御笑留被下候ハ、忝ク奉存候、

一天下ノ形勢モ、尊藩御尽力ヲ以テ王政復古ニ至リ、東

隙殘賊モ最早不遠平定ニ可及、猶此上ハ大活眼真意之

所藏、実ニ公等之力ニ可有之、乍憚御尽力所祈ニ候、

右幸便ニ付、万緒御礼旁、匆々頓首、

善三郎叔父

七月五日

池尻茂左衛門

黒田嘉右衛門様

二〇二 井上彦一ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(久留米解宥ノ謝書)

黒田嘉右衛門様

井上彦一

七月六日癸

平安

未得拜顔候得共、寸楮拜呈仕候、時下残暑烈敷御座候
 処益御壯健、即今御上京被為在候段承候、拍悦奉賀候、
 却説豚尻井上善三郎事、御地ニテ八田中善蔵ト申居候
 由、前年来尊藩へ罷出居、長々大ニ御国恩ヲ奉蒙、其
 レ而已ナラス病氣差起候模様ニテ、其義ニ付テハ猶更
 大御心配ヲ奉懸候趣ニ相聞へ、客臘本人帰郷之御モ、
 諸君格外之御恩遇被行届候御事ニテ、病客モ実ニ一命
 ヲ全シテ、当春二月末ニ長崎表ヨリ無滞帰参仕候、畢
 竟諸君御深切之御世話、其御蔭ニテ老奴モ一児ヲ拾ヒ、
 拜謝筆紙之尽処ニ無御座、感拜罷在申候、扱本人病氣
 モ帰家之後ハ次第二快御座候、然シ此炎暑ニテ頗疲勞
 仕居候得共、気分大ニ相調候間、御降慮被下候様奉希
 候、全快仕候ハ、追々再遊可仕欵、此際日本之一草
 一木、乍此上無御見捨御扶助被成下度尚奉祈候、若又
 諸君弊藩へ御貴来被成候義モ御座候ハ、其節ハイツ
 レ得拜眉可奉多謝候、右ハ厚礼申上度呈寸紙候、匆々
 頓首、

七月六日

井上彦一

黒田嘉右衛門様

二白、

黒田君ハ前年ヨリ弊藩へ御滞留被成候時ヨリ、御高
 名承居候、豚尻御世話ニ相成候他之諸君ハ、御名モ
 記シ得不申候間、其御高恩宜ク御伝達伏テ奉祈候、
 以上、

二〇三 道嶋家記抄

六月末方筑前ヨリ使者参リ、〔卷「久光公」〕二丸へ対面有之、此使者
 ハ決テ五卿ノ事ナラン、シカレトモ御書等之事候得ハ、
 全ク不相分トノ事ニテ候、御前ニテ九州辺出立之事被
 相尋候処、追々出勢ト相見得、肥前候ノ兵博多ヲ踏切、
 追々出兵イタシ候段、此方へ相聞得候ヨシ、

但十月四日〔不承「東郷半兵衛」】東半嘶ニ、御当国ヨリ五卿守衛方トシテ

〔卷「武歩金」】

差越候内ヨリ、悪金ヲ以諸私有之、此事別テ込入
 候得共、何分御不安心之事ト察シ、相請取置候得
 共、イツレモ不通融ニテ候、是程相請取置候間、
 正金ニ御引替可被下旨、此事カイカバノ使ニテ、

叔加

其外ニモ段々御用向有之候半、是ハ御直ノ事ニテ不相分トノ晰也、何分此方ノ御所置信義ヲ失ヒシ事、様々残念ナルモノニ候、此杯ヲ困辱ト可申モノナラン、

七月六日記ス

二〇四 当時京都雜報（中路権右衛門報告）

彦根領ノ内穢多村、是迄何ヶ村ト極リ有之候処、今般人足集、江戸橋左衛門下人ノ分差出候ニ付、立方取扱来リノ外、村方穢多入込相成候村々余程有之候、二三代前ヨリ正百姓ニ相成候分モ、又々元ノ通人別調方六ヶ敷、此比混雜、百姓穢多ト入交リ、俄ニ穢多ニ相成候モノ、百姓ニ改相成候者、新規穢多村出来候由、彼ノ戦討手最中色々雜事出来候ヨシ、迷惑千万ノ由、

寅七月

二〇四ノ二

有馬中務大輔（慶應）

豊前海岸辺並小倉表為御取締、大目付塚原但馬守（昌義）・御目付介御使番松平左金吾被差遣候付テハ、平常并非常

共人数出之儀、同人ヨリ可相達候間、差支無之様可被取計、人数出シ方委細之儀ハ、同人ヨリ可申達答ニ候、

七月

右ニ付此節四五百人出張有之趣相聞申候、

於大坂表御達

松平安藝守（彦野長助）

毛利淡路・吉川監物兩人、旅中召連レ候家来着坂候節ハ、外供之分兵庫表江残シ置、内供之分ハ西宮へ召連レ可申、右内供之内召連レ度旨申出候ハ、姓名書為差出、淡路・監物同様召連レ可申、両所へ残置候家来滞留中ハ、夫々御賄被下候答ニ候、尤猥ニ他出等ハ勿論、慇懃ニ御沙汰相待居候様可申達候、右之趣旅中護送之家来江相達、不取締之儀無之様可被致候、

松平安藝守

毛利淡路・吉川監物旅宿之儀ハ、生玉中寺町圓通寺江相達置候間、兩人着坂候ハ、直ニ同寺江召連、警衛可被致候、右旅宿為取締、御目附支配向并大坂町奉行組与力・同心昼夜為詰切候間、諸事承合不取締之儀無之様、内外可被心付候、尤兩人在坂中ハ、都テ御賄被下候間、其段相達置候様可被致候、委細之儀ハ御進発

掛り大目附江可被承合候、

松平 讚岐守〔頼聰、高松藩主〕

西之宮滞留淡路・監物両人家来、不取締無之様出張人
数ニテ心付ケ候様、

榊原式部大輔〔政敏、高田藩主〕

同様兵庫表

戸田 采女正〔氏共、大垣藩主〕

内藤 若狭守〔頼直、高遠藩主〕

松平 弾正忠〔大河内治實、大分藩藩主〕

内藤 志摩守〔正誠、岩村田藩主〕

淡路・監物両人滞坂中圓通寺警衛右同断、

陸軍奉行

御持筒之頭

御先手

右同断旅廻警衛

西本願寺

淡路・監物両人評席

右之通相達候間、可被得其意候、

七月

右之通御座候条伝書致候間、写取入御覽候、已上、

七月六日

内田仲之助様

吉井幸輔様

中路権右衛門

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

二〇五 非常節儉ニ就キ達書

大奥 御膳所 御納戸 御広敷 御庭方

右局々之儀、都テ 御衣・食料等ニ関係イタシ候御用
致取扱事候間、筆・紙・墨・油・蠟燭等一切、御用
品御勝手方免印ヲ以致取扱来候得共、御用費出納御
側役見届候へハ、省略之取計モ猶亦可行届候ニ付、
何篇御用部屋免印ヲ以テ致取扱候様被仰付候条、此
旨可承向へ可申渡候、

但御広敷油・蠟燭等之儀ハ、先達テ仕向申渡置候
得共、本行之通、一切免印ヲ以テ致取扱候様、
是又申付、

七月八日

右衛門〔丞〕「桂」

二〇六 西郷吉之助ヨリ大久保一藏へ書翰

〔英人云々中将公御添削ノ御建白云々〕

御而殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義御互難有奉
存候、陳ハ長防之戰爭、大概宰府出張之方より山田孫
一郎を差遣、承合候形行申來候て、早相分候付早速御人
數被差出賦にて、一陣御手当相成居候処、三邦丸着帆
能都合にて御座候、〔先「伊地起」〕正治より番兵二組被差遣候筋申
來候得共、最早一陣ハ御手当相成居候故、其俣被差出
賦ニ御座候処、船仕廻出來兼些痛損有之候付、三組又
此節被差出候都合ニ相成、跡三組ハ一七日計ハ後れ可
申候得共、却て一時ニ着坂よりハ、兩度ニ着いたし候
方勢ひを張ツマひ候半軟と奉存候、乍然痛処有之無抛右之
手數ニハ候得共、宜敷勢ひニ相成候、大幸之事ニ御座
候、出兵御断之御建白書
御名前之処、早速
御許容被為在候得共、英人着坂涯之事にて大混雜中、
殊ニ機會を以其運ハ其御許にて可相付段申來居候故、
少しハ不取急事ニ御座候、又
朝廷江之御建白書
中将公御自身様御添削被遊、御手自御認相成御差出之
都合ニ相成、御互ニ難有次第ニ御座候、○英人來着段
々談判之始末ハ岩大夫江申上越候付、文略仕候、大概

見込通ハやり付候賦ニ御座候へ共、欺かれ候へハ無致
方、随分幕手を英ハ打離し候賦ニ御座候、何分ニも能
都合にて大幸此事ニ御座候、○長州ニおひてハ、此度
之始末余程出來候事にて、兵端ヲ開く処から破た処迄
間然する処無御座、此処第一之訳と相考居候処、十分
やり応し候付、今之処にて如何なる仏人たりとも応援
可致道相絶候半、諸藩ニおひても益出兵ハ致間敷、是
より
王室之興時來候半と雀踊此事ニ御座候、○熊本藩森惣
四郎使節として入來候付、応対ニ私出合候処、全之幕
論にて致方無之候付、少しハ論し詰置申候、彼之御方
より手扣書持參にて鶴崎江御人數被差出候付、何篇御
教示御頼被成との趣にて御座候、依て此御方様よりハ、
大坂おひて國論を以御建言相成候通之事にて、其御方
ニおひてハ御出兵被成候へハ、此度之処天下競て討入
申場合ニ到兼候半、其節ハ御動揺不被成、始より終迄
能御貫相成度、態と御使者を以被仰進候故、一言申上
置との趣を以御返詞相成候処、案ニ相違いたし候向ニ
て、すこゝして引取申候、決て説客ニ參候半、京都之
人數ハ一種之論を立、御國元之処ハ尊幕之論と肥後

藩にて多く申触し居候由ニ御座候故、大概説伏候賦ニ
て参候半軟と存申候、肥後論之危事実ニ可笑次第第二御
座候、○木戸より之書面相達候付開封いたし候得共、
差たる事も無之其俵差上申候間、御落手可被下候、
○名作御恵投被成下難有御厚礼申上候、此旨御報迄荒
々如此御座候、恐々謹言、

西郷吉之助

七月十日

大久保一蔵様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

二〇七 蓑田傳兵衛ヨリ大久保一蔵へ書翰

猶々此内ハ遠客来着、何モ別テ御都合好、為 国家

大慶奉存候、細事ハ疾ニ承達ト相略申候、

一輪拜啓仕候、残暑難堪御座候得共、御堅勝被成御奉
職奉賀上候、随テ野生無異消光相動申候間、乍憚御降
意可被下候、偕天下之形勢日増及衰頽、委細之儀ハ今
般川村等罷下承達、何共歎息之至、大笑之至奉存候、
朝廷御建白一件付テハ、御尤之儀、於爰許御評決ニモ
相成、別紙御草稿之通、今日便御差出相成候間、毎之

一振合通御執計可被下候、別テ之機会、定テ 御採用
相成候半ト奉恐察候、幸伊地知氏上京ニ付、細事御承
知可被下候、此内ヨリ御伺モ不行届、不埒之至御寛裕
可被下候、細事ハ吉翁等ヨリ申上候半ト相略申候、此
内ヨリ不一方御尽力奉恐慶候、先々御伺迄如此御座候、
岩下様・町田様へモ乍恐宜被仰上可被下候、猶期後鴻
候、恐惶頓首、

七月十一日

大久保一蔵様

蓑田傳兵衛 (長胤)

人々御中

二〇八 道島家記抄 (鹿兒島事情)

丙寅七月八日方、御宝蔵ノ金十万八千両出方有之、大
夫(赤)杯(仕之丞)ハ伊地知其外ニテ候ヨシ、此金ハカラハヨリ三拾
万両借銀(利四)有之借入、右へ御渡、是非返弁不相成候
テ不相濟、大坂へ十万両差出呉候様相談有之候得共、
六万両ハ可差出トヨシ、夫故イチ、壮之丞此節ハ守
衛人数一所ニ大坂へ差越、是非十万両都合ニ差越、十
万八千両カ、大抵七万両位可相成、此節拾七万両ハ、

カラハへ返銀不相成候テ不相濟段申事ニテ候(前書御建白参照)

但先達テ長崎在勤ノ汾陽次郎右衛門トノ被罷帰居、

御用向不相運候付、此事不宜候テ帰崎イタシ候テ、

役ニ不相立トノ段承候、左候へハカラハへ返銀ノ

事ナラント申合候、肝ノ大キ者共何トイフ事カ、

夷人杯モ是非ノ借銀ニテ候、御世帯被相迫候テ、

諸入ニ三升重杯ハ何事ゾヤ、誠ニ埒モナキ者共ニ

テ候事、

寅七月十二日記ス

二〇九 〔諸藩去就〕

薩州廻状ニ付、昨日於晴暉梅合会三十二藩出席有之、

就中肥後・肥前・筑前・筑後・米澤(マゼ)・忍七藩ハ論議一

致、最早天幕御決定ノ上、兵端迄既ニ相開候場合ニ至、

周旋ノ致方無之儀ニ付、今日又々七藩会合、薩州へ断

ノ場合相成、左ノ書付、

上略、然ハ御回文ノ趣我々切り一応拜見仕候得共、

別紙ノ趣ハ此節 天朝ヨリ追討被 仰付、最早諸藩

出陣ノ末ニ至候得ハ、朝敵ヨリ差出候書類ハ、主人トモへ相達候筋無之儀ニ付、此段アラタメテ御断仕候、

七月

忍 米澤 肥後 筑前 雲州

肥前(マゼ) 松山 柳川 土州

久留米

右ノ通被申置候得共、他藩ヨリ御見合被成候テ、可然トノヨシニテ被止候ヨシ、

別紙写ニ有之、

一別紙御届并覚書トモ、於藝州廣島表(本莊宗秀)松平伯耆守様へ御

届申上候、尤別紙覚書ニ、帳面類ハ於彼地写差出御座

候ニ付、別段差出不申候、此段御届可申上置申付越候、

已上、

七月十三日

(定安、松江藩主) 松平出羽守

原 武右衛門

覚

一帳面巻冊 上書 第四大隊三番中隊

一同 巻冊 同 長防臣民合隊宛

一書翰一通 同 森池熊一郎様 阿川彦四郎

御用急キ

右ノ通御座候、以上、

二一〇 伊地知壯之丞ヨリ大久保一藏へ書翰

慶應二年七月十六日

残炎無御病増御清適御詰、珍重不斜奉祝候、随て劣弟
二も無事大坂并ニ 御地江も御用有之、守衛人数被差
出候便船豊瑞丸より今日致着坂候、早々一兩日之間ハ
上 京可致答候得共、差掛御留守居談合事等も有之、明
夕明後朝之間罷出可申、別封劣弟江才領被仰付候得共、
差急キ可申と存候間、足輕差立差上候、御遣し被成候
御案文ニ、処々ニ之丸公 御点削、御直筆ヲ以御認相
成候、

御趣意ハ御案文ニ全相変り不申、段々御談合申上度事
件御座候間、兩日中上 京之上、篤と可申上、右得貴
意度如此御座候、以上、

寅七月十六日

伊地知壯之丞

大久保一藏様

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

二一一 木場傳内ヨリ大久保一藏へ書翰

大坂

大久保一藏殿

木場傳内

〔卷「六船」〕
御船豊瑞丸着船之段は昨日御届申上置候通ニて、萬年
丸ニも昨夜酉ノ下刻比着船ニ御座候、蒸氣船より被差
越候御用封等、早速可差登旨御問合相達居候付、豊瑞丸
より被差立候中急飛脚相糺候処、京都御用物は都て別
段荷作いたし居、取しらへ方混雜之趣申出候付、爰許
御用濟次第、昨夕方迄之内ニは可致出立旨訳て申達置、
其通為致出立儀と相心得居申候処、今朝迄滞坂之由承
り、御急キ之御用封等も可有之儀ニて、甚以不都合之
事ニ御座候、形行相糺候処、〔卷「通状」〕別紙之通申出候付、猶又
早々出立いたし候様申渡置候、〔右上方字〕佐次右衛門殿よりも御
同様被仰越置候付、此段形行申上候間御披露可被下候、
以上、

寅七月十七日

木場傳内

大久保一藏殿

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

二一二 長防士民ノ嘆願書

長防士民誠恐誠惶頓首再拜昧死シテ上表

伏惟

天日照明有時テ雲霧コレヲ覆ヒ、尽力竭誠、不幸ニシテ讒誣其間ニ生シ候事、古今之通患ト奉存候、主人父（毛利親元）子多年力ヲ 公武之御間ニ竭候処、不凶モ今日之勢ト相成、進テ 天日之明ヲ拜スル事能ハス、退テ自訴ル処無之、二州士民手足之措所ヲシラス、日夜天地ニ号哭仕候外無御座、就テハ鄙野無智之小人、是非得失ヲ弁得不申、只管相考候ハ、主人父子曾テ恐多モ 天威咫尺之

明詔ヲ奉シ、親敷將軍之委託ヲ受ケ、敢テ寧処不仕候処、一旦御譴責ニ相成、百万歎願仕候モ微衷ヲ明ス事不相叶、尔来深ク自罪シ戒慎、恐懼情実ヲ露呈シ、日夜冤枉之雪ガレ候ヲ仰望致候処、再ヒ軍勢被差向、御難題被仰出候事ニ相成候テハ、何トモ其故ヲ不奉伺、畢竟雲霧明ヲ覆ヒ、讒構上ヲ誣候故ニテ、決テ聖明叡慮ニ無之ト奉存候、其証ハ癸亥攘夷期限御布告相成候節、於関東諸有司

勅諭台命奉承無之ヨリ以来、下臣ノ行欺罔之跡前後相望、顯然明著、遂ニ外夷ヲ誘ヒ、攝海ニ闖入セシムル

ニ至候テハ、要脅最甚シ、如斯

朝威日々御委靡ニ被為向、正邪混淆是非顛倒仕候ハ、偏ニ奸邪事ヲ用候故ニ有之、然ハ今日之事モ、亦皆其手ニ出ルコト疑無之候、就テハ臣子之分、今日之急ニ差迫候テハ、身ヲ以テ君難ニ殉ヒ、平生之恩ヲ報候外他念無御座、二州挙テ決死之覚悟罷居候、全以奉対天朝、不遜之心底ハ毫末モ無之、天地鬼神ニ誓ヒ奉申上候、幸ニ天地未タ二州士民ヲ遐棄セラレス候ハ、再ヒ雲霧ヲ払ヒ、 天日ヲ拜候時モ可有之候得共、恐クハ千載冤枉ヲ懷キ、地下ニ瞑目不仕候事ト奉存候故、責テハ鄙衷ヲ御照臨被為成下置度、一統昧死シテ奉哀訴候、誠恐誠惶頓首泣血謹上、

右長藩人品川氏本ヲ以糺合ス、

別紙、長防士民ヨリ奉告之至情無余義奉存候処、今日之形行ニテハ、取伝仕候儀モ不都合ノ姿ニ御座候得共、奉対 天朝毫末モ不遜之心底無之、無ニ之誠意、責テハ 闕下ニ上表哀訴仕度趣意ニ候得共、進退訴ルニ道ナク、鄙藩へ涕泣依頼イタシ候次第ニ御座候、全体上下懸隔、下情鬱塞、臣民之情ヲ尽サシメサルハ、古今明聖之代ニ無之的証ニ有之、殊ニ急難ヲ見テ垂憐候ハ、

武門之通情ニテ、旁傍觀黙止難仕、別紙相添此段申上候間、明亮之

御裁断ヲ以テ宜敷御執奏被成下候様奉願候、以上、

七月廿二日

御名内

内田仲之助

二二三 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

巻封

大久保一蔵殿

伊地知壯之丞

別紙之通申来候間其佞ニも難差置、藤井良節正徳名前前ヲ以致返答可然、尤御当地迄被召入候ては旁混雜之事御座候ニ付、事ヲ解迄人一兩人伊集院迄御出し候好意ニ接遇、程能差歸候方可然欵とも奉存候、何分御吟味可被下候、以上、

慶応二年乙
七月十八日

〔大久保利蔵氏所蔵本にて校訂〕

二二四 〔道島家記抄〕

一町田民部殿当分大目付、去ル十八九日方朝服〔麻士ト通稱ス〕着シ、

無刀ニテ上方ノ様ニ被差越候ヲ、誰カ見候由、

又名越モ同断朝服ヲ着シ、何事ニテ差越候乎、此様夷人ニ酔フモ自然ノ道理ナルカ、誠ニ浅猿事共也、

寅七月廿三日記ス

二二五 〔長防士民諸藩へ嘆願〕

長防士民泣血再拜、謹テ諸藩明候閣下ニ白ス、主人父子多年

勅旨ヲ奉シ、台命ニ從ヒ東西ニ奔走シ、心力ヲ竭シ候処、奸邪蔽明冤枉再生、仰テ天ニ号スル所ナク、俯テ地ニ哭スル処ナク、今日之急迫ニ至リ、君臣之不幸御憐察可被下候、然レトモ事既ニ此ニ至リ候テハ、最早冤枉ヲ弁解モ不仕、又哀号シテ御救援ヲモ受奉ラス、二州之士民各臣子之分ヲ尽シ、死ヲ以主恩ニ報ヒ、知己ヲ千載之下ニ待チ、公論ヲ百世之後ニ仰キ候外心中無他事候、誓テ奉対

天朝、不遜之心底毫モ無之、鬼神照明森列、敢テ赤心ヲ披ク処ニ御座候間、一樣暴挙之者ト不被為成御思様奉願候、且亦弊国之存亡ハ固ヨリ不論候処、弊国之事

ヨリシテ自然天下分裂之勢ヲ開キ、外夷之術中ニ陥候様可相成哉ト、是ノミ遺憾ニ奉存候、就テハ何分諸明侯力ヲ勦セ、心ヲ同フシ、上

天朝ヲ奉戴シ、下幕府ヲ扶ケ、早く奸邪ヲ誅鋤シ、忠良ヲ登庸シ、天下ヲシテ正邪判然、名義相立、人心一致仕候様御尽力有之度、右様無之候テハ、数年ヲ出スシテ、遂ニ神州ヲシテ外夷ニ棄与セラレ候様相成候事、必然ト奉存候間、深く御遠慮被為在度、身外之至願惟此一事ニ御座候、心事偏ニ御亮察被下度泣血奉懇告候、頓首謹言、

寅七月

右書面ニ付

廻状

別紙長防士民ヨリ弊藩へ依頼之趣有之、至情無余儀、乍併今日之形行ニテハ、取伝候儀モ不都合之姿ニ御座候得共、御互ニ武門之通情傍觀ニ堪兼、無抛別紙相添及御通達候間、御推量御承知可被下候、以上、

寅七月

松平修理大夫内

内田仲之助

加賀様

其外各侯略ス

御留守居様

御中

二五ノ二

七月廿四日

内田仲之助

- 加州藩
- 仙臺藩
- 越前藩
- 肥後藩
- 筑前藩
- 藝州藩
- 肥前藩
- 因州藩
- 備前藩
- 津藩
- 阿州藩
- 土州藩
- 筑後藩
- 秋田藩
- 盛岡藩

二二六 長防征討出兵御断最後ノ上申

(木場傳内名前)

米澤藩
津山藩
雲州藩
河越藩
宇和島藩
高松藩
松山藩
柳川藩
明石藩
二本松藩
大聖寺藩
富山藩
忍藩
中津藩
新發田藩
郡山藩
弘前藩

長防御征伐ニ付、出兵御断之書面從主人差出置候処、書面申立之趣ハ有之候得共、寛大ノ御趣意ヲ以御処置相成候末、

朝命遵奉不致、

御奏聞之上、御沙汰之次第モ有之事ニ付、早々出兵、朝幕之御趣意相貫候様、御附札ヲ以被仰渡候趣承知仕候、全体今度申立候趣意、防長御処置振之儀、条理反覆本末顛倒、御征伐之名実不相立候故、既ニ御達之趣モ承知之上、恐入候得共、於大義不得止確定之旨趣ヲ以テ、御断申上候次第ニ御座候、不肖之弊邑ニハ候得共、

朝命遵奉之筋ハ固ヨリ、分上之儀ト兼テ心得罷在候得共、是迄之御達振ニテ進退仕候テハ、道理ヲ曲阿從之場ニ相当リ、天下後世ノ恥辱、且巍々然タル

聖朝幕府ノ御威徳ニモ相拘リ候儀ト奉恐入候、乍恐天下万人感戴仕、古今ヲ相貫、至公至平之御沙汰社、朝命幕令共可奉申上候ニ付、是非命令之命令タル様被為在度赤心ニ御座候、就テハ御征伐之筋合判然相立、別段名分至当之御達不相成候テハ、吃度御請難仕旨、兼テ主人申付置候ニ付、再応申上候様、重役共ヨリ申越

候間、此段申上候、以上、

松平修理大夫内

七月廿七日

木場傳内

右慶應二年寅七月廿七日、於大坂御留守居木場傳内
ヨリ差出、

二二七 七月二十七日薩藩ヨリ會藩江文通ノ写

当世態混雜ノ次第成行、御互ニ不堪痛心候、然ル処去
二十三日夜、寺町今出川辺江相懸リ、頻リニ相騒キ、
何者共不相分甲冑ヲ帶シ、或ハ手鎗ヲ提ケ致徘徊候由、
未明市中賤商兒童輩ニ至候テハ、殊更狼狽シ有様ニテ、
于今人心義定兼候様子ニ相聞エ、段々道傍虫ニ付不分
今般弊藩ヨリ

禁闕守衛ノ為人数少々差出候処、何乎時變到来スルナ
ラント附会ノ説ヨリシテ、右時宜ニモ相及候由、弊藩
人数ノ義ハ御届モ申上置候通、非常ノ節、全ク鎮撫奉
護ノ御為ニテ差出シタル事候処、前ニ寄ノ次第以ノ外
ナル事ニ御座候、左ナキダニ不穩人心ニ候処、右辺ノ
事有之候得ハ、前条ノ通り町家等混雜ハ当然ノ事ニテ、

万々一モ

朝廷迄モ聞得上リ、御動揺被為在候様ノ義御出来候
テハ、其任ニモ相背、不奉堪恐縮痛希セシメ候、仍テ
町役ノ長ヲ召呼、篤ト諭解致シ置候得共、尚安心モ致
シ兼候哉ト相聞申候、右寺町今出川尊藩御下宿羅列ノ
辺、尤甚敷由承リ、当今鎮撫筋ハ御職中ノ御事歎ト奉
存候間、何卒御威光ヲ以、安堵致シ候様御説解相聞候
得ハ、御為筋ハ勿論、弊藩ニツイテ大幸不過之候、重
役共ヨリ御頼談申上候様申付候ニ付、乍卒尔以書面此
段云々、

七月廿七日

松平修理大夫内

内田仲之助

二一八 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

一封筒

慶應二年七月二十九日

大久保一蔵殿

伊地知壯之丞

貴札忝拜見仕候、継目等も於、御地致承知候模様と相
變候由、此一段落ニテ形勢相變可申候、日々御地之模

様案居申候、石州口寄手敗北、濱田落城等之書付は相

伊地知正治様
御中

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

廻、昨日御届相成候付、御覽被成候半、御地江は疾御

入手相成候も難計候、三藩連名之献言は昨日平戸藩浦

新八劣弟旅宿江入来致披見候、右次第は福島ヲ以藝州

三宅万大夫江為引合、同人手扣書差上候間、別段不申

上候、右荒々得貴意候、以上、
寅七月廿九日

伊地知壮之丞

大久保一蔵様

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

二一九 〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通外二名へ

書翰〕

御揃御堅米奉賀祝候、次ニ劣弟碌々致滞坂居申候間、

乍憚御安意可被下候、豚一壺甚輕少之至御座候得共、

岩下家并ニ貴君方江致進上度御座候間、御笑味可被下

候、聊御土産迄しるしニ御座候、右得高意度如此御座

候、以上、

トラノ 七月卅日認

伊地知壮之丞

大久保一蔵様

内田仲之助様

伊地知正治様

御中

二二〇 〔伊地知壮之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔巻封〕

大久保様

い地知

別紙付

別紙昨日相届候ニ付差上申候、御覽濟之上は伯父さま

へ御廻し可被下候、昨夜石川二蔵子同道ニて西郷信吾

生上京相成、彼地之咄共承申候、何分此節京師変革之

形勢不相分ニ付、両土上京候由ニ御座候、余ハ期拝眉

候、以上、

廿五日

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

二二一 小倉戦況聞書

丙寅七月廿七日

小倉ヲ長州ヨリ相攻候、小笠原防ク事不相叶引取、

城ヲモ焼キ候、八月七日比飛脚到来ニテ相知候、段

々風説承候処、左之通、

廿四五日方田之浦ヨリ海辺ヲ調練、蒸氣船式艘帆前舟等調練イタシ、空砲打立候由、是ハ小倉ヲ攻ルノ奇謀ナラン、左候テ廿七日ニ抑寄候処、小倉公当分ニ才位ノ幼童ニテ、当君ハ当春比罷来候由、細川ヨリ被参居候ヤ、肥後ヘ引取候由、勿論下村^{トヤライフ}トヤライフ家老カ一了簡ニテ、小倉ノ城ヲモ焼キ、少々ハ防方モイタシ候得共、中々長兵勢ヒ強ク、終ニ引退キ候処、細川カ手ニ相受取、此ニテ双方ノ戦ヒニテ、手負・死人等モ双方ナカラ余多有之、終ニ夜入候テ長兵モ引取候由、シカレトモ小倉ヨリ長州ヨリ攻取陣代ヲモ居、百姓共ヘ法ヲ出シ、三年ハ作取申段申渡ニ相成候由、八月十日比ノ評判也、猶追々可分候間、形行追テ可記事、

二二二 治乱ノ政務大改革調

- 一 御側役并御軍賦役頭取ハ御旗本之參謀タルヘシ、
- 一 御納戸奉行之場ハ御供之御小納戸ヨリ兼帶、
- 一 御兵具奉行之場ハ御軍賦役頭取ヨリ兼帶、
- 一 御使番之場ハ御軍賦役ヨリ兼帶、

一 御供目付之場ハ御供目付・御目付・御裁許掛・御軍賦役之内ヨリ御人撰ヲ以御供被仰付、一隊毎之監軍タルヘシ、

- 一 新番之場ハ隊長并小頭長ヨリ兼帶、
 - 一 一定御供之場ハ小頭ヨリ兼帶、
 - 一 中小姓之場ハ素ヨリ兵士之任タルヘシ、
 - 一 御右筆之場ハ御家老座并御用部屋書役ヨリ兼ヘシ、
 - 一 船中之小荷駄兵粮方ハ船將ノ支配タルヘシ、
 - 一 陸路之人馬兵粮方ハ宿割役々ノ任タルヘシ、
 - 一 御小納戸・奥御小姓・奥医師ハ御旗本之侍衛タルヘシ、
- 右外兵隊ニ不拘向ハ、此節ヨリ都テ御減省可被仰付哉ト吟味仕候、以上、

御軍賦役頭取

黒田嘉右衛門

二二三 前之濱ヘ英国船襲来後ノ手当

- 一 打場ニテ居宅、
- 一 早鐘ニテ御定之場ヘ繰出、
- 一 一戦争之模様候ハ、千眼寺

御両殿様御本陣、

右二之丸

但太守様御旗本五組ハ

一組

入來院(公寛) 恰

川田將監刃、

右御樓門刃

中將様御旗本六組ハ

一組

新納波門(公世)

新上橋刃ヨリ草牟田入口刃、

右新橋刃

一右之節(島津久徳)圖書殿御登城、諸惣差引被成候ニ付、

一組

島津相馬

太守様御旗本之内ヨリ、一組ハ 御城内へ相堅候事、

右護摩所刃

御番所刃

右之通急事之節堅場究置候旨被申出候事

一御城下守兵五組

伊集院 二組

護摩所 一組

市來 一組

二丸 一組

右南林寺坊中寺陣ニテ、下方限州崎迄陸上之堅

御樓門刃 一組

樋脇 一組

但圖書殿御手勢ハ

郡山 一組

御殿内供屋、

山崎 一組

枅形刃 一組

右壽國寺刃陣所ニテ、砂揚場辺中村迄同断

新橋刃 一組

鹿兒島郡

但宿陣之儀ハ、是迄御定之通、

吉田 一組

一組 島津小平太

溝邊 一手

右下演武館

(絶) 始羅郡

一組 二階堂 部

山田 一手

右福昌寺坊中陣所ニテ上方限同断

蒲生 二組

右大乘院坊中陣所ニテ磯方限同断

二二四 軍役知行高改革

(朱)〔正夫効名〕
鎌田仙十郎・伊勢雅楽兩家持切在外給地高之分ハ、此

(悉)〔宋吉ノ内書用〕
節壳弘之筈御座候得共、持高相減候テハ軍備モ行届兼候間、

先祖勲功旁之御取訳ヲ以、是迄之通被召置被下度、願之趣篤ト吟味仕候処、基私領持切在之儀ハ、銘々其家先祖忠勤之功賞ニ被下置、領地之大小多寡モ、勲功之厚薄ニ依テ、夫々差別被仰付置候訳ニ可有御座、左候得ハ自家之余勢ヲ以買求候給地高迄モ、右功賞ニ被下置候領地同様之御取訳可被仰付節ハ有御座間敷候間、給地高之分ハ、此節壳弘候様被仰渡、相当可有御座哉ニ奉存候得共、私領持之儀ハ、持高是迄之通被召置候旨被仰渡、是以無故致兼併居候給地高、其俣被召置候テハ、諸士持高減少之御取扱ニモ不相並、別テ不釣合之形行ハ、前文同様之事御座候処、右ハ其俣被差置、

仙十郎・雅楽兩家ニ限り、知行高減少可被仰付訳モ有御座間敷奉存候間、是迄御軍役手当等、現地一所持同様被仰付置候御取訳ヲ以、御軍賦役シラベ通可被仰付哉ト同席中ヘモ申談、此段申上候、以上、

御勝手方御用人席

陸軍係 黒田嘉右衛門

二二五 御建白ノ手続(薩州建言)

三二五ノ一

御建白ノ手続左ニ申上候(薩州建言ニ就テ)

御建白ニ付、去月廿九日正親町三條卿二條公(實愛)ヘ御越、

御見込ノ次第得ト被仰込候処、二條公モ御答詰リニテ、

翌日御前御評議ニ御決之由御座候、

一晦日條公御始御国事掛之

宮・公卿方、於

御前條公ヨリ、此度薩ヨリノ建言不容易(建言前記)

皇国之大事件ニ付、各意底ニ不已存分言上可有之旨御申述之処、満座暫時寂トシテ御答無之処、正三卿御進(正親町三條實愛)

出、薩ノ建言実以一々尤之儀、一点モ間然スル所無之、

勿論積年之勤 王、

〔米〕〔久光公〕
中将様始テ御上京、〔朝彦親王〕賀陽宮ヲ御引進メ、関東ニテハ

一橋始ノ幽閉ヲ解候儀、是皆

朝廷・幕府之御為ヲ奉存候テノ誠忠至誠、其後屢上京

尽力、殊ニ此節ノ建言、実以感ニ不絶、尤道理判然タ

ル事ニ御座候間、是非御採用被遊、断然解兵之

勅命御下相成候様有御座度旨、堂々ト被仰述候処、御

一人モ御答ノ御方無之故、〔近衛忠房〕内府公へ御問懸相成候得

共、如何思召被成候哉、御一言ノ御答モ無之、〔うつむくの方言〕ロツキ被成候付、〔元親王〕山階宮ハ如何ト御尋ノ処、尤至極之

御正論不絶感伏、乍併宮ニハ外ニ少々御異論ノ思召御

座候、尤御説通御取用相用候得ハ、第一等之御議論ニ

候得共、速モ御用ニハ罷成申間敷哉、愚存ノ趣ハ、内

実ハ

大樹病死ノ由ニ付、近々喪ヲ発可申、夫ヲ名トシテ解

兵被 仰出候ハ、可御宜旨、〔利〕理害得失分明ニ御論弁相

成候処、條公モ 宮ノ御議論初テ御聞、大キニ御感心、

至極御同意御座候ト、頻ニ御称誉、其外 公卿方御同

意ノ処、〔胤忠〕廣橋卿無類之勤幕家ニテ、解兵ノ儀ハ決テ不

御宜哉ト、無憚所正三卿へ御討論、終ニ正三卿ノタメ

ニ解伏ラレ、御閉口ノ処、〔定規〕野宮卿又タ夫ヲ助テ御討論

ニ成タル由候得共、 公ニモ廣卿御同様御閉口央、

御上ヨリ解兵ハイツク迄モ不宜ト、 御沙汰被為在候

由候得共、御議論中ニテ御耳ニ不徹、正三卿初テ今日

ハ存分言上之格護ヲ究罷在候ト押返シ、御言葉ノ端々

ニ、右云々三度程被仰候由、右通之御勢故、御議論モ

強ク、〔山階宮〕山宮之御高論ニ、 條公御初御同意ニ相成候処、

又々廣卿是迄一・會・桑ニハ毎モ御相談相成来、殊ニ

此節之儀ハ、專御委任ノ訳ニ関ル儀ニ付、御相談被

仰達度トノ趣故、 公卿方夫ニ御同意、其通御決定ニ

相成候由、左候テ又々

御上ヨリ重大之事件ニ付、能々熟考可致趣被

仰出、二日之御再評ト御究相成、御退座相成候由、

山宮・正三卿ノ御正論、実ニ感心之御次第ニ御座候、

一朝議之御次第 條公ヨリ早々一橋へ御通ノ処、服心ノ

元ヲ以御答、解兵之御議論無余儀、一応ハ尤之事候得

共、夫ハ長防之事情御洞察無之故ニ候、〔毛利慶親父子〕大膳父子世官

ノ輩ハ、悉

朝幕ノ命令相背ク心得ハ決テ無之候得共、激徒且浮浪

輩ノ者一円承引不仕、無致方此度之次第ニ立至リ候、

其証ニハ藝州口・馬關・石州口へ出兵之者、農兵・穢

多ノ類ニテ、夫ヲ指揮スル士分少々罷居候由、是ニテ
困情被察候、私馳下リ不日ニ成功奏

聞可仕、尤見留ナキ儀ハ不仕、御安心可被下旨、微細
手ニ採ル様ニ被申上候トノ趣承得申候、荒ノミ込見留
ノ違サウノコトニテ、御笑察可被下候、

一同二日諸公卿御參、正三卿御不參、左候テ
御前へ御列座之處、

御上ヨリ先日被 仰出置候通、重大之事件ニ付、熟考
之趣無意底可申聞トノ 御沙汰被為 在候得共、悉御
平伏而已ニテ御答無之故、又々御同様被

仰候得共、御同断ニ付、 賀陽宮へ 御沙汰之處、私
事ハ兵事ハ更ニ心得不申故、武辺へ御委任ノ廉モ有之、
殊御案内ノ儀ニテ、色々論ヲ立候テハ、余事ト替候儀
故、議論無御座、今日迎モ同様ノ旨御答被仰上候由、
奸智ノ程御憤察可被下候、(罵力)扉屋ノ様思召ハ、以之外ナ
ル意味違カト大ニ笑論仕申候、

御上ヨリ屢解兵ノ儀御不同意等被 仰出候儀ハ、悉
賀宮ノ御拘意ニ出タル訳ト承申候、実ニ憤慮ニ不絶、
(抱力)奸物乍不屈切齒此事ニ御座候、当日ハ為差儀モ無之、
弥武辺へ御相談ト御究ニテ、御退出相成候由、

一四日公武御參、内府公御不參、於禁中 山宮・正三卿・
條公へ別ニ御逢、

御上ノ 思召御伺ノ處、解兵ハイツク迄モ不同意トノ
御事ニ候、其外モ御同様トノ御答故、夫程御決定ノ儀、
今更一橋ト論シ候テモ更ニ無詮、無用之儀ト被仰候得
共、是非御存分御論判ノ方可然トノ事故、

御前へ御揃ノ處、一橋ヨリ正三卿へ向ヒ、先日ヨリ解
兵ノ御論承、一応御尤之事候得共、此儀ハ決テ可行機
会ニ無之、彼レ困境ヲ守居候得ハ兎モ角モ候得共、藝
領迄踏込、石州口ハ雲州近辺、西ハ大里へ踏出居、此
俣解兵仕候テハ、弥機ニ乗シ官軍ハ勢ヒ挫ケ、 朝憲・
幕威モ全無之、諸侯モ輕ンスルヤウ罷成可申ハ、自然
ノ勢御座候、依テ私馳下リ候ヨリ外ニ道無御座候旨ニ
付、尤御見留モ可有之旨、先日ヨリノ見込モ申出シ、
利害得失ヲ論候處、過日條公へ以使申上候趣トハ口替
リ、華城ノ儀モ擊解之論五部々々ニテ候、諸藩モ段々
議論有之由、見留迎ハ更ニ無之只必死之情、兵五千ヲ
率ヒ、夫モ幼少老兵ハ省キ、兵器ハ自身提、大砲ハ悉
打役ヨリヨシ、(マ)黒米飯ヲ竹皮包ニシテ腰ニ付、此一橋
モ同様ノ出立ニテ、手道具惣テ省キ、両掛様ノ物モ不

持越、兵器ノミニテ参、大膳父子カ首ヲ得ルカ、我カ首ヲ授ル之見留迄ニ御座候、何レノ筋敵ヲ国内ヘ追挫キ、其上之所持ニ不出候テハ、此機会ニハ解兵思ヒモ寄ラサル場合ト、堂々ト説立ラレ候由、山宮ヘモ同様ノ意味候由、サスカ奸雄ノ意地程ハ御座候得共、初御所持ノ次第自他ノ黑白、

皇国ノ御興廢真ニ患生虚塗炭之ヲ勤弁イタシ、世濟之重任ヲ以人事ヲ被尽候ハ、天眼之大將軍ト可仰、今一層高ク考ヲ付、此絶勇ノ垣内ヲ拔議論モ相立度モノニ御座候、シカシ余リ甘クヤラレ候テハ、俄ニ淋敷罷成可申、マツ此末ガ極面白ノ組立ト罷成可申、御待居可被下候、左候テ薩ノ建言不相立ヲ憤リ可申哉ノ、例ノ臆病区々ノ評議有之、

山宮ヨリ是ハ以ノ外ナル御疑惑軟ト存候、不容易世態傍觀ニ不絶、臣士ノ分ヲ尽シ、乱ニ入ヲ患ルモノ御採用無之、逆モ奉恨候テハ、前後齟齬仕候間、只アリノマ、ヲ被仰聞度トノ御一言ニテ、表向

勅答ハ伝奏衆ヨリ内見願出候分ハ、罷出候者ヲ御呼付御達可成トノ事ニ罷成候由、

一今日 内府公御不参、賀宮^{〔書〕}ヘ浦辻卿御使ニテ、兵之進

退ハ御不案内故、何ノ御異論モ無御座、何レ武辺ヘ御任セノ外工夫無之下、至極阿諛ノ御使、二日ニ賀宮ヨリ御上ヘ御答被仰上候ヲ、御反古ノヤウナルモノ、由、山宮ヨリ高崎^{〔正書〕}左京ヘ密ニ被仰聞候由、此節ノ御所存甚遺憾絶言語候、山宮・正三卿ヨリ 内府公ヘ被仰談モ、御断ニ高崎モ三度程御使ニ参上故、同人ヨリモ頻ニ責上ケ、是非此節ハ御尽シ不被下候テハ、天下有志ノ望モ放レ可申、大事ノ御場合故、是非御氣張被下候様申上タル由ニ候得共、終ニ如此次第残念ニ御座候、夫故正三卿御憤発、條公ヘ御独参ニテ御論不相決、終ニ初条之

朝議ニ為相運訳ニテ、実ニ拔群ノ御正義、御感心ニ御座候、且 山宮ヘ被仰談置候儀モ御破リ、正三卿ヘ一言ノ御答タニ無之、余リトイヘハ御臆氣強ク、実ニ絶ヘ兼候仕合御座候、山宮還御後 内府公ヘ高崎ヲ以、今日私初テ發言、且正三卿ニモ大同少意^{〔異〕}ノ議論故、同シ道理ヲ御繰返シモ如何ト思召力、又ハ外ニ御深慮^{〔モ〕}ヲ有之、何之御論モ不被為在軟ト奉察居候、此末之処猶又御熟考、

皇国ノ御為御助言可被下旨乙名敷申セ、必ス過去候儀

ヲ責上ルナト深御戒御遣ノ由、此末向へ御立輪被下候(論カ)
テハ、以ノ外ナル御事ト御深慮ノ由、御考練文ケカト
奉存候、

一 賀宮ヨリ五日期、大久保一藏御用有之候得共、先日ヨ
リ虚病被相煩候故、私罷出候処、

(本)「(光)慮」
御両殿様此度ノ御建言、 叡感ニハ被 思召候得共、

難被遊 御採用、表向伝 奏ヨリ達可有之候得共、内
見モ為致候儀故、前条云々ノ趣共被仰聞、自分ラ共ヨ

リモ可申旨、御談相成候段被仰聞候間、 御国許へ
可申上旨御答申上置候、夫ヨリ正三卿へモ参上仕候処、

前条ノ次第細々被仰聞候、 山宮ハ不詮立儀、呼立モ

面働ナリトテ、高崎ヲ以テ形行被仰聞候、 條公へハ

佐次右衛門殿御出之処、云々被仰聞、ハルク存異ナト十

篇計同シ事ヲ被仰聞、余程後難ヲ御恐レノ御口氣ニ候

程、能御答申置候旨承知仕候(本)「御建言御採用ナシ」

一一 橋徳川中納言トノカ、跡目相続丈ハ被致候様ニ候処、

イマタ一橋ヲ名乗候由、 條公ノ御心得違ニテ為有之

趣ニ承、大事之事ヲ間違トハ羶眉之事ト被仰聞候、一

橋望願ニハ、御暇参 内ハ八日ニ仕、翌九日直様発途

仕候、出藝ノ日賦ニテ、 大樹公喪ヲ発可申様奉願上

候、左候ハ、徳川跡目相続ハ御受可任、將軍職ノ儀ハ
一切御断申上、当世体是迄ノ旧弊、且ハ姑息ノ御古義
ヲ被

思召被下候テハ、決テ相濟不申、イツレ至公至平ノ御
沙汰ヲ以、断然其任ニ絶タルモノヲ御引揚、加賀ナリ
薩ナリ仙臺ナリ諸藩ナリ家族ナリ被仰付度旨、細々於
御前申上ラレタル由、正三卿ヲレハソコニヲラナンド
故不承候得共、右通被申タト承候旨被仰聞候、

一 御警衛ノ儀、薩モ追々人数差登申由、式千余モ可有之、
會モ四五千位ハ御座候、其他モ彼是御座候間、夫ニテ

御事足可申、花城ノ儀ハ大藏大輔へ談合、留守頼談之

合ト被仰候由之処、越之酒井十之丞 山宮へ罷出、主

人ハ頭ヨリ説之合サルコトニ付、決テ不請合ト申居候

旨相晰候ヨシ、伝承仕候(本)「(再)夢紀事参照」

一 是迄建言申立候諸藩、且事ヲ左右ニ譲リ居候藩々、一

橋ノ奸雄ニ被鼓舞可申モ難計、如何罷成可申哉、是ニ

テ真ノ正奸ノ藩、頭然相分可申、尾・宇和島・越杯動

申間敷候、

一 御建言ニ付、表向伝 奏衆御達ハ、以別紙首尾申上置

候、

右ハ

御建言ニ付、

朝廷御議論之御手続承知仕候俵、書綴候形行ニ御座候、決テ聞洩ノ儀モ可有御座候哉、何分遺憾之次第御座候、乱筆御推読可被下候事、

此節追々人数御差登ノ処、去月廿三日之夜、今出川東寺町辺、夜入過会人甲冑・手鎧・鉄砲ナト相携、大狼狽ノ様子承候間、何事ニテ右様ニ罷成ト探索仕候処、此節人数上京ニ恐怖イタシ候折柄、長ヨリ

朝廷ヘノ哀訴、諸藩ヘノ告文ヲ持廻ニテ仕出候処、一昨年長ヨリ犯闕前右様ノ手数有之、決テ事ニ可成トノ事ヨリ大ニ奔走、守護職屋鋪ヘ馳集リ候故、夫々手鎧・鉄砲等ハ其俵屋鋪ヘ召置差返シ候ヨシ、右ニ付會津ヘ懸合、今出川寺町辺ハ專會下宿、且施行中ノ儀ニ付、以御威光取締、且町方ヘモ御諭戒可被下トノ趣ニテ候処、諏訪常吉海江田方ヘ即日參、御挨拶ニ參候方ニ吟味イタシ、英御懸合相成候トノ趣ニテ、ヒトク誤リ顔ノ向先キモ無之、汗顔ノ至リト平誤之由、一笑ニ絶タル事ニ御座候、右ニ付西ハ室町近辺、東今出川辺ノ町長ヲヨビツケ、以書取布告イタシヨキ候、其文言別紙

ノ通ニ御座候、會ヨリモ同様ノ手数為有之由、末条ニ自然事アラハ、早速此方ヨリシラスヘキトノ趣有之、イマタアンシンハ不出来ト、町方ヘモノ笑ニ仕候由ニ御座候、御人数追々上京ニ付、夥シク申フラスヨシ、寔ニ好機會ニ御座候布告ニテ、人氣ハ余程静タル様子ニ御座候、會ノ混雜ウロタヘ実ニ笑止ノ次第御察可被下候、

三三ノ二

右ニ付、筑前ヨリ使欠落三人逃来リ、当分上御屋シキヘ被召置候由、内一人ハ六月末方罷歸リ、二人ノ事無事ニ罷成候ハ、帰国可致候得共、モシ不相濟候ハ、此御方ヘ召拘可被下旨申事ニテ、殊之外御丁寧ニテ候ヨシ、其使ニテ之段申モノ御座候事、

三三六 中路権右衛門報告(京都及ヒ江戸ノ雜説)

七月九日膳所ヨリ京都町奉行所ヘ差出ニ相成候
人数名前

高橋(正功)作也

保田(信經)信解

森(祐信)喜右衛門

野長訓、菅菰藩主
藝守へ申通シ、早々周旋有之度旨御沙汰之事、

田中藤馬之允
高橋雄太郎(幸祐)
阿部権之丞
増田仁右衛門
深柄俊助(当道)
關元吉(敏樹)
渡邊宗助(經)
植島錠之助

占十一人

一江戸ニテ被召捕候旗本五千石頭ニテ、多人數党有之、
筑波様ノ事催シ有之、押借リ金二万兩余致候事露頭ト
申事、

一右党中之者ニ候哉、芳原遊女召列レ京都へ罷越、戸田(忠実)
大和守殿屋敷内ニ潜居候処、去ル十九日西町奉行所ヨ
リ召捕ニ相成候由、

一六月廿二日藝州家老代野村良之進大坂ニテ登城、御老
中ヨリ御演達大意左之通、

御懇ノ御沙汰之上御尋ノ儀有之候間、毛利大膳末家毛
利淡路・吉川監物迅速登坂可致、廉立候兵器可致遠慮、
供廻リノ儀ハ相当之人数召列候テモ不苦候間、此段安

一長州之事情種々有之候得共、肝要之処ハ昨年尾州公御
發行之砌、吉川監物専ラニ致周旋、三謀臣之首級差出
シ、其余參謀之者夫々嚴科ニ所シ、尤於父子恐入候廉
ヲ以、伏罪仕候ニ付、相当ノ御咎ハ可入畏之覚悟ニ候
得共、寛大之御処置ト被 仰出候上ハ、本領安堵ノ所
置ト存罷候所、尾州御陣払後奇兵隊妄動之儀ハ有之候
へ共、是又國中ニテ鎮静之上ハ、此上ノ嚴謹ハ無之哉
ト存候処、此度大樹公御進發ノ儀ハ一円承服難致不分
テハ、先以 公武へ対シ候儀ハ閣キ、吉川監物去年之
周旋振実否及糺問候上、公武へモ応接之次第モ有之
様申立、國中一同奮發罷在候由、

一長州領入口制札写、
周防・長門両国之太守菽宰相事 神国之掟ヲ守リ、一
天之君ヲ守護シ、犬羊ニ等シキ外夷ヲ攘ヒ、
皇国ヲ治メント欲スル(ママ)領分へ軍馬ヲ指向ントスル
者於有之ハ、仮令幕府ノ命タリトモ即刻打捨、一人モ
生返シ申間敷、仍テ制札如件、

吉川 駿河(經幹)
毛利 筑前(元統)

右承知致候間申上候、已上、

六戸〔親基〕美濃

中路〔延生〕樞右衛門

内田仲之助様

吉井幸輔様

二二七 茂久・久光二公御連署御建言

慶應二年丙寅七月十日前ノ濱出帆、豊瑞丸ヨリ

伊地知壯之丞上坂御使ニテ

朝廷へ御建言

方今内外大小之憂患四方百出仕、実ニ

皇国危急存亡此時ニ可有御座候、抑今日之形勢〔付箋〕「移カ」推遷〔イ〕

たし候義、一朝一夕之根由ニ無御座、於

幕府冠履倒置之義不少、就中十年來外夷御処置振より

以往、天下人心痛怨離叛之姿ニ相成、憂国之士はか為

に非命に斃るゝ者数を不知、勤

王之諸藩国力を不顧東西奔走仕候次第、偏ニ

皇運挽回之至誠を以

聖朝を輔弼し、幕府を扶助し、藩屏之任を竭度と之赤

心ニ候処、

幕府駕馭之術を失ひ、偏照私親採択宜に不適候故、国

是一定、衆議合論之場合にいたり兼、悉ク水泡画餅と

成行候義、千載之遺憾ニ御座候、既〔朱〕「元治元年事」に一昨年来大乱之

機相頭、屢干戈を動し、幾多之蒼生を殺し候上、眼前

若州・信州辺之天災、及び丹波・大和之一揆、兵庫・

大坂・江戸〔朱〕「全兩人等ノ集合」之騷動〔朱〕伝承仕候、即今兵庫・大坂之義

将軍家御在陣中号令肅整、軍威四方ニ可輝之処、却て

足本ニ卑商・賤民之如キ嚴威を不憚大法を犯候義、所

謂民不堪命之苦情ニ出候事ニて、不可忍之次第ニ御座

候、最早鎮定之形ニは候得共、米価ハ勿論諸色未嘗有

之騰貴ニて、既ニ当年炎旱水溢之憂も不被凶、此上兵

端を開キ候ては、争乱日長シ、率土分崩、不可救之勢

ニ及び候は案中ニて、其時ニ当り外患を受候節は、何

を以防禦可仕哉、是卑臣等年来痛心慨歎する所ニ御座

候、然は内政を變革し、

皇国を起ス之大策、一日も不可捨之急務ニて可有御座

候得は、長防御征討之義御取掛之事ニは候得共、既ニ

一昨年悔悟謝罪之道相立、尾張前大納言殿解兵之上、

被遂

奏聞候義にて、其節引統御所置振被 仰渡候得は、奉
謹承候義案中ニ御座候処、時機を失ひ、

朝廷寛大之

御趣意ニ反し、御再討御進発と称し、更ニ御出軍御不
審筋御札明之処、御了解被為在候由にて、忽チ本ニ復
し、御裁許之名目を以、尚大兵を国境ニ臨せ、御所置
振被 仰渡候義、解兵后之御不審御晴相成候ても、御
再討之兵御解キ不被成候ては、本ニ復し候事実不相顯、
且不得止兵を用られ候御訳ニも不奉伺候得は、仮令
奏聞之上とは乍申、条理不相叶訳故、恐ながらも其筋ニ
承服仕間敷、前文兵庫・大坂之商民共さへ、其令を不
恐ほと之事候得は、數百年來譜代恩顧之長防士民之情
義、尤無余義被察候処、歎願之筋をも御採用不被為在、
御裁許之御沙汰相拒候とて、則問罪之師被差向候は、
相当之御所置とも難申上候、且又名代として出藝いた
し候穴戸備後介等、御不審被為在候筋を以、幽閉被仰
渡候義、問罪之師ノ挙動ニ無之候、道理を以御詰問之上
閉口して退去いたし候ハ、必国民も皆罪ある事可
存知訳ニ御座候得共、却て口を不開様ニ仕向られ候は、
只憤怨を起させ候計之拙策ニ陥るのミならず、理非曲

直ハ不正ものと、天下ニ布告いたし候訳ニ相当り、
殊更防州大鳴郡江之暴発ハ、海賊之所業ニ類し候義、
実以歎息之至ニ御座候、今般之始末防長之士民憤怒を
懐く計ニ無之、大ニ天下之人心ニ関係可致訳にて、如
何なる大乱ニ可立至哉も不被計事御座候、仮令可討之
道理有之候ても、

皇国之興亡ニ相関り候大難之時に臨ミ、起すへき之急
務を置て、却て亡ニ陥る之道に被為就候義、実以絶言
語、奉恐入義ニ御座候間、前条緩急大小之弁、治乱興
亡之機

御明察被為在、非常格外之

朝議を以、寛大之

詔を被為下、霈然之恩を被為施、持危扶顛之

聖断被為在、

視聽を四方ニ開給ひ、天下之公議正評を尽し、政体変
革、武備興張、遠戎賓服、中興之功業を遂せられ、上
御祖神之

恩ニ報ひ給ひ、下蒼生塗炭之苦を被為救度御儀と奉仰
願候、誠以重大之事件、卑賤愚魯之小臣等輕卒奉申上
候義、不当之重罪ニ候得共、乍辱

朝廷寛大之

御趣意兼て奉伺候趣も有之、且小臣等拔群之

聖恩を奉荷候得は、

皇国御浮沈ニも相懸候切迫之機ニ当リ、黙止罷在候ニ

不忍、冒万死血涙涕泣言上仕候、誠惶誠恐謹言、

七月「九日」〔采〕 松平修理大夫

島津大隅守

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

二二八 薩藩出兵御断書へ御付札写

書面申立ノ趣ハ有之候得共、此程申達候通、寛大ノ御
趣意ヲ以御所置相成候末、

朝命遵奉不致、御裁許違背ニ付、無余儀問罪ノ師被

差向、抗命ノ者御誅鋤被成候段 御奏聞ノ、〔上脱カ〕猶 御所

御沙汰ノ次第モ有之候ニ付テ、早々出兵、

朝幕ノ御趣意相貫候様可被致候、

右七月份倉候ヨリ御渡シ、

七月九日着、同十一日夜御留主居御呼出ニテ辰ル、

二二九 〔大坂出銀ニツイテ一説〕

又一説ニハ、大坂出銀 公義ヨリ差留候ヤ、全ク出銀

不致、十三家立入之者共モ病氣トヤラニテ出勤モ不致、

タマ〜罷出候様申聞候得共、何トモ知レヌモノヲ名

代ニ差出杯ニテ、夫故京都守衛方ハ勿論、何レモ御賄

金杯不出、実ニ込入居候由、夫ニハ一万八千兩モ被差

登候也、

七月廿日承候事、

二三〇 〔町田等帰国ニツイテ〕

町田民部成久

〔稱感〕名越 〔慶之進〕東郷 〔高見弥一〕高宮

右去春夷国へ被遣候内、去ル十七日晚長崎へ渡リ、夫

ヨリ阿久根ニ着帆ニテ罷帰候由、何カ事ヲ仕出候半、

マツ女遊杯ノ事也ト申人モ有之候、

二三一 〔西洋学問制度ニ関スル仰出〕

丙寅七月廿九日仰出ニ、

西洋各国之事情追々相開、学問ハ勿論、技芸ニ至迄日

々新ナル次第候処、只彼之所作而已心ヲ留候テハ、国

家振興之道無覺束、終ニ外国之制度ニ推移候様相成候
テハ、專

皇国之体ヲ失候事ニテ、人氣不相振基ニ候、就テハ英
国杯ニヨヒテハ振立候儀、至一之処ヨリ治乱之政事モ
并進、人民競立候訳ト相考候テ、風土人質ニ依リ、制
度ハ彼ノ所用之良事ハ、必所用時ニ応シ斟酌有之候様、
可申渡旨被仰出候条、此旨向々へ不洩様可申渡候、

七月

右衛門
〔桂久武〕
〔小松清麿〕
帶 刀
〔島津広巻〕
伊 勢
〔川上久運〕
但 馬

二三三 英国公使鹿兒島ニ来ル

蓋紙銘書横濱新報訳稿寅十一月トアリ

横濱新報第二十三号千八百六十六年第八月廿七日報

(Cable of Vincent Kirby)

長崎在留ノ英人本国ノ全権・水師提督等ニ陪從シ
薩州廳府ニ至リ、自ラ目撃セル事情ヲ詳載シ、横
濱ニ在ル同社江通信セル書翰ノ写

日本国南方西九州ノ形勢ニ関セル事情、逐一足下ニ通信

スヘキ約ヲ為セシ以来、未タ曾テ報告スヘキ須用ノ新
報モ無カリシ、然レ共方今最モ有益ナル一事起レリ、
兼テ足下ノ想思スル如ク、実ニ日本ノ富饒ヲ以テ、鎖
閉セル全国ヲシテ貿易通商ヲ為サシムル大策ノ楷梯ナ
ルヘシ、日本ニ於テ交際ノ利ヲ得ルモノハ勿論、下工
商ニ至ルマテ、各其産業ヲ盛大ニセントスル輩ハ、雀
躍スヘキコトナリ、此度全権并水師提督、本国政府ト
商法トニ関シ鹿兒島ヲ尋訪セルコト是レナリ、薩州侯
以下彼ノ国人、精心誠意ヲ以テ応接セル事実ヲ慮ルニ、
薩国ノ本国ニ交ハル懇親ノ確証顯ハレリ、此ノ如キ前
例一度行ハル、時ハ、必ラス南方ニ在ル他ノ諸侯モ速
ニ此轍ヲ踏ムニ至ラン、是レ薩侯平日名望高クシテ、
諸侯ノ巨魁タル所以ナリ、是迄日本縉紳家ノ固有セル
風習ヲ一洗スル而已ナラス、就中通商ノ繁盛ヲ妨ケル
弊ヲ除却スルニ至ルヘシ、日本ノ諸侯ハ渾テ各独己ノ
国論ヲ固執スル故ニ、諸侯商法ノ權ヲ握リ、自ラ通商
シ、且商估モ能ク一致シテ、得意ノ外国商人ニ対シ、懇
親スル処ニ非ラサレハ、貿易常ニ盛ナラザリシナリ、
愚按スルニ、全権此度ノ一訪ハ、是マテ余輩日本ニ在
リテ見聞セル中ニテ、最モ必須要用ナル処置ナリ、本

国政府ニ対シ、至テ便宜ナル交法ナルヘシ、却説仏人ハ大ニ大君ヲ励シ、之ニ結ヒ通商ノ利權ヲ專ラニセント欲スト、余輩ノ見聞スル形勢ヲ以テ慮ルニ、敢テ大君ニ大ナル利益モアルヘカラス、亦按スルニ、仏人ノ此策ハ大ナル謬ナラン、目前ニ於テ通商ノ勢權ヲ得ントスル貪心ハ、譬ヘハ黄金ノ卵ヲ産スル鷲ヲ切害スルニ似タリ此ハ若シ大君倒ルレハ、何益ノ有ト云フ歎ナルヘシ、大君ハ十五ケ月以前東都出立ノ時ニ引率セル兵力ヲ全フシ、再ヒ江戸ニ帰ルコト能フマシ、久ク因循シ、不得已遂ニ長州ト戦争ニ及ハレタリ、長州ハ両三年来心ヲ潜メ兵ヲ練リ、能ク整頓セリ、江戸ノ兵士ニ比スレハ、武器モ亦能ク整ヘリ、是レ篤実ノ商人ヨリ武器ヲ買入レシ故ナリ、反テ大君ノ狡猾ナル半士半商ノ輩ヨリ買上ケタル者ト異ナリ、且長州ハ自国ニ在リテ、其本陣ニ近ク、兵糧等ノ運輸意ノ如ク、自ラ主客ノ別有リテ、其利益謂フヘカラス、又同盟ノ諸侯アリテ、詳ニ敵ノ動静ヲ搜索シテ、之ヲ通信スル者アリ、必ラス是マテ無益ノ小戦而已ナラン、而大君ノ軍兵ハ諸方共悉ク敗ラレタリ、又今日馬關ヨリ報アリテ云、長兵小倉侯ヲ襲撃シタリ、此ハ殆ト馬關ニ対スル地ヲ領スル

諸侯ニシテ、大君ノ幕下ナリ、遂ニ長兵小倉領ニ上陸シ、要所一二所ヲ奪フタリト云々、副船將エートン馬關ノ景状ヲ探索セン為メ、当四日長崎ヲ開帆セリ、大君ノ將帥等諸方ヨリ長ノ領地ヲ襲ハント欲シ、反テ長兵ノ為ニ敗北セル事情ハ、定テ足下ノ聞知スル処ナラン、長州防禦ノ予備ハ充分整ヘリト云、一説ニ、日本帝及摂政等外国ト新条約ヲ結ハント欲シ、大ニ狐疑セリト云、南方ノ諸侯ハ江戸ニ在ル諸侯ト一致セス、決シテ条約ノ条則ヲ守ルヘカラス、是マテ大君ト而已取結ビシ条約ヲ改メ、帝及ヒ諸侯ト結ハントスル条約ノ条則ハ、已ニ訳アリテ若干人ノ手ニ渡レリ、此輩共ニ之ヲ好ム処ナリ、是日本新報中有益ナル事件ナルヘシ、此ヨリ全權等履行ノ事情ヲ告ケン、先ツプリンセスロヤル・セルベント(Princess Royal)各船ハ、第七月廿五日ニ於テ長崎港ヲ開帆セリ、サラミス(Salamis)名船ハ翌日同港ヲ開帆ス、全權ハルリー妻パークス之二乗セリ、余輩ハ廿六日午後二鹿兒島ヨリ八九里距リテ投錨セリ、午後第二字ニ共ニ蒸氣ヲ整ヘ、砲台ノ近傍ニ投錨ス、尤モ薩ノ砲台ニ於テ英國ノ旗章ヲ挙ケ、祝砲拾五發放ス、速ニプリンセスロヤルヨリ十五發返砲シ、畢リテ後投錨シタリ、暫時後余

輩日本ノ旭旗ヲ挙ケ、十九発ヲ以テ薩侯ヲ祝セリ、砲台ヨリモ亦一發毎ニ此報放ヲ為シタリ、亦薩侯ノ家老等ノ來訪ヲ祝シ、以テ初日ノ砲發ハ終レリ、午後遅ク全權并水師提督外若干名上陸セリ、余輩ハ薩侯警護ノ士卒ト共ニ城下ヲ逍遙シ、其光景ヲ目撃スルニ、日本ノ他処ト異ナル者多シ、就中一奇事アリ、麩府ノ士民ハ江戸ノ住民ノ如ク愁容、或ハ憤怒ノ色ナク、真実ニ揖礼シ、只ニ笑語スル而已ナリ、城下ノ半途ニ於テ、シャンペイエン^酒其他清鮮ナル者若干ヲ予備シ、以テ余輩ヲ勞ヘリ、將ニ日没ノ時ニ至リ各婦艦ス、此日少ク疲ルト雖モ、南方大諸侯ノ都府ニ於テ、初日ニ此ノ如キ饗応ニ逢ヘシコトヲ共ニ喜悅セリ、又余輩ノ上陸中ニ薩侯閣下船中へ使ヲ遣ハシ云、軍艦滯帆中英人十五名乃至二十名ヲ饗応セント欲ス、且明朝閣下自ら全權・水師提督ヲ訪ヘ、相携テ共ニ上陸セント欲スト云々、此ニ於テ各人薩侯ノ位階ヲ論スルニ、実ニ其卓見ニ驚ケリ、大君ノ如キ不礼ナル容儀ト相反セリ、大君ハ南方ニ於テ擢タル諸侯ニ比スレハ、其識量容儀共殆ト相反セリ、

翌日朝十一字ニ至リ、薩侯ノ端舟プリンセスロヤル船

ノ側ニ來着、閣下艦ニ上ル、礼ヲ以テ警衛セル船室ニ入り、次第ニ手ヲ把リ相祝シ、而后艦頭ニ進ミ薩侯ヲ祝スル砲發ヲ一見シタリ、其容貌ヲ望ミ見ルニ、威儀堂々トシテ実ニ大名ノ名ニ違ハサリシ、余此ノ如キ長身壯勇ナル者ハ、曾テ印度ノロヒラス^{種人}亞臘比亞人中ニ於テ、只一度之ヲ見タリ、候ハ真正ノ日本人種ノ容儀ヲ備ヘリ、余輩曾テ日本ノ画図ニ於テ見シ者ニ違ハス、其眦ハ斜ニシテ長シ、此眼光ヲ以テ其性ヲ知ルニ足ル、亦島津三郎ハ^{余輩ノ想像ト異ナリ}薩侯ニ比スレハ短身ニシテ肥大ナリ、起居傲然トシテ、其容儀ハ敢テ雅正ナラサリシ、然レ共王公ノ容貌ナリ、按スルニ、此人ハ日本ニ於テ最モ才略アル執政家ノ第一人ナルヘシ、扱祝砲終ルヤ否ヤ、薩侯艦ヲ横切り艦ノ一方ニ至リ嘲笑セリ、是レ薩ノ砲台ヨリ快手ニ返放スルヲ見ント欲シテナリ、此砲發後ノ数事ヲ今詳ニ足下ニ告ケン、薩侯此返放ヲ一見シ、水師提督ノ船室ニ下リ、其処ニ一二分時ヲ経テ後上陸シ、己ノ第殿ニ歸去ス、英人十七名随從シテ共ニ上陸シタリ、其納涼殿ヲ見ルニ、前ハ港ニ面シ、十ポンド・十二ポンド銅製ノ野戰砲ヲ以テ前面ヲ堅メタリ、全權ハルリ―端舟ヨリ上陸スル時、祝

砲十五発ヲ放テリ、然レ共此ニ少ノ謬アリ、其故ハ外国事務ノ官人ヲ祝スルハ、青旗ヲ用ユヘキニ、誤テ白旗ヲ建テタリ、而后余輩殿堂ニ昇ル、全權井水師提督・Charles G. Stewart 訳官シーボルトノ三員ハ深殿ニ嚮導サレタリ、其処ニ於テ島津三郎当時大隅守并薩侯対座シテ、互ニ既往ノ事ハ咎ムヘカラス、以後和親懇篤ニシテ、決テ二国ノ間ニ於テ異論有ルヘカラサル旨、談判ニ及ハレタリ、此談話中ニ余人ハ皆外ノ納涼亭ニ於テ、家老ヲ以テ饗応アリ、凡半時ヲ経テ余輩再ヒ殿第二反レリ、此ニ於テ薩侯ニ謁ス、全權等モ亦深殿ヨリ出来リ、各其席ニ付ケリ、此ニ於テ最モ美味ヲ尽クシ、日本調ノ割烹ヲ以テ四十五種ヲ備ヘリ、実ニ驚クヘキ饗応ナリ、外ニ日本酒并シヤンペイエン・セルリー・ビール共ニ洋酒・獸肉等ヲ備ヘタリ、英人ハ渾テ長キ食卓ノ一方ニ座シ、一侧ニハ薩侯・島津并家老二名侍座ス、卓頭ニハ有名ナル輔佐ノ家老小松、卓尾ニ後見職一名対座セリ、白扨數行ノ間頻ニ飲食シ、互ニ祝礼ヲ行ヒ、最モ親キ交際ヲ以テ各笑語興酣ニシテ、日本ノ管絃ヲ調シ、凡一時中歌吹欲極レリ、終ニハल्ली・パークス云、今日ノ酒肴目錄ヲ破却シ賜ハ、共ニ夜間ニ至ルマテ留ラン

ト欲スト、我輩ハ園囿ヲ見ント欲スル故ニ、速ニ後段ヲ食シ其地ニ至レリ、今足下ニ其風景ヲ告ケン、其花園ノ好風景実ニ謂フヘカラス、各人一度此ニ来ル時ハ、直ニ兩三年間此間ニ寓セント欲スル思フ発スルニ至ル、只惜ラクハ一二分時ナリシ事ヲ、此ニ於テ共ニ烟草ヲ燻シテ後、饗主之嚮導ニ任せ、殿堂ノ前面ニ到レリ、其処ハ凡長二百ヤルド我百、幅六十ヤルド我三ノ地ナリ、此ニ於テ薩ノ兵卒操練ヲ為シタリ、其指揮官ハ我友人ノ門下ナリト云フ、我輩其歩操ヲ一覽ス、尤モ我輩ノ為ニ美シキ天幕ヲ張り廻シ、其中ニ酒并果物等ヲ備ヘリ、饗主ノ姿容ヲ察スルニ、酒食珍味ヲ以テ、吾等ノ意ニ満タサラン乎ヲ、常ニ愁フル色アリ、其丁寧極レリ、大砲調練ヲ見ルニ五百ヤルド我百ノ距離ニ方的ヲ掛ケ、十ポンドノ野戦砲ヲ以テ之ヲ打テリ、其習慣練熟驚クニ堪ヘタリ、各砲ヨリ十二発ツ、輪転発放セル時、已ニ日没セントスル故ニ、各彼ノ親切ナル饗主ニ別ヲ告テ帰艦セリ、其翌日製造局ニ到ル、此処ニハ通常ノ器械備ハレリ、午後第四時ニ薩侯ノ兄弟五人等、西洋風ノ調味ヲ以テ采吾輩ヲ饗セリ、其中末弟ハ纒十歳ナリ、各篤実ノ童子

ナリ、今日ノ饗応中最モ奇觀ハ、一度ニシユツキング
ピグ三尾此シユツキングピグハ切殺ヲ加ヘ卓上ニ出テ来レリ、吾
スニ煮燻シタル豚ノ子ヲ云フナリ輩去セントスル時、既ニ八字ヲ報セリ、依テ漸ク辞
シテ帰船セリ、

第三日ハプリセスロヤルノ兵卒ヲ以テ操練發放シ、薩
侯及ヒ五人ノ兄弟ニ之ヲ見セシメン為ノ準備ヲ為セ
リ、島津ハ疾ヲ以テ是ニ臨マサリシ、先ツ港内ニ於テ
軍艦ヲ運轉シ、三四時間發砲ニ及ヘリ、而三百ヤルト
ヨリ千八百ヤルト我九
百間ニ至ル距離ニ的ヲ掛ケ、盛ナル
調練ヲ為セリ、多クハ的中セリ、艦上・陸上ノ友人等
此發放ヲ以テ少ク驚ケリ、大砲調練終リテ、二十四ポ
ンドノ火箭三挺ヲ發セリ、此火箭ノ激射ヲ以テ、大ニ
薩人ノ眼ヲ開キタリ、水師提督看客ヲ勞シ、終リテ後
余輩ハ翌日上陸ノ準備ヲナセリ、青備ノ海軍卒五六百
人ヲ率ヒ、英軍ノ歩操進退ヲ薩侯ノ一覽ニ備ヘン為メ
ナリ、然レ共操練場地隘小ニシテ、漸ク百五十人并野
戰砲一対ヲ以テセサレハ、歩操成リ難シ、軍卒悉ク真
ノカリトリデコレハ薬包
ノコトナリヲ用ヒ、以テ發砲セリ、黄昏ニ
至ルマテ編成開列、數式ノ調練ヲ為セリ、其時サラミ
ス艦ハ蒸氣ヲ貯ヘ、操練場ノ近涯ニ待テリ、是レ全權

ハल्लीヲ乗セ崎港ニ到ラン為メナリ、別レニ望ミ、
島津三郎ハल्लीハイクスノ手ヲ握リ、大ニ分袂ノ情
ヲ惜ミ、航路ノ健康ヲ祝シ、堅ク再会ヲ期シテ手ヲ分
テリ、全權ノ妻パークスモ侯族ト互ニ手ヲ把リテ別レ
リ、而後祝砲十五發放シ、其砲烟ノ中ニサラミス艦ハ
錨ヲ上ケタリ、

其翌日ノ遊樂ハ実ニ大ナリ、吾輩朝三時ヨリ遊獵ヲ始
メリ、凡英人二十名薩人四十名ニテ、港上六里許ノ処
ニ到レリ、其風景ハ横濱近傍ノ地ニ似タリ、然シ樹木
ハ一層森鬱タリ、林中ニハ鹿・牝豕・猿猴等多ク住メ
リ、一群ノ獵犬狩師等之カ嚮導ト為リ、纔ニ回ノ獵ヲ
經テ其獲物囊ニ滿チタリ、鹿七・牝豕ノ四ツヲ獲タリ、
鹿七尾中ニハ各四様ノ斑点ヲ画シ、至テ美麗ナル獸ナ
リ、此日又家老等ヨリ饗応アリテ後別ヲ告ケ、其余ハ
暫時ノ交ト雖モ、共ニ親友ノ好ミヲ為シ、畢リテ薩ヨ
リ水師提督ノ旗章ヲ举ケ、重砲ヲ以テ祝發ス、直ニ薩
州家ノ旗章ヲ翻シ、之ニ返發シ、ソノ烟雲ト共ニ魔港
ヲ開帆セリ、

薩ヨリ各人ニ賜ハル処ノ躡等ノ細事ハ、敢テ之ヲ告ケ
ス、魔府城下并砲台等ノ奇觀景狀ハ、必ラス他ノ友人

ヨリ足下ニ報告スヘシ、分袂ノ時ニ至リ友人ノ親情ニ感シ、思ハス分離ヲ惜メリ、此書ハ只ハルリー・パークス麗府行ニ於テ為シ得タル功勞ヲ足下ニ告ケテ、以テ筆ヲ止ム、余按スルニ、薩州ニ於テ前ヨリ固執セル議論ヲ遂ニ一變シ、共ニ符合セシメシナラン、
実ニ薩侯ハ方今日本人中ニテ最モ磊落ニシテ、卓識ナル者ナルヘシ、近来開成セル富強ノ策ヲ以テ之ヲ慮ルニ、必ラス薩侯ハ速ニ縉紳家中ニ於テ最大位ニ進マン乎、是レ商估ノ為メニ最モ希望スル所以ナリ、

於崎港千八百六十六年第八月六日 某

本邦慶應丙寅第七月

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

此新聞紙ヲ視テ、果シテ予カ見ニ不違ヲシルヘシ、此書中ノ内ニ深殿ニ入り、稍一時計談話シテ、既往ハ、咎ムヘキニアラス、和親シテ已後互ニ相応可致トノ一事、寔ニ慷慨至極、其段実ニ千歳遺憾ニシテ、胆ヲ破リ腸ヲ断ニアラズヤ、

二三三 島津圖書御家老同様云々達書

(久松)
島津圖書殿

右ハ御家老座へ被仰付候ニ付、別段 思召之訳被為在、定方御用番繰合せ、御家老同様名前ヲ以、御用致取扱被 仰付候条、御達可申旨被 仰出候条、向々へ可致通達候、

七月 右衛門

二三四 薩州建白奉呈ノ手続

慶應二年丙寅

七月十九日夜八ツ時頃、飛鳥井中納言帰京、
(雅典)

薩州ヨリ以封書武伝野宮家へ建白差出シ、
(定切) (朱) (前記参照) 関白様へ

大久保市蔵罷出、大議論申上、嘉陽宮様へモ罷出申上候処、尤成次第二候得共、迎モ当今ノ形勢於朝廷実ニ被成方モ無之等ハ、一橋・桑致説得、言路ヲ開候様被仰候トノ事、

二三五 薩州建言書ニ就キ會津藩照会書写

大坂詰 會津

公用方 京都

同所

以手紙致啓上候、然ハ薩州建白伝奏衆へ差出候処、御差戻ニ相成候処、同藩留主居容易ニ承知不仕、強情申候ニハ、

天覽ニ相成候様御取計被下度旨、申張候ニ付、御答ニ、天覽ニ相成候筋ニ候テハ、素ヨリ御受取ニ相成候得トモ、右御受取ニ不相成筋ノ書ヲ

天覽ニ入候儀ハ、必至不相成旨被仰聞候得共、左様ニ候得ハ、御内々ナリトモ御覽ニ御入レ被下度、強テ申張候ニ付、猶衆議ノ上可及何分被仰聞御帰シニ相成候ニ付、今日惣御参内ニ相成候次第、然ル処極内々ト申事ナラハ、無拋事也ト申御模様ニ付、右様ノ事ニテハ必至ト不相成候間、御嚴重ニ御返却被成下候様仕度旨、小寺・野村一同殿下へ申上候処、左様ニ候テハ、幕府ニライテ愈以テ右建白御指戻ニ相成候テハ、右ノ手順ヲ以御差戻ニ相成候様可仕旨、高島申聞候趣ニ候間、此状届次第至急ニ御運ヒ被下候様致度、尤右書面差戻ニ相成候テハ、急速御申越御座候様、此段態ト時附ヲ以申述度如是候、以上、

七月廿三日八ツ時

本文今日右御評議ニ付、態ト御参 内ニ相成候段相認候処、右ハ御参 内 御定日ノ由ニ候間、左様御心得可被下候、且又伝奏衆御返答ノ儀モ筆ニ、^(イ)左候得ハ分明ノ様ニ候得トモ、本文程曲直文明ニ被仰聞候様ニハ不相聞、詰リ強情ニ申張、強テ御被下事ニテハ、何レ變事ノ起ラント申事モ難計様ト、此節ノ言ヲ咄奉要候様ニモ相聞候、武辺スヲ御取扱被成兼候事故、御尤ニハ候得共、何モ御差戻ニ相願度候間、本書ノ通其御表ニライテ、至急ニ御戻シ方御運ニ相成候様、御尽力ノ段奉願候、已上、

二二六 寅七月薩州候ヨリ被差出届書写

此節長防御討入ニ相成、兵端相開候段因元へ相達、実ニ天下之大変ニ付、兼テ

禁闕御警衛ノ命ヲ奉シ候得ハ、一際嚴重行届、其仰ニ堪候様無之候半テハ不相濟、不取敢一隊ノ人数差出、蒸氣船二艘^{付送}接海へ入港、追々京着ノ賦ニ御座候間、当節柄ノ事ニ付、此段不差置御届申達候、以上、

七月

松平修理大夫

二二七 巷説

大坂江薩〔卷一〕ノ蒸気船二艘・夷船一艘来船、一橋昨夜馬ニテ下坂、今廿一日會・肥下坂之風聞、

七月廿四日以封書薩建白武伝へ差遣候由ノ事、当節薩人多人數入京、甚掛念ノ次第二候得共、京師御守衛御人數ト相唱候間、其似ニ致置候外無之ト會・肥ノ人申

居候由〔卷一〕浮言ニハ薩人三千五百人入京ト云々不備〔朱〕（實際凡一千人内外ナリ）

松平伯耆守内ノ藝州取扱、此比悉帰国為致候由、最早不及上坂在国ニテ可待、同時夫ニテ宜敷ト頻申諭候由、夫故安心ニテ在国ノ趣也、

二三八 禁闕守衛兵差登御賞詞

松平修理大夫

禁闕御警衛ノ儀被 仰付候処、当節柄ニ付猶又人數差登、追々上京ノ趣被 聞召、神明ノ儀 御満足 思召候事、

二二九 〔小笠原壹岐長崎差越云々〕

一小笠原壹岐守モ小倉ニ参居候得トモ、引取候由、当分〔長行〕

長崎へ参居候由、長州ニテ兵ヲ集メ、当分凡五六百人モ集居ヤトノ評判有之候得共、確ト不相分候、壹岐守殿弥長崎へ差越候儀ハ相違無之、園田彦左衛門長崎ヨリ申来候由、野村助七へ相嘶候由、シカレトモ何様ノ訳ニテ差越候ヤ、其事ハ全ク不相知候由、我等評議ニ、此上ハ夷人ヲ相頼候事ニテハ無之ヤト為申事ニテ候、但壹岐守殿本圖書頭ニテ、此モノ、建白ニテ長州征伐ニモ相成、殊之外豪傑ノ聞へ有之、此節一廉ノ働キモ可有之事候処、纔ノ一戦ニ長崎江被退候事、何様ノ訳ニヤ、不審ノ至リニ候、

二四〇 当時京師ノ世説

亀井隠岐守〔政談、津和野藩主〕

軍目附

御使番

長谷川久太郎三イ

二拾三歳

御徒目付 小永井五八郎

四拾五歳

御小入
目付 鈴木直八

外城士 島津清大夫

小銃隊物主

〔イイイ〕

右三人、先達テヨリ津和野城下ニ出張ノ処、今度隠岐

守長州家へ降参致候ニ付、軍目附ノ首級可差出旨激徒

ヨリ掛合ニ有之候処、亀井家ニテ切害ニモ難及、主従

トモ引渡候処、家来ノ者ハ不残差戻シ、三人ハ其俣山

口江罷越申候由、右ニ付テハ京接^(攝)ニ有之候隠岐守屋敷

向、其俣ニハ難差置、何ト軟御所置可被仰出ノ事、

右ハ御徒目付小島半助・志賀又四郎同役ノ衆中、大坂

ヨリ出京有之、噂聞取候事、

一 禁闕御守衛人数召連、上京ノ物主名録

小砲隊物主

一組戦兵

百四拾人ツ、

救応隊

大砲物主

〔マコ〕

喜入多門

島津良馬

二四一 慶應二年六月防長士民ヨリ薩州及ビ藝州

ノ両藩へ差出タル書面

大砲八挺
百六十人

今般徳川氏ノ暴挙、防長ノ士民奮激、終ニ戦ニ相成候

此節蒸気船ニテ

罷登リ候、

亦跡蒸気船ヨリ指揮次第繰出シ候賦ニテ、手当ニ相成

居人数六組ノ手当ニ御座候、

右ハ此節入込ノ薩藩ナリ、

七月

一組戦兵

百四十人宛

土師吉兵衛

益満與右衛門

大野^(彌助)五左衛門

有馬雄之助

井上助右衛門

染川五郎右衛門

千田^(直曉)傳一郎

松方正之進^(正義)

ハ、人ノ為ス所ニ非ス、天ノ為ス所、国家ノ不幸ニ非ス、国家ノ幸ト奉存候、東人如何様願出候トモ、苟モ和解ノ御沙汰無之様被遊度奉懇願候、此度ノ戦ハ毛利氏・徳川氏トノ私闘トハ毛頭不奉存、只管多年奉対天朝、跋扈無礼ヲ極メ、勅詔ヲ要シ、自己ノ志ヲ逞シク仕り候モノヲ、天朝ノ御為ニ誅罰シ、御事業復古、癸亥七月巳前ニ取回シ度存念ニ御座候、且今日ノ形勢夷人何時襲来仕候程モ難量候ヘハ、士民実戦調練仕置度候、且今日此俟ニテ和解止戦ニ相成候テハ、天朝ハ依然御微力、関東ハ弥夷人ニ屈シ、国家ノ衰弊益甚タシク、此時機ヲ失ヒ候テハ、恢復ノ期ハ有之間敷候、且防長国風上下トモ勅詔ヲ承リ候ヘハ、御沙汰義不義ニ拘ハラス奉承仕候、是故一昨年モ東人ニ被欺、危事ニ立至リ候、然処此度ハ士民等、勅旨幕議ト御一論ナラサル所ヲ弁ヘ、上下和睦先ヲ争ヒ戦闘シ、奸ヲ倒シ、尊王ノ実ヲ勤ムル心ニ相成居、是天ノ所為ト奉存候、乍恐東人ヨリ和解勅詔相願候ハ、叡慮一々遵奉シ、速ニ諸港ヲ鎖シ、反賊ヲ嚴科ニ処シ、奸吏ヲ誅罰シ、勤王ノ実効相顕候様仕レト被仰下度、右等改心精忠御奉公申上候ヘハ、戦ハ自ラ止ミ申候、今日ノ事ハ人身

ニ疾病アル如ク、人身ハ国家ナリ、疾病ハ東人ナリ、医師ハ防長ナリ、医師ニ任セ速ニ病根ヲ御絶チ不被遊候テハ、他日再発シ候節病人元氣衰ヘ、快氣六ヶ敷奉存候、王政ノ恢復国家ノ存亡、此一事ニ拘り候、不顧卑賤犯尊嚴奉哀訴候、至情御諒察願上候、
今上天皇御極二十年夏六月 賤 防長士民敬白、
薩州ニテハ、右ノ書面ニ左ノ書面ヲ添テ、加州・仙臺・越前等諸藩へ通達シタリキ、

別紙ノ通り長防士民ヨリ弊藩へ依頼之趣有之、至情無余義、乍併今日ノ形行ニテハ、取伝へ候儀モ不都合ノ姿ニ御座候ヘトモ、御互ニ武門ノ通情傍観ニ絶兼、無拠別紙相添及通達候間、御推量御承知可被下候、以上、

寅七月

松平修理大夫内

内田仲之助

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應二年八月

〔扉に、表紙の文字の外に「元困事執筆史料」
（紙数八〇枚）の記載あり〕

目録

谷村小吉門口ノ張紙
 太宰府出張大山格之助書翰
 道島家記鈔
 新納刑部長防戦況報告
 金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 安井仲平ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰
 三條實美ヨリ島津父子へ書翰及ヒ筑藩正奸人名

外国方支配定役菰田謙吉内話聞書
中路權右衛門探聞書

勝安房守休戦ノ為メ藝州下向ノ報

伊地知壯之丞ヨリ大久保一藏へ書翰

原市之進遭難ノ報海江田武次

西郷吉之助ヨリ大久保・養田へ書翰

在太宰府川畑伊右衛門ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

寺島陶藏ヨリ伊地知壯之丞へ書翰

小松・大久保・西郷等ノ建言

〔金子清邦ヨリ黒田清綱へ書翰〕

道嶋家記鈔藩士会津藩士ト私闘ノ概略

土肥謙蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

幕府探索書

薩藩ヨリ差出ス十一ヶ条建言抜萃

或人探索書

金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔西郷征長和議斡旋ニ付テ〕

英国公使慶島ニ來ル外国新聞抄訳

小松帶刀上京

二四二 谷村小吉門口ノ張紙

奸賊集所ト式行書大文字ニ書テ、谷村小吉門〔富田〕ヘ張付有之由、

八月三日承候事、

二四三 太宰府出張大山格之助書翰

太宰府出張大山格〔綱良〕之助友人某〔市来四郎広實〕ヘ來翰左之如シ、

今四日三雲氏〔藤一〕極急帰国ニ付啓上仕候、中略ス、楮小倉表ノ次第、誠ニ絶言語候次第ニテ、去ル廿七日〔七月廿七日〕長州勢逆寄セニテ、小倉・肥後・幕勢ト大合戦有之、幕勢ハ例之通直ニ逃ケ出シ、肥後勢ハ随分都合克ク相働キ候由、其形行昨夕ヨリ今朝ニ掛ケ、熊本人ヨリ委敷承候ニ、是迄閣老ヨリ達之次第、彼是不服之儀多ク、廿八日肥後勢凡ソ上下一万三千余人、一時ニ小倉ヲ引取り帰国致候由、夫ニツレ佐賀・久留米其外モ同日前後ニ曳取り候由、夫ニ付閣老小笠原ニモ廿九日ノ夜ヨリ行衛不相知、多分ハ在所唐津ヘ逃行キ候半ト申ス事

ニ御座候、右次第ニテ小倉ハ頓ント進退究リ、晦日ニ至リ老若男女皆方々ヘ落チ行キ、終ニ壯健ノ人ノミ籠城致候由、尤晦日ヨリ市中其外自燒致シ、小倉城内士家ハ不殘焼払籠城之処、昨二日長州勢押寄セ、城中ニハ必死ノ勵致シ候得共、終ニ落城ニテ、昨夜迄ニ不殘落去、其内兼テ有名ナル島村志津馬〔實綱小倉藩家老〕ハ、随分豪傑ト相見得、一人城中ニ踏止リ、城ニ火ヲ掛ケ、自殺致シ候由、夕方ニハ城中火ニ相成リ、昨夜迄終夜空モ輝ク程ニ相見得申候、誠ニ散々ノ次第、然ルニ当藩〔宗〕ハ已ニ取懸ル勢ニ相聞得、今日之混雜御遠察可被下候、

一將軍家モ大變之由、困テ一橋公跡目ト申ス事ニ御内定之由、多分相統者御聞取相成候半ト奉存候、未タ委細之事申上度奉存候得共、別テ之混雜ニテ、後剋ヨリ博多ヘ差越筈故、荒々申上候、何分此末如何成行キ可申哉、且夕ニ相迫リ候事ニ御座候、

八月四日

尚々晦日ヨリ小倉表ニハ、上下老若男女諸方ヘ落行ク次第ハ、目モ当ラレ〔又カ〕有様ニテ、流石ニ長州人モ袖ヲ濡シタト申ス事ニ候、
藝州口ハ紀州侯出張之筈、

(本莊宗秀)

松平伯耆守御尋問之筋有之、大坂へ御召相成候由、

(池田慶徳)

因州侯ハ石州口惣督被仰出候得共、出張ノ向ニハ無

之由、小倉ハ全ク長州ヨリ乗取守衛致居候由、

二四四 道島家記抄

二四四ノ一

一肥後領ハ、御国之方段々閑所多ク出来イタシ居候由、

尤天草へ肥後ヨリ千人程、(卷一「美ハ凡上二百人内外」)守衛方トシテ差遣候様、公

儀ヨリ被申付、差出方有之候由、畢竟此御方長州同盟

ニテノ狐疑ヨリ、右次第ニテ候由、何分此ウタガイ残

多次第二候、イツレ名不正ハ国家ノ立行事無覚束、昔

ヨリ和漢共ニ無名ノ軍ニ勝利ヲ得タル事、全ク不相見

得深可考事也、

八月四日記ス

二四四ノ二

夷国米拾五万俵位長崎へ持越、此御方へ御取入相成、

望之者ハ長崎へ差越取入候様、尅俵四斗尅升位、白米

ニテ尅升凡七百文余ニ、直成相付候由候得トモ、取ニ

差越候者無之、御物方ヨリ御取寄ニテ、尅升ニ付尅貫

本マ、(本マ)文位ニ御壳渡相成候由、野米ノ様ニテ甘キハ全ク無

(増えるの方言)

之、イミル事ハ能クイミル候由、取モノ評判ニテ、イ

マタ慥成説不承候付、追テ可記事、

八月四日記ス

但夫故当分三盃入尅俵三拾六貫文位ニテ候由、マタ

少々ハ直成上リソフナ模様ニテ候由、

二四五 新納刑部長防戦況報告

(経灣)

御小姓与村田新八、去ル五日夜馬關より当所江着船い

たし候付、彼表戦争之次第承届候処、先月廿七日未明よ

り、長州勢大里江相渡、同所より赤坂迄半里余之所を

戦場ニシテ、小倉勢并肥後勢と相戦、当月朔日ニ相成、

小倉城江自ら火を掛、及落城、翌二日長州より小倉江

入込候段、別紙之通承届、其外諸方戦争之形行等、別

冊差出候付、相添差越候条、可被達

貴聞候、以上、

寅八月八日

新納刑部(久徳)

桂 右衛門殿(清應)

小松 帯刀殿(広兼)

嶋津 伊勢殿

川上但馬殿(久遠)

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

二四六 金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

此間ハ乍残念御承知之通ニ付、半途ヨリ引戻、遺憾此
事ニ御座候、然ハ昨日一條十郎相見候処、十三日ニ御
発程之由、川崎迄御餞送可申上ト奉存候、明日ハ内々
ニテ横井平四郎(侍巻)へ参り候積リニ御座候、早午牌(マ)ニテ出
邸仕候間、十二日ニ一寸モ拝顔仕度奉存候、明十一日
ハ横井行故(マ)、朝之内ニ候ハ、拜話可相成候、頓首、

八月十日

金子與三郎

薩州公ニテ

黒田嘉右衛門様(清徳)

緊用

二四七 安井仲平ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

黒田嘉右衛門様(衛、鳳軒) 安井仲平
華箋薰読、残炎如焰候得共、愈御清適之由、大賀此事

ニ御座候、然ハ大兄御帰国之命下リ、明後十三日御発
軛之由驚入候、御多用中不被棄置、遠路之処御国産三
品預御分恵、毎度御厚誼奉多謝候、六月末ヨリ麻疹盛
行、弊慮モ八九人相染、憂慮中ニ送日、何方へモ無音
打過、御様子モ久敷不承忍及遠別、一入残多奉存候、
此節ハ暴瀉病モ流行、上方ハ別テ盛ニ御座候由、暑中
之御遠路、食物等別テ被入御念候様奉存候、御帰国之
上、保田氏等宜敷御伝被下候様奉願候、頓首、

八月十一日

二四八 三條實美ヨリ島津父子へ書翰及ヒ筑藩正

奸人名

一輪呈上致候、秋冷之節候処、先以御勇健被成御座、
大賀之至存候、抑方今之時体ニ就ては、別て御憂慮之
義恭察仕候、猶為国家御尽力之程千祈万禱之義ニ候、
小生輩身上之義ニ付ては、昨冬以来不一方預御周旋、
西郷吉之助始毎々以御家臣、御懇示之段不堪銘感安慮
罷在、万謝難尽候、猶此上宜希度偏御依頼申候、忝亦
当藩之義は追々御承知之通、至当節弥增切迫之事体、

為

皇国不堪憂歎痛心此事ニ御座候、右ニ付ては先達已来
段々御説得御周旋之末、今日之形勢ニては、此後如何
可有之哉、甚以懸念致候、定て御賢慮も可有之、猶又
御周旋之義、渴望之外他事無之候、此度御家臣 大脇弥
五右衛門 帰国ニ付、愚意之旨密々相託申候、委細之情
実等御直聴被下、御取捨偏御賢考被成下候様、希望仕
候、心緒縷々難尽毫端、右概略是迄御無音打過候間、
御懇悉之段謝詞申述度、且以当節之事情旁密々寸楮呈
上仕候、尚期後音候、仍如此候也、恐々謹言、

八月十七日

三條實美

松平修理大夫殿

鳴津大隅守殿

玉机下

二伸、時下折角御自愛專要存候、乱筆失敬之段御海
涵可被下候也、

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

右ニ添別紙

以上執政

以上用人

又別紙

以上納戸頭

毛利内記
林丹後
櫛橋内膳

用人
大目付

黒田大和
小河民部

月成権大夫
吉田大煩
齊藤藏人

川村主鈴
小川縫殿

山崎彦兵衛
岸田作左衛門
大塚彦右衛門

浦上數馬
郡左近

野村東馬
久野一角
大音兵部
小河傳右衛門

格護頭取

神屋宅之丞

納戸頭

小河縫殿

頭取

石原直之丞

同

吉村 真

君側医師

武谷 掠齊

其他少々之奸物ハ如山

監察

三宅 孫作

同

櫛橋仁左衛門

右之者共、先ツ巨魁正邪之弁ハ、追テ委細記シ可申上候、

○衣 斐茂記

○建 部 武彦

○齊 藤五六郎

○川 合新八郎

○月 形 洗蔵

△河 合 茂山

○伊 丹真一郎

△今 中作兵衛

△江 上 榮之進

△江 上 源兵衛

△安田喜八郎

□森 安平

△林 泰

□萬代重兵衛

○海 津 幸一

○海 津 亦八

△鷹 取 養巴

△筑 紫 守

□野 村 助作

△小金丸兵(朱)二西島種美旧名

、戸 田 六郎

、日 高 小平太

、平 野 三郎

、内 田 良五郎

、友 野 郡 二

、讚 井 嘉助

、大 野 九内

、吉 國 榮五郎

、廣 渡 太助

、松 生 彌八郎

、中島傳平
 、波多江市内
 、平山外八郎
 、宮崎用七
 、中村準藏
 、中村哲藏
 、中村勇八
 ママ
 、新野忠三郎
 、新野重兵衛
 、坂本次兵衛
 △伊熊茂一郎
 入牢 佐座謙次郎
 入牢 長尾馬之允
 入牢 尾崎惣左衛門
 △尾崎彌介
 △野村望東尼
 △印 一族預
 □印 足輕三人ノ番
 、印 組合預
 右六月末之分

加藤司書
 竹田安之進
 戸川佐五左衛門
 魚住楽書
 江上傳一郎
 須山惣次郎
 山内俊郎
 戸田平之允
 桑野左内
 中村四郎兵衛
 長尾正兵衛
 岩永仁左衛門
 筒井藤兵衛
 西川茂
 園田稔
 為田漸
 神代且兵衛
 高田卯八
 福本泰平
 戸澤彦之助

右七月廿一日遠慮、組合并一族預之分

免役 免役
左宅七

長谷川半藏

四宮孫二郎

長島十左衛門

久保山八

青柳半藏

左宅七

早川養敬勇旧名

月形洗藏

月形名不知
洗藏甥

入牢 瀬口守太郎

入牢 西原守太

入牢 浦志摩守

(ト)

伊藤清兵衛

中村格

團頼母

増井喜右衛門

一族預 黒田播磨

右同 矢野相摸

外二町人

帶屋次平

松屋孫兵衛

楠屋官五郎

深澤屋名不知

以上

右上封

松平修理大夫殿

島津大隅守殿

御密覽

封朱方印アリ

三條實美

二四九 慶應二寅年八月廿一日外国方支配定役

孤田謙吉内話聞書(朱)〔真偽交々〕

魯西亜帝英・佛之二国ヲ悪ム、其故ハ二国共弱ヲ討チ己之有シ(マ)ナシ、暴威ヲ示シテ、依テ二国共討亡シ、世界一新セン事ヲ欲ス、国内ニ布告シテ二国ヲ討之策ヲ求ム、国民各策ヲ献スルニ、皆大軍艦ヲ以テ討之外他之策ナシ、於是ニ船工ヲ募テ、方今大軍艦数艘ヲ製造

ス、功ナラハ歐羅巴洲鼎ノ沸カ如クナラントイフ、
寅從五月廿一日至七月九日

英國商船ケストン江乗組之者

英國ミニストル

(Alexander Stehdt)
シーホルト

同人妻

ウレン

六拾一番英國馬掛

女小遣

アツヒフン

壽々

式拾番英商

ウレン同

コレン

清助

ミニストル小遣

コレロウ同

啓次郎

伊三郎

長助

シーホルト小遣

仙藏

右之者共召連、同船ニテ五月廿一日早朝長崎表江出帆、
廿三日夕六時攝州兵庫湊江碇泊仕、同廿四日長州下ノ
關へ着船仕候処、長州役人凡拾人程、小船ニテ右ケス
トロ迄参リ、ミニストル江面会仕、種々相咄シ、公使
初上官之分トモ、バツテイラニテ上陸仕、応接所江罷
越、酒食仕立歸リ、其夜右湊江碇泊、翌廿五日朝同所

出帆致シ候処、殊之外風波烈敷候ニ付、一里程先小島
之影ニテ其夜ヲ明シ、翌廿六日早朝出帆、廿七日七ツ
時長崎表江着船仕、夫ヨリ彼湊ニ罷在候処、六月十三
日英國軍艦フリンセスローイ始、廿三艘長崎表出帆、
十五日薩州鹿兒島江着岸仕候処、直様薩州役人衆大勢
右船江参リ、名札等差出シ、無間モミニストル始外士
官并通詞式人^{長崎ヨリ召連ル}、其外薩州産之小遣同道ニテ、夷
人共薩州様江登城、小遣之者ハ市中ニ罷在候処、種々
手厚取扱ニ有之、夷人之儀ハ御城ニテ殿様江御目見、
殊之外饗応ニテ、翌十六日尚又登城、夜ハ都テ渡船江
立歸リ候処、十七日松平修理大夫様初、若殿様御二男・
重役方大勢船拜見ニ御越被成、何レモ礼義正敷、夷国
銘酒料并菓物種々馳走差出シ、翌十八日冲合江のヲ掛
置、大砲百発打放シ、各江酒其外食物等御送り相成、
夷人ヨリハ鉄砲献上仕候、尤其已前船壳艘献上之趣、
市中之者ヨリ承^(米)リ申候、廿一日昼八ツ時鹿兒島出帆、
夫ヨリ冲相廻リ、四国海伊豫国宇和島江着船致シ候処、
宇和島様御役人案内之人行列ニテ出向候処、彼地ニ外
国之馬預ケ置候事哉、公使始上官之者乘馬ニテ登城、
ミニストル妻ハ宇和島様ヨリ乗物御遣シ相成、子供ニ

至迄乗物ニテ登城、殿様御目見、翌廿三日殿様始船拜見ニ御越、牛三百疋被下候由ニテ、殊之外御馳走有之、役人方江異人夫々懇意ヲ取結ヒ、七月朔日彼湊出帆、当月三日英軍艦其外式艘、海上遅速モ有之候得共、夫々婦湊仕候旨、小遣伊三郎ト申者内々申出候間聞書仕、乍恐此段奉申上候、以上、

一薩州市中見分致候処、外国品物殊之外沢山ニ有之、右ハ英国カラハト申者ヨリ交易品之由、尤右カラハ名前不存者、薩市子供ニ至迄老人モ無御座候、

一薩州市中商家不残侍体ニ見受申候、

一鹿兒島市中琉球人殊之外多揚リ居申候、

一薩州表(表)氣殊之外悪敷相見ヘ申候、



裏ニ当百ト認有之
当百毫歩ニ付三貫
六百文通用



銀毫足ニ付二百七十
一文通用 (朱)
半朱銀
ヲ云乎)

右之通御座候、以上、

寅七月九日

二五〇 中路権右衛門探聞書

徳山家老

福田式部

主従十七人

同 用人

飯田民衛

主従十四人

園田李之助

主従 二人

右八月八日藝州着ノ由、廿日市ニ可宿候条、

岩國家老

吉川采女正

主従廿一人

長 新兵衛

主従 九人

河野順之助

江川専一郎

本藩家老

穴戸備前(親基)

右八月十三日比迄ニ同所着ノ筈候事、

右之趣、昨日大坂表ヨリ罷登候他藩周旋方ヘ承届候

付申上候、以上、

八月廿一日

中路権右衛門

内田仲之助様

吉井幸輔様

聞之由ニ承リ得申候間、為御見合此段申上越候、以上、

寅七月八日

木場傳内

二五二 勝安房守休戦ノ為メ藝州下向ノ報

大坂

大久保一蔵殿

木場傳内(書生)

勝安房守殿事、去ル十九日当所ヨリ兵庫江被差越、翌

廿日蒸気船ヨリ藝州江出張相成候段、佐藤與之助ヨリ

中路権右衛門承得候旨、申出候ニ付、為御見合此段申

上候、以上、

寅八月廿二日

木場傳内

大久保一蔵殿

(別紙)尾州侯御建白写手ニ入申候間、写取差上申候、

一、宍戸備後之介(備)藝侯江御預ケ相成居候処、去ル廿五

日夜松平伯耆守(本姓家考)様御旅館江御召ニテ、御膝元近ク御呼

寄セ、至極御叮嚀成御会釈之上、御次第不相分、何欵

被仰合候哉、其夜及深更窃ニ出立致帰国候趣、内々伝

二五二 伊地知壮之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

封筒

裏

京

逢坂

大久保一蔵様

伊地知壮之丞

御病氣モ早御平快之由ニハ承知仕候得共、時候代リ之

節折 御加養專要奉存候、税所(電)へ御遣之御翰伝誥、御

地形勢一変、驚駭之事ニ御座候、併好機会追々運動之模

様相分リ可申、別封三君へ当差上候間、何卒御決議被下

度、中路権右衛門(延生)兵庫ヨリ罷帰、勝氏地面モ四百金ニ

テ、弥取入之内定相成候段承候、当分彼地往來絡繹、代

官等寸暇無之、其故表通之証文ニハ不至由、内分之請取

渡之書付ハ、小豆屋ヨリ差出候、中路咄ニ去ル十九日

晚勝先生大坂発足兵庫着、翌廿日蒸気船ヨリ長州へ被

出掛、此節ハ独行ニテ御目付一人・御小人目付一人、

三人迄ニテ長へ被駈込候賦之由、此一件ハ極々内密ニ

テ、外々へ全く不響様トノ幕評之由ニ御座候、策尽テ此ニ至リ候半、偕翔鳳丸発帆之儀ハ、自分近々御決答被仰越答トハ奉存候得共、船仕舞モ此内ヨリ相調居、五島様切ニ御歎キ、市橋下坂ニ就テハ、長々御滞坂ニ候得ハ、御機嫌同等モ無之テハ不叶由、旁可憐次第モ有之候事故、御地形勢三五日之内ニ相分、御申越相成候事候ハ、其通ノ事ニ候得共、市橋用人御国元へ罷出、旁右等之事件御申遣迄ニテ相濟、後日之形勢ハ、近日中ニ御着眼付兼事ニモ候ハ、先此節之翔鳳丸ハ、三五日中ニ出船被仰付候ハ、五島様ヲ初別テ難有事ニ被思召事ニ可有之ト存候間、何卒否両日中ニ被仰越被下候様御願申上候、何分可然御合被下度、此旨態ト奉得貴意候、恐惶謹言、

寅八月廿二日

伊地知壯之丞

大久保一蔵様

二五三 原市之進遭難ノ報(海江田武次)

御勇健可被為入目出度奉存上候、御伝言ノ趣ハ一々相伝置申候、爰許至テサビシク、西郷氏今日御下坂相成

候ハ、御帰京ノ処早々奉待上候、原一之進(原一之進、水戸藩士)ヲ殺害ニ及ヒ候趣ノ書御座候、是ハ折田へ御聞取被下候ハ、相分可申候、誠ニ感心ナル三士ニ御座候、滞坂中ハ御世話ニ成上、御礼申上候、返々早々御帰京奉待上候、幸便一筆如此御座候、謹言、

京

(慶応三年)

八月廿三日

海江田武次

大坂

帯刀様

尊下

二五四 西郷吉之助ヨリ大久保・袁田へ書翰

御両殿様益御機嫌能被遊御座、恐悅之御義奉存候、陳ハ大坂之形勢も運行之事ニハ無之、專閣老會(松平容保)・一之密(徳川慶喜)議ニて、若年寄辺より下ニハ全不相響との由ニて、軍議之次第不相分候得共、別紙小倉江及談判候書面を以相考候処、此度之再征ハ、全名もなきものと相成、条理を失候義と形行益先暗き方ニ陷申候、いつれ理を失ひ候ハ、勢ひを以押テ懸らす候てハ、致方無之候へ

共、勢ひハ相衰へ居、幕府一手を以戦ハ出来不申、諸藩之兵を募ふと申ても、名の立様有之間敷、理勢共ニ失ひ候てハ、尾のとれ候処如何可相成、最初名義ヲ正しく不致候て、胸算を以諸藩可応事と軽卒ニ動立候故、行先拙策ニ陥候事ニて、大坂中之人氣ハ弥増ニ悪敷、悪評計被行笑止千万之事ニ御座候、徳山岩國之両所も何欵故障付候と相見得、清末ニても、長府ニても、萩之家老ニても不苦との令を替候位、是以最初より大キニ打開出し不申候てハ不相成処、又外供ハ兵庫迄、内供ハ西之宮迄ニて、只両人之供列ニて大坂江出懸候様、達替も有之、紛々之計ニて実ニ阿放を極申候事ニ御座候、○蒸艦御迎船之義待ニ待候処、今日迄も着不致、如何之事と安煩居候義ニ御座候、就てハ守衛御引払之御策も不被行事欵、此機会を御見居無之候てハ、御大策相立兼候半欵と、日々御左右相待居候事ニ御座候、少々之御尽力ニてハ、迎も此形勢ニてハ、詮立候義無覚束事と奉存候、諸郷守衛人數之義交代前差掛候処、此内より過分流行病ニて、人氣迄も挫居候次第ニて、戻風頻ニ吹立居候間、中途代り之処を以、一隊も御差立相成候付、交代參候時宜ニ相成候ハ、是迄之通之

振合を以取計可申候付、大坂之船繰を以、順々御差立相成候間、左様御含可被下候、右御引取ニ付てハ、邸中之議論も一致ニ無之候てハ、跡以色々異議も難計、当分ニてハ全左様之訳ハ無之候得共、念を入衆評ニ出し候処、全異論之訳ハ無之候間、為御心得差上申候付、御覽可被下候、いつれ共其御元之御吟味ハ、相決居候半欵と相考居申候、○小倉江相渡居候幕大目付塚原但馬守・會藩諏訪常吉と申者、皆帰坂いたし居候由、畢竟長より談判六ヶ敷、夫か為ニ罷歸候半欵と申説ニ御座候、長より之談判杯之義至極秘し居候由、藝藩杯ニも岩國より使節參候一件、悉く秘し居候筋と相見得申候、大坂ニてハ来月廿七日限ニ、長州より不罷出候ハ、人數御繰込相成候間、其心得罷在候様、段々之幕役江達ニ相成候趣、木場より申越候、初之議論ニさへ負を取候ハ、戦ハ尚更出来申間敷、尤おかしな事ニ成行申候、會之諏訪、海江田方江參候て、初二再征と被仰出候義、誠ニ失策との咄いたし候由、夫ハ畢竟長より条理を以及談判候故、昨年之所置を出し候義も不相調、再征之義言崩され、名なきニ込ッて、尚更自分ニこしらへ候再征を、いとひ候筋と相見得申候、頓と策を

失ひ候と見得て、薩州より周旋ハ有之間敷哉杯と、吹聴いたす様子と相聞れ申候、尾州老公を又引出すとの噂も有之候由、とふも仕方か無之、色々工面を替候事と相見得申候、○又一説ニハ、仏人より申立候ハ、是迄之定約ハ本道之訳ニ無之候間、幸

大樹公ニも大坂滞在と承候故、攝海江相廻一定之約書を度候付、談判可致申立、幕役心配いたすとの風説も有之候得共、突留之説ハいまだ得不得不申候、別冊中路権右衛門より聞合申出候書面差上申候間、御覽可被下候、頓首、

(慶応元年九)

八月廿三日

西郷吉之助

大久保一蔵様

蓑田傳兵衛様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

二五五 在太宰府川畑伊右衛門ヨリ黒田嘉右衛門

へ書翰

尚々宰府表ニも至極之静謐ニ御座候、詰人数ニも無(卷「藤一郎」)事仕合之至、何分三雲氏(兼一郎)帰宰相待申事候、御亮察可

被下候、山田孫一郎殿・松岡善助殿ニハ、今一詰被致度、折角承事御座候間、此節交代被仰付候ハ、右両人之義ハ詰重相成候様、是又御周旋奉願候、

一筆啓上仕候、久々之御疎遠罷過キ候得共、弥御壮健被成御勤務候半と、奉欣躍候、次ニ私ニも無異相勸居申候間、乍憚御安意可被下候、然ハ貴君御事も、御納戸奉行御用人席・陸軍所掛江被蒙 仰候由、誠ニ結構ナル御儀目出度奉存、御祝義申上候、此日三雲氏帰国御座候ニ付、宰府表幕長戦争一体之形行、御聞取有之候半と奉遠察候、其以後之形勢委敷不相知候付、先達てより伊集院直右衛門殿(兼寛)探索方として、馬關迄渡海被致候処、山口辺迄被参候由にて一昨日帰宰御座候、藝州表も去月廿八日より、当月七日方迄、数度之戦争御座候由承り申候、伊集院氏ニも右御届旁、今日より帰国被致候間、御聞取可被下候、小林甚六郎殿(政寛)ニも、五藩より之願有之、五卿様方御安心被遊候様、周旋之筈にて、来月初方より上坂之賦承申候、最初貴君など之立口トハ、頃日少シ相替り、甚六郎殿ニも御暇乞として、先日御参殿、五卿様方江拜謁御座候処、上首尾之段承事ニ御座候、委敷義ハ直右衛門殿より御聞取可被下

候、藤一郎殿もいまた帰宰無之、今やくくと日々相
待居申事ニ御座候、小倉表にも出勢之人數瓦解、小林
氏にも被引取、宰府表静謐ニ付てハ、私共にも来月ハ
交代被仰付候様、何分御周旋被下度奉願候、番兵之義
御城下江半年、宰府江来月迄半年にて、都合一ヶ年二
も相成り、長々迷惑之由、其上不住馴所江参り、大食
など為致沙汰ニても可有御座哉、過半は脚氣煩付、病
人勝相見得候間、何分来月ハ交代相成候様、御働キ被
下度、平ニく御願申上候、私にも肢体之仙癩持、余
り長詰相成候て、若哉持病とも差起り、根引之御断と
も申上候哉ニ成立候てハ、甚以不本意之至、尽忠報國
之志も水ニ相成候間、旁御憐察、来月中ニハ交替被仰付
候様、御周旋被下候義、万々奉願上候、私事例之暴論
家、当分ハ志も不伸、区々碌々として、心快々罷在候
間、御推察可被下候、先は此等之趣御願且御祝義旁為
可申上、一筆如斯御座候、恐惶謹言、

八月廿六日

川畑伊右衛門

篤行

五

黒田嘉右衛門様

〔黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

二五六 〔伊地知壯之丞ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔頭書〕慶應二年庚辰討長〔久光上京〕
御答書一昨夜半相届、慥ニ拜見、来諭之趣一々御尤之
次第、委曲承知仕候、於此地モ何レ 朝廷ヨリ之 御
召ニ不罷成候テハ、名義且手続モ不宜ト、木場・税所
致内評居候事ニテ御座候、市橋上京之程合承台候得共、
未相分不申、大樹薨去〔七月二十日〕、上下哀情之程モ 御察
被 遊候付、暫時見合候様可致旨、御沙汰ニ候、就
テハ是迄隣境侵掠之地早々引払、鎮定罷在候様可取計
旨被 仰出候由、右ヲ本ニシテ、追々 御公等之御手
続ニモ可及歟、幕別手組頭取塚原寛十郎・寺西直次郎
ト申者杯、四五名へ被差出候由ニ候得共、將弛トシテ
出張之手段ニ可有之、梅澤ハ去十九日比此地出帆相成
候由、人間万事蹇翁馬又々面白キ機会ニ成立、會・桑
之苦心被察申候、併橋大樹之内ハ遂ニ一定之期ハ有之
間敷、金拾万兩モ無余義筋、拙弁ヲ叩キ、御銀主共へ
致頼談候、弥仕応シ御請為致申賦ニ御座候、是ヲ以臨
時 御上京等之御用途ニ備賦ニ御座候、馬關鎖港之機
ニ乗シ、一策相立候得共、此地存シノ外之都合ニテ、

格別直段引揚居、殊ニ御地又ハ江州辺ヨリ許多商人入込、手策之相立文ニ無御座、吉井ヨリ承候得共、馬關或ハ呼子迄米直段下料之向故、此方へ手ヲ付候方可宜、御国元モ小銃不足、皆々渴望之砌故、不時之働ヲ以衆望ヲ叶候様イタシ度、木場・税所申談居申候、吉井ヨリ船之事御相談申上管ニ取究候間、御聞取被下候半、否早目御達相成候様、御取計被下度野村書状差上候、乍御煩勞一通ハ両士間へ御届可被下、野村書中ニ有馬遠^{道遠}州御召、閣老云々之文言有之、此有馬ハ可也宜キ人物ト兼々承及、殊ニ中古 御国へ依頼義ニ為伏強敵御討伐、于今 君臣共御国ノ御恩ニ感候由、昌平館寓居之砌、彼之藩人同居細々承ル事ニ御座候、右等之縁故モ御座候故、若哉閣老ニ出頭共候ハ、御国ノ御事ハ大事ニ周旋等ハ可有之欵ト存申候、先ハ卒々奉得貴意候、頓首再拜、

寅八月廿六日

伊地知壯之丞

大久保一藏様

玉床下

二五七 寺島陶藏ヨリ伊地知壯之丞へ書翰

謹具仕候、愈御多祥奉拜賀候、次ニ小生無異滞府仕居候、乍他事御放慮可被下候、皆御出坂以後既ニ一月ニモ相成、御用済ニテ御帰府ニ相成候半奉察候、生英吏承接之一条先日終日及議論、尚又巨細手続之処、彼モ再三工風之上、再度示談可仕相答候ニ付、其俣引取申候、四五日前彼方ヨリ参リ吳候様申来候得共、折節臥病遺憾奉存候、其日ヨリ直ニ横濱へ参リ候由ニ付、翌日同所へ手紙差出、再面会致度申越置候、同人江面会之義ハ、横濱ヨリハ江戸之方容易ニ出来候間、近日彼カ出府相待居申候、扱又先日議論之中、幕長講和之事十分持出兼候趣有之、何分本論ヨリ片付不申候テハ、多端一緒ニ持出兼、兎モ角モ本件之旨尾承り度候ニ付、夫迄緩和之助ヲ十分乞兼申候、愚按ニハ到底此事ハ、彼力ヲ尽シテ和ヲ入候程ニハマリ申間敷、其実ハ彼本国之法ニテ、眼前ニ其国之恥辱ヲ受不申候得バ、先手ヲ出シ不申由、先日モチヲトミニストル之口氣出申候、併シ又一方ヨリハ、幕ヲ助ケテ長ヲ伐ツ事モ、本国之論ニ叶申間敷候、此事ハ尚後日承合度奉存候、生發途

来月廿日頃、私断仕置候、拜接委曲可申上候、恐惶頓首、

(宗四)
寺嶋陶藏

八月廿九日

伊地知壯之丞様

侍史

二五八 小松・大久保・西郷等ノ建言

方今内外大小之憂患四方百出仕、実ニ

皇国危急存亡之時ニ可有之、抑今日之形勢ニ致推遷候儀、一朝一夕之根由ニ無御座、於幕府冠履倒置之儀不_レ少、就中十年來外夷之御処置振ヨリ以往、天下之人心怨離紛々之姿ニ相成り、憂国之人士為是非命ニ斃候者不知數、勤王之諸藩不顧国力東西奔走仕候次第、偏ニ皇運御挽回之至誠ヲ以テ、聖朝ヲ輔弼シ、幕府ヲ扶助シ、藩屏之任ヲ竭候処、駕馭之術ヲ失ヒ、偏照私親採_レ択宜ニ不適候故、因是一定衆議合論之場ニ至兼、悉水泡画餅ト相成候儀、千載之遺恨ニ御座候、既ニ昨年来大乱之機相顕、屢千戈ヲ動シ、幾多之蒼生ヲ殺シ候上、

眼前若州・信州辺ノ天災、及ヒ丹波・大和之一揆、兵庫・大坂・江戸之騒動等伝聞仕候、則今ハ兵庫・大坂之儀、將軍家 御在陣、号令整肅軍威四方ニ可輝之処、却テ足下ニ卓シ、商賈賤民之如キ嚴威ヲ不憚、大法ヲ犯候儀、所謂民不堪命之苦情ニ出候事ニテ、不可忍之次第ニ御座候、最早鎮定之形ニハ御座候得共、米価ハ勿論、諸色未曾有之騰貴ニテ、既ニ当年之処、炎旱水溢之憂モ不被凶、此上兵端相開候テハ、争乱日々ニ長シ、率土分崩遂ニ不可救之勢ニ及候ハ案中ニテ、其時ニ当リ外患ヲ受候節ハ、何ヲ以テ防禦可仕哉、是卑臣等年来痛心慨歎スル処ニ御座候、然ハ内政ヲ變革シ、皇国ヲ起スノ大策、一日モ不可捨置大急務ニ可有之候得共、長防征討之儀、御取掛之事ニ候得ハ、既ニ一昨年来悔悟謝罪之道相立、尾張前大納言殿解兵之上、被_レ遂奏

聞候儀ニ付、其節引続キ御処置振被仰渡候得ハ、奉謹_レテ承知候儀ハ案中ニ御座候処、其時機ヲ失ヒ、朝廷寛大之御趣意ニ反シ、御再討御進発ト称シ、更ニ御出軍御不_レ審之筋御糺明之処、御了解被為在由ニテ、忽チ本ニ復

シ、御裁許之名目ヲ以、尚大兵ヲ彼国境ニ臨マセ、御
処置振被仰渡候儀、解兵后之御不審御晴相成候テモ、
御再討之兵ヲ用ヒラレ候御訳モ不奉伺候得ハ、仮令ヒ
奏

聞之上トハ乍申、条理不相叶訳ニ候故、乍恐其筋ニ承
服仕間敷、前文兵庫・大坂之商民共サへ、其令ヲ不用程
之事候得ハ、數百年來譜代恩顧之長防士民之情義モ、無
余儀被察候処、嘆願之筋ヲモ御採用不被在、御採許之
御沙汰相拒候上、則問罪之師被差向候ハ、御相当之御
処置トハ難申上候、且亦名代トシテ出藝致候六戸備後
介、御不審被為在候由ニテ、幽閉被仰付候儀、問罪之
挙動ニ無之、道理ヲ以御詰問之上、閉口退去可致、左
候ハ必ス国民ハ皆罪アルヲ可存訳ニ御座候得共、却テ
口ヲ不開様ニ仕向ケラレ候ハ、只ニ憤怒ヲ起サセ候拙
策ニ陥ルノミナラス、理非ヲ不正ト天下ニ致布告候訳
ニ相当リ、殊更防州大島郡へ暴発ハ、海賊之所業ニ類
シ候儀ニテ、嘆息之至ニ御座候、今般之始末ハ、長・
防士民ニ憤怒ヲ懷カシム計リニ無之、大ニ天下之人心
ニ關係可致訳ニテ、此末如何ナル大乱ニ可成立哉モ量
ラレサル事ニ御座候、仮令可討之道理有之候テモ、

皇国之興亡ニ相関候大難之時ニ臨ミ、起ヘキ急務ヲ置
テ、却テ亡ニ陥ル之道ニ被為就候儀、実以絶言語奉恐
入候儀ニ御座候間、前条緩急大小之弁、治乱興亡之機
御明察被為在、非常格外之

朝議ヲ以、寛大之

詔ヲ被為下、霽然之恩典ヲ被為施、転危扶顛之聖斷被
為視、聴ヲ四方ニ開カセ玉ヒ、天下之公義正論ヲ尽シ、
政務变革武備興張遠戎賓服、中興之功ヲ遂ケサセラレ、
御祖神之恩靈ニ報ヒ給ヒ、下蒼生塗炭之苦ヲ被為救度
御儀ニ奉仰願候、誠ニ以重大之事件、卑賤愚魯之小臣
等、輕卒奉言上候儀、不当之重罪ニ御座候得共、乍恐
朝廷寛大之御趣意、兼テ奉伺候趣モ有之、且小臣等拔
群之

聖恩ヲ奉荷候得ハ、

皇国之御浮沈ニモ相掛候切迫之御時節ニ当リテ、黙止
罷在候ニ不忍、冒万死血涙涕泣言上仕候、誠惶誠恐謹

言、

(慶応元年也)

寅八月

小松帶刀

大久保一藏

西郷吉之助

此書面ハ西郷カ起草ナリト云フ〔卷〕（大久保ノ誤ナリ）

松平修理大夫様御内

三田

黒田嘉右衛門様

侍史

二五九 〔金子清邦ヨリ黒田清綱へ書翰〕

書中申上候、此間一寸參上仕候処、弥御帰郷之由、何日頃之御発途ニ候哉、江山万里再会難期奉存候間、薄酒一杯傾離情度候〔左腕之〕、右ニ付明後六日、正四時ヨリ拙寓へ御責臨被下度奉存候、汐留山崎屋ヨリ舟行、向島閑所ノ酒店ニテ相催可申候、御指支モ無之候ハ、塩屋翁へ申シ通シ候様可仕候、會津藩野村左兵衛ト申モノ、武井同志ノ人ニテ、兼々塩翁ト懇意ヲ結ヒ度、小生へ頼置候、幸然之儀ニ付同伴可仕候、武井ト思召、御一酌可然奉存候、一條十郎是亦同行可仕候、右日限御指支無御座候哉、四日ニ可仕候哉、此段被仰下度御報奉待上候、頓首再拜、

八朔

又白、少々之雨天ニテモ、本文再会難期義ニ付、是非一杯献シ度候間、御責臨奉希上候、已上、

一ノ橋

金子與三郎

二六〇 道嶋家記鈔（藩士會津藩士ト私闘ノ概略）

八月朔日ニ小倉ノ城ヲ焼キ、小倉ノ人数是非決戦可致、夫故焼キ候由ニイフ人アリ、夫モ尤ナレトモ、日延ニ相成候得ハ、勢ヒ被ル〔抜之〕モノ也、是非一戦ヲ心掛候ハ、何ノ見込有之候半、何分後ノ働キヲ見ルヘシ、

即死

彌寝新之丞

手疵

〔山カ〕
二本吉次郎

手疵

丸田

無難

有川

右ハ京都守衛方ニテ差越居候処、寅七月十四日右同道

即刻

黒田嘉右衛門様
奉復

(長門、因州藩古)
土肥謙蔵

ニテ丸山へ差越、余程大酒イタシ候由、帰リ掛會津藩
トイフ四條繩手ノ辺ニテ、禰寢カ足ニ梨子ノ真ヲ投当
候ヲ、頻リニ相断候ヘトモ、酔候故不聞入、抑合候ヲ
切付候付、禰寢モ刀ヲ拔、相手ハ三人ニテシハシ相戦
ヒ、山本外二人ハ些後レ、右之戦ヲ見ト、山本・丸田
刀ヲ拔走り掛候時、禰寢ハ被切倒、山本走り掛候処ヲ、
相手膝ヲ突声ヲ掛ルヲ、脇ハラへ突込候故、山本倒レ、
丸田又駆付候ヲモ、手ヲ負ヒ相防所ヲ、有川脇ヨリ切
付打果候由、外二人ノ相手ハ逃去候由、

八月六日方有川着テヨリ、右之噂有之候、山本・丸
田二人ハ六七日存命ニテ候由、

二六一 土肥謙蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

拜誦仕候、過日ハ御同藩中村君へ御内話仕候儀ニ付、
御同藩之諸君、今夕弊寓へ御貴臨被下候趣被仰下、敬
承仕候、僕等登門仕候筈ニ御座候処、御貴臨ニ預リ候
テハ、恐縮仕候得共、折角被仰下ニ付、御待申上候間、
御枉駕可被下候、尤弊寓狭隘ニ付、近辺卜店仕候間、
先寓居へ御過訪可被下候、書余面残尽勿々拜復、

二六二 幕府探索書

乾御門御警衛薩州侯引払候様ノ御沙汰、薩州ニハ長州
堺町御門引払候様被仰付候、八月十八日之始末ニテ不
相成トノ御沙汰ニ御座候事、其子細ハ過日加茂競馬之
一条、一昨廿一日岡崎薩州屋敷ニテ大調練、多人數二三
発始リ掛候処、相國寺ヨリ早馬使ニテ差留ニ参リ候付、
休ミ候事、尚又相國寺ヤシキ甲冑人数揃居候事、

右加茂競馬一条ハ、競馬之折調練帰リノ郷ノ人数、
其俣ニテ見物ニ差越候ヨシ、決テ其訳トモニテハ御
座候半、岡崎大調練ハ先日勢揃ノ折、喜入組朝六ツ
前ヨリ岡崎へ差越居候由、路ニテ勢揃初リ、早馬被
差立候由、夫ヨリ直ニ其俣走帰候由、
右ノ一件ヲ、外方ニテハ大評判イタシ候由ニ御座候、

二六三 薩藩ヨリ差出す十巻ケ条（建言拔萃）

第 一 （頭註）「原書薩藩ト有之候得共、右は貴藩より御差出ニ相成候書面ニ御座候や、又は貴藩上ニ箇人之名目にて、御差出ニ相成候者ニ候や、金龍右御書面朝廷へ御差

一 征夷府二百年來乍恐云々、出シ相成候、從來之御成行知何ニ候や、此度此辺之番類之不相分候、御教不相願候」

第 二 一 外夷來し以後、尤己之職掌を失ひ云々、

第 三 一 戊午之春禁廷より条約之儀は云々、

第 四 一 禁廷へ奉迫外夷は拒絶可仕と云々、

第 五 一 漸一節詔尊奉攘夷期限之決定將軍様自ら云々、

第 六 一 小栗豊後守小笠原圖書頭をして云々、

第 七 一 先年來屢叡慮ニ背反し云々、

第 八 一 洋銀にて新銀を鑄替云々、

第 九 一 甲子之秋長州人困冤哀訴之情云々、

第十

一 不義非道之政而已多く云々、

第十一

一 幕府之職掌にて天朝を奉し云々、

右大罪凡如此小罪不違記、

右前条之次第、大道大義尽き果、神州之安危ニ係る、是早く撥乱反正之材出て云々、

二六四 或人探索書（真偽交々）

一 正親町三條様薩州ヨリノ上書御採用被為在、可然トノ

申義被仰立候処、（元親王）山階様御返答ニハ、只今幕府御不幸ノ

折柄ニ付、右御不幸ニヨツテ、戰爭相止メ候儀ハ可然、

薩州ノ上書ニヨツテ相止ノ義不可宜旨ノ御返答ノ由、

（朝霧親王）爾白（桑奇敬）一尹宮・殿下様ニハ、長征ニ諸軍勢大敗北ノ義御承知無

之、勝利計リノ事ニ、一橋等ヨリ是迄ニ申上有之由、

一會・桑両侯ニハ、右延引ノ義残念ノ旨ニ候得共、桑侯

未若年寄ナカラ、弁別相分リ候候ニテ、一橋・越前ニ

御同意ニテ、桑藩ニ戰爭ノ議論申募リ候モノハ、国元

へ追返シニ相成候、會侯へハ桑侯ヨリ説得ニテ、會モ

御同意ニ相成、乍併會藩公用人ハ、悉ク戦争議論ノモノ計ニテ、會侯ニハ御心配ノ由、^(朱)「事実ナリ、続再夢紀事参照」

一 今度尾州始九州・中国・四国ノ諸侯ヲ華城へ被召候義、諸侯御請ハ有之間敷、御存命ニ無之大樹公ヨリ被召候義無之、幕府ヨリ被召候義モ無之、尤一橋ヨリ被呼登候迎、上坂有之間敷義ニ付、何レ 朝命ニテ不被召候テハ、御請有之間敷ノ処、尹殿ニハ兼テノ思召ニ付、迎モ右御取計ノ方ニ難相成義ニ可有之、乍併何レ朝家ヨリ御沙汰ニ不相成候テハ、諸侯上坂ハ勿論、何事モ承知仕間敷旨、

一 八月八日、紀伊・彦根・榊原・大垣ヨリ長州陣へ打入り候筈ニテ、用意有之候処、七日ノ夜長人廿人計、右四藩ノ陣所へ拔身ニテ切込候処、四藩ノ陣ヨリハ砲発ニ付、長人近辺ノ山へ登リ、見物致居候処、四藩ノ軍勢相互ニ砲発、又ハ切合候テ、死人・手負・怪俄人沢山ノ趣、依テ兼テ手筈有之、八日ニ長人トノ戦争ハ相止^(ミ)ノ候由、

一 橋府二條殿御參殿、長・防ノ義大膳父子并役筋夫々ノ者ハ恭順候得共、何分激徒浮浪ノ徒ニ被押、方今ノ有

様ニ候間、早々罷下、速ニ 奏成功可申段、別段被仰上候ト云、^(朱)「事実、続再夢紀事參看」

一 會津ハ去八日ニ西風ノ大風ニテ、領内大火過半焼失、先手分合セ丸焼位ノ由、慥成事ニ御座候由、薩人江州ニ沢山ニ參リ居事モ実事、坂ノ下辺ヨリ石山公然々概^(朱)乎、「(二三名ノ探偵ヲ出シタルヲ云ナラン)」

一 十六日或人ヨリ常ニ、昨日モ市中ノ八幡參詣ノ由、帰路ノハナシ承リ候処、淀迄ノ内切レ所四ヶ所、城下ハ未タ満水有之、大橋ヨリ式ヶ所堤切、何レモ船渡シノ由、尤大川堤ヨリ八幡迄船渡シ、山上ヨリ見渡候得ハ、東ノ方一円ノ白海如キ由ニ承リ、実ニ近代ニ無之、大荒ノ内御当地ハ格別ノ事ニ無之旨申居候、

大津宿へ薩人多人數罷越シ、同宿へ米不残買上ケ、食用ニ致シ居、同宿ハ実ニ扨底ニテ、御当地へ登セ米モ無之、宿中困窮ノ由、同所米屋ヨリ御当地米屋へ申来候由、尚又当方へ米屋ヨリ申来候、

加州人多人數下ノ坂へ宿仕候、是ハ加州人へ昨日モ直ニ相尋申候モノ有之、殿様御下坂ニモ候哉ノ旨相尋候処、殿様ニハ何シニ御下リ有之物カト申、御家老ハ下リ候ト申候、

長州へ御下り候哉ノ旨、尚又相尋申ノ処、長州へハ何
シニ御下り有之物カ、異国人へ御固メニ御下り候ト申
候由、八月廿日ノ書中ノ奥ニ、

最早諸藩呼寄ニ相成候分

四国ニテ 阿波 土佐 宇和島

九州ニテ 薩州 肥前 肥後 筑前

中国ニテ 備前 因州

二六五 金子與三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

松平修理大夫様御内 松平山城守内

黒田嘉右衛門様 金子與三郎

御手披

先達御門前罷通候節、一寸相伺候処、何時モ御他出之
御様子空敷相戻り申候、陳ハ少々御内談申上度御座候、
尤尊藩之儀ニ付候テモ、聊心頭ニ係り候始末御座候間、
朋友之義、極密御通声申上度事御座候、尤仙藩一條十郎
ト申仁同道可仕候、不苦義候ハ、御寓所迄可罷出間、
乍御時節御指支モ候ハ、汐留山崎ト申候船宿迄御微
行被下候ハ、舟中ニテ御閑話可申上候、頓首拜、

二六六 〔西郷征長和議幹旋ニ付テ〕

二六六ノ一

西郷は、文久二年島津和泉殿上京の時、浪士を煽動した
りとの咎に依て、沖永良部島に流されしが、其後小松帯
刀・大久保一藏・高崎伊太郎（猪太郎）五十六の諸士は、時勢愈々切迫に
赴くを見て、斯る人材を蟄伏せしめ置くへきに非ずとて、
頻に三郎殿に哀訴し、此の年の春赦免の許を得て、鹿兒
島に帰らしめたり、但し長州に在る諸有志は、其前に書
を贈りて、今は孤島に籠り居るへきの時に非されは、窃
に脱れ来りて、天下の為に尽力すべしと、言送りし事も
ありたれども、此書面は達し得ざりしといへり、

二六六ノ二

是より先に、総督は御附家老成瀬隼人正の家臣八木雕と
いへるものを、周防の岩國に遣はして、吉川監物に内意
を伝へたるに、吉川八年頃宗家の挙動を良からざる事と
思ひ煩ひながら、力に及ばずして手を納め居たるものな
れば、総督の内意を承はりて大に喜び、くれ／＼も謝罪
の事を八木に託し、密に二人の家臣をも大坂に差上せて、
哀訴したる事もありたれば、西郷の申す所必定其功を奏

すべしと思はれて、急ぎ岩國に赴き、吉川を説諭すべき旨を仰付られたり、吉之介承はりて、京都の留守居役吉の宮内次官吉井友美君井幸輔と共に、夜を日に繼で岩國に馳下り、吉川に對面して大義を説き、細に順逆利害を論したるに、監物も西郷の説に従ひて、尽力すべしと奮發したり、

二六七 英国公使麩島ニ来ル (外国新聞抄訳)

二六七ノ一

第一着ニ事ヲ起スモアレハ、人皆之ニ效ヒ、其發起人ヲ尊敬シ、随テハ外国ノ貿易ヲ妨ル日本貴族ノ旧習タル閉鎖ノ惡弊ヲ、一掃スルコト容易ナルヘシ、○大名ノ國ハ各々立君特載(獨裁也)ノ制度ニテ、其大名ノ支配スル処ニアラサレハ、自カラ日本人ト交易ヲ為スヘカラス、又舊ニ大名ノミナラス、其國ノ商人ニテ外国人ト交易セント欲スルト雖トモ、是亦自由ナラス、○余輩ノ見込ニテハ、此度ノ尋問ハ甚々大切ナルコトニテ、從來不列顛ノミニストルガ日本國ニ行タル未曾有ノ名策ト云フヘシ、○人ノ説ニハ佛蘭西人ガ、大君江專売ノ利ヲ得セシメタリト云ヘトモ、余輩ノ聞ク所ニテハ、此利モ此初ノコトナリ、余思フニ仏人モ大ナル心得違ナ

リ、仏人カ貿易ノ權ヲ執リ、之ヲ專ラニセント欲スルトモ、其終ニ至テ之ヲ嘗ヘハ、黄金ノ卵ヲ生ム鷹ヲ殺セシガ如クナルヘシ、○大君ハ十五ヶ月以前首府ヲ出立シタレトモ、其婦ルトキニハ、出立ノトキト同様ナル有様ニアラスシテ、同様ナル權威ナキコト必セリ、大君ハ卑怯ニシテ時日ヲ延バシ、止ヲ得スシテ長州ト戰爭ニ及ヒタルニ、敵ハ然ラス、去ルニケ年ノ間ニ、カヲ尽シテ不虞ニ備ヘ、其武器モ江戸ノ君ニ比スレハ、更ニ利ナリ、但シ長州ハ、不正ナル役人貿易ノ筋ヨリ武器ヲ買ハスシテ、正シキ商人ノ手ヨリ之ヲ得タリ、且長州ハ自國ニ居テ、軍備軍用ノ本ニ近ク、敵ノ動靜ヲ精密ニ承知スルノ便アルカ故ニ、其利極メテ多シ、○而三度ニ戰ノ外ハ、大君ノ兵諸方ニテ敗走シタルコト疑ナシ、今日下ノ關ヨリ慥ナル便ヲ聞クニ、長州ハ大君方ナル小倉侯ヲ侵シ、其兵ヲ小倉ニ上陸セシメテ、二三ヶ所ヲ攻取タリト、○コンホート、フヒルム船名港ヲ出帆シテ、事件ヲ見物スル為メ、下ノ關ニ赴キタリ、大君ノ諸將長州ノ領分ヲ攻テ、全ク敗走シタルハ、世人ノ知ル所ナルヘシ、○余輩世評ヲ聞クニ、御門及ヒ

其議事官ハ、外国ト新ニ条約ヲ取結バントテ、心配セル由ナリ、日本ノ南方ニ於テハ、在来ノ条約ヲ重ンスル者ナク、此条約ハ江戸ノ人ナル一諸侯ノ約束書ナリト云ヘシ、○ジャツハンタイム新聞紙ノ名中ニ、大君一人ト条約ヲ結フノ代ニ、御門及ヒ諸大名ト新ニ結約セントノ説ヲ称譽セルケ条アリ、此ケ条ハ既ニ翻訳ヲ経テ、高貴ノ人ノ間ニ流布シテ、其人ニモ大ニ此説ヲ喜ヘルハ、世人ノ知ル所ナルヘシ、

右ハコ、ニ記載スル本旨ニアラス、乃チ今コ、ニハ鹿兒島尋問ノ次第ヲ略記シテ、世ニ布告スヘシ、

二十四日マツプリンセスロイアル、セルペン船名ト長崎ヲ

出帆シ、其翌日Of the 25th of Feb.ハルリパルクス其婦人ト共ニサラミス船ニ乗テ、同出帆セリ、

○二十六日午後、鹿兒島ヲ去ルコト八九里〔卷〕〔谷山也〕ノ所ニ投錨

シ、午後第二時蒸氣ヲ焚キ、船行ノ列ヲ正シクシテ、台場近ク進ミ入り、錨ヲ投ヌルト同時ニ、陸上ノ台場

ノ英ノ国旗ヲ引揚ケ、十五発ノ祝砲ヲ為セリ、プリンセスロイアルニテモ、即時ニ之ニ応砲セリ、暫シテ我方ニテモ日本ノ国旗ヲ揚テ、十九発祝砲セシニ、薩摩侯ヨリ一発毎ニ之ニ応砲セリ、斯ク互ニ祝砲ヲ發シテ

後、薩侯ノ家老船ニ尋問シ、初日ノ事ハコレニテ終レリ〔卷〕〔桂右衛門〕

○午後シルハルリパルクス并ニ水師提督諸士官ト共ニ上陸シ、薩摩侯ノ家来大勢ニテ之ヲ警衛シテ、市中〔卷〕〔市町右衛門ノ辺〕ヲ巡行セシニ、其様子他ノ日本ノ都府トハ更ニ相異ナリ、

其一ケ条ヲ言ヘハ、江戸市中ニテ外国人ヲ見レハ、往來ノ人皆苦々敷顔色ヲ為シ、或ハ大声ヲ發シテ、粗暴ナル挙動ヲ示スノミナルニ、鹿兒島ニテハ然ラス、市

中ノ人余輩ニ逢ヘハ、笑ヲ含ミ懇親ニ挨拶ヲ為シ、談話甚愉快ナリ、○途中ニ於テ休息シ、チャンパン杯ヲ

飲ミ、日暮船ニ降りタリ、本日ハ遠路ヲ徘徊シテ、稍ヤ臥草タレトモ、初テ南方一大諸侯ノ首府ニ至リ、愉快ヲ尽シタリ、○船ニ降りシ処、留主中薩侯ヨリ使者

ヲ遣シテ、英船滞留ノ間ニ、同國ノ士官十五人、若シクハ式十人計饗応イタシ度、就テハ明朝薩侯躬カラミニストル并ニ水師提督ヲ為尋問船ニ來リ、其帰りニ同

道スヘキ趣ヲ述ヘタリ、薩摩侯ノ位ヲ以考レハ、此一事ハ其礼敬ヲ示ス証ト云フヘシ、大君カ傲慢ノ挙動ニ比スレハ、同日ノ論ニアラス、且大君ハ其身体モ、其精心モ南方ノ君ト相反シテ、之ニ及バスルコト遠シ、

翌日第十一時之頃、薩摩侯小船ニ乗テプリンセスロイヤルニ來リシニ付、我船ニテハ帆船ニ水夫ヲ登ラセ、番兵ヲ列ラネ、音楽ヲ奏シ、祝砲ノ終ルマテ、侯ハ船ノ舳ノ方ニテ待合セリ、侯ノ様子ヲ見ルニ身体長大、骨格強壯ニシテ、自ラ君將ノ威風ヲ備ヘリ、其顔色純粹ノ日本人ニテ、眼目長シテ斜ナリ、嘗テ日本人ノ凶画ニ見タルト異ナルナシ、島津三郎^{久光}ハ人ノ云ル如ク、侯ノ叔父ニハアラスシテ、実ハ其父ナリ、此人ハ薩侯ヨリモ身体短クシテ肥大、其挙動ハ薩侯ノ如ク、威儀正シカラサレトモ、勇武ニシテ君主ノ風アリ、蓋シ三郎ハ、日本國中ニテ最モ才略アル政事家ノ一人ト云ヘル人物ナリ、

船ノ祝砲終リ、薩侯微笑シテ台場之方ニ向ヒシニ、此時台場ヨリ烈シク応砲シ、其発砲甚整正ナリ、斯ク双方ノ祝砲終リ、侯ハ下テ水師提督ノ部屋ニ入り、暫クシテ我士官十七人ト共ニ上陸セリ、
余輩上陸シテ、海湾ニ面スル侯ノ夏宮^{〔磯別邸〕}ニ至リ、此所ノ海岸ニハ、銅製ノ十ポンド・十二ポンド砲ヲ備ヘリ、ハルリパルクス上陸スルトキニ、十五発祝砲セシニ、此時ハ青色ノ旗ヲ掲クヘキ筈ナルニ、白ノ旗ヲ揚ゲタ

ルハ心得違ヒナリ、○次テ一統城内ニ入り、ハルリパルクス并水師提督ハ、シーボルトヲ召連レ、奥座敷ニ通シ、嶋津三郎并ニ薩侯ト語話シ、薩侯格別ニ其志願ヲ述ヘ、既往之事ハ既往ノコトトシテ、^{〔卷〕〔文久三年七月ノ戦事ヲ云ヒタルナラン〕}後來双方ノ間ニ好誼懇親アラントノ趣ヲ告ゲタリ、

此談判之間、他ノ士官ハ別間ニ扣ヘ、家老ニテ取持ヲ為シ、半時計ニシテ談判終リ、一統一ト間ニ集リテ饗応アリ、此饗応ニハ四十五品ノ珍味ヲ供ヘ、其調理日本ノ精巧ヲ極メ、日本酒・チヤンパン・セリ・ヒール備ラサル者ナシ、長キ飯台ノ一方ニ英客列座シ、一方ニ三郎・薩侯及ヒ家老兩人席ニ就キ、薩侯委任ノ大臣ナル小松ハ、飯台ノ上ニ座シ、侯ノ伝役ハ下ノ端ニ座ス、○斯ク飯食談笑シ、楽ヲ極メルコト五時計リニシテ宴ヲ撤セリ、酒宴ノ間ニ音楽ヲ奏スルコト一時計ナリ、ハルリパルクス主人ニ向ヒ、際限モナキコトニ付、宴ヲ撤シテ園庭ヲ見物センコトヲ請ヒ、急キ宴ヲ罷テ園ニ至リシニ、山水明媚之ヲ觀テ、帰ルコトヲ忘ル、程ノ景色ナリ、此処ニテ烟ヲ吹キ、城ノ前ニ出テシ所ハ、長サ二百ヤールト・幅六十ヤールト計リノ調練場^{〔卷〕}ニテ「調練場ハ磯別邸前ノ広地ナリ」、本国ノ

兵卒訓練セリ、夫ヨリ大砲ノ的打ヲ見物シ、日暮ニ及テ船ニ帰リタリ、

翌日製造局ニ行キシニ、其機関常ニ異ナラス、午後第

四時侯ノ兄弟五人ニテ歐羅巴流ノ料理ヲ馳走セリ、兄

弟ノ中最モ幼ナル者八十歳、何レモ愛スヘキ童子ナリ、

此馳走ニ最モ奇ナルハ、小豚三疋ヲ出シタルコトナリ、

午後第八時漸クニシテ宴ヲ撤シタリ、

第三日プリンセスロイヤル船ニテ、訓練発砲シテ、薩

侯及ヒ其五兄弟ニ見物セシメタリ、但シ三郎ハ不快ニ

テ出席ナシ、三四時ノ間実弾・空弾ヲ発シ、三百ヤ

ルト乃至千八百ヤルトノ距離ニアルのニ当リ、其有

様日本人ヲ驚カシタリ、大砲ノ打カタ終テ、水師提督

薩ノ客ヲ饗応シ、其翌日四五百人ノ水卒ヲ上陸セシメ

テ、訓練ヲ示サント其用意ヲ為シタレ共、訓練場狭ク、

僅ニ百五十人ヲ容ルベキガ故ニ、乃チ其人數ヲ上陸セ

シメ、日暮ニ至ルマテ種々訓練シタリ、此時ハハリパ

ルクスハ、サラミス船ニ乗テ出帆セントシ、別ヲ告ケ

タルニ、嶋津三郎ハハリパルクスノ手ヲ取テ別ヲ惜

ミ、速ニ再会センコトヲ懇ニ述ヘ、終テ台場ヨリ十五

発祝砲セリ、

余輩終ノ日ノ楽モ亦少カラス、此日ハ大ニ遊猟シ、朝

第三時ヨリ始メ、英ハ二十人・日本人四拾人ニテ、海湾

ヨリ六里計ノ地ニ到リシニ、此地ハ横濱近傍ノ地勢ニ

似テ、樹木繁殖テ猪・猿ノ類多シ、獵犬勢子ヲ以テ追立

テ、鹿七疋・猪四疋ヲ獲タリ、○本日ハ家老ニテ余輩

ヲ饗応シ、翌日告別シテ出帆ノ時水師提督ノ旗章ニ祝

砲シ、プリンセスロイヤルヨリ之ニ応砲セリ、○薩州ヨ

リ送リタル贈物ノコトハ、今コ、ニ記サ、ルガ故ニ、世

人之ヲ他ノ手筋ヨリ聞クヘシ、余輩又初ニ反リテ、コ

、ニ云フコトアリ、シルハハリパルクスガ此度鹿兒島

ニ行キシハ、甚善キ取計ナリ、パルクスモ此度薩摩ヲ

見テハ、以前思フ所ニ案外ナルベシ、薩摩侯ハ日本国

中最モ文明寛大ノ君ト云フベシ、近來其行フ所ノ処置

ハ、商人ノ為メ便利ナルモノニテ、之ヲ施行スルコト

速ナレバ、日本貴族ノ手本トナルヘシ、〔中略カ〕

二六七ノ二

薩州機密ノ家來人合衆国江赴キタル事〔私曰木藤

市ナルベシト云々〕

本月十二日、カラ、シユーチン〔三カ〕船横濱ヨリサンフランシ

スコニ向テ出帆スルトキ薩州ノ家來人、此船ニ乗テ合

衆国〔合衆國ニアラス英、仏ノ國ナリ〕江赴キタリ、此家来ハ元ト江戸詰ノ家老ニテ、薩

侯機密ノ臣ナリ、其乗船ノトキ秘密シタル所以ハ、先

般日本人ヲ勝手ニ外国江出トノ布告書アレトモ、其実

ハ然ラサル故ナリ、先日亜米利加コンシユルノ妻、日

本ノ小使ヲ連レテ帰国スルトキモ、コンシユルハ多少

ノ手数ヲ費シテ、漸ク其免許ヲ得タリ、又英國ノ商人

ガ日本ノ小使ヲ連レ帰ラントセシトキハ、日本政府ニ

テイマダ印鑑出来ザル旨ヲ口実トシテ、之ヲ拒ミタリ、

總シテ御老中ノ約束ニテ、信実ナキコト此一事ニテ明

カナリ、○此度薩州ノ家来ハ、亜米利加・歐羅巴ニテ

二ケ年モ逗留スル積ナリ、薩州ヨリハ別ニ四人亜米利

加江行人ハアレハ、此度当所ヨリ出帆セシ者、ニユー

ヨルクニテ右四人之者ト面会スヘシ〔私日種福壽等ノ士〕〔種

ハ種ケ島敬介、陽ハ湯地定基、吉ハ吉原矢二郎、等ハ

ナラン平〕

二六七ノ三

シャツパンタイム別段新聞千八百六十六年

第八月十四日出板

昨日午後第一時、英船サラミス及ヒプリンセスロイヤル
入津シ、シルハルリパルクス其婦人ト共ニ帰港セリ、余

輩以前ニ云ヘル如ク、ハルクスハ鹿兒島ニ行テ、薩摩侯

ヲ尋問シ、懇親ナル待遇ヲ受ケ、薩侯並ニ侯ノ叔父江モ

館ニ面会セリ、又ハルクスハ他ノ一諸侯ヲモ尋問セリ、

此諸侯ハ外国人ノ為メ筋ヲ謀リ、同盟論ヲ目論見、全日

本国外國ヲ外國ノ貿易ニ開カサントスルモノニテ、即

チ伊豫ノ宇和島侯ナリ、○又ハルリパルクスハ、二日ノ

間下ノ關江逗留シ、其様子ヲ目撃シタルニ先般ヨリ將軍

ノ兵ニテ、下ノ關ヲ攻取タリトノ評判ハ、皆虚説ナリ、

戦争ニ互勝敗アレトモ、一般ニ長州ノ方勝利ナリ、長州

ノ兵ハ石州ニ於テ、御大老ノ子井伊掃部頭及ヒ神原ニ伐

チ克チ、之ヲ追テ三百人ヲ殺シタリ、石州ハ長州領ノ北

方ニアレハ、長門侯ハ自國ノ界ヨリ伐テ出タルコト、見

ユ、又南方ニ於テハ、松平隠岐守長州領ニ攻入ラントシ

テ、大島ヲ取りタレトモ、長州方ヨリ之ヲ追出サントシ

兵ヲ送リシニ、其兵ノイマタ至ラサル前ニ、嶋ヲ棄テ遁

逃シタリ、

薩州ハ四万五千人ノ人数ヲ京師ニ置キ、御老中モ此度ハ

薩州ガ將軍ニ対シテ、敵意アル趣ヲ布告シタリ、肥前侯

ノ領分ハ、薩摩侯ト長州トノ間ニアリ、此人モ從來外国

人ノ為筋ヲ謀リ、同盟論ヲ助クル者ニテ、近傍ノ大名ヲ

結合セントセリ、故ニ日本ノ南方ハ一統同盟ニ定ルベシ、
余輩右ノ事件ヲ布告スルハ、大ニ満足スル所ナレバ、諸
商人モ必ス之ヲ読テ喜悦スルベシ、從來外国ト日本ノ貿
易ヲ妨クル專利ノ旧弊ヲ廢却スルニ、其機會遠キニアラ
ス、

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

二六八 小松帶刀上京

小松帶刀

右ハ御内用有之儀有之、御供ノ内ニテ上京被仰付、仕
廻次第急ニテ被差立、左候テ追々被差立候 御旗本并
諸郷人数致指揮候様被 仰付候、

八月

式部〔朱〕「川上」